

両宮山古墳 2

史跡両宮山古墳墳丘裾保存整備工事に伴う確認調査

2018年

岡山県赤磐市教育委員会

序

本書は、岡山県赤磐市穂崎・和田に所在する史跡両宮山古墳の墳丘裾保存整備のための工法等を検討することを目的として実施した、平成25～27年度の3か年の発掘調査成果を取りまとめたものです。

史跡両宮山古墳は、整美な墳丘と水をたたえた内濠の存在によって広く知られており、平成14～16年度の発掘調査において外濠がめぐることが判明し、畿内の大王墓に準じた墓域を有していることが明らかになりました。しかしながら、長年にわたる内濠の波浪により墳丘裾が浸食され、崖状の崩落が進行しています。こうしたことから墳丘の保護・保存を図るため、本市では墳丘裾の保護対策を講じることとしました。

調査の結果、墳端や内濠の堆積状況等の情報や第1段目を中心に墳丘構築方法について明らかになりました。これまで墳丘の調査が行われることがなかった本墳において、多くの新知見を得ることができました。巨大古墳の構造を解明する手がかりの一端が得られたと考えられます。

これらの成果を収めた本書が文化財の保護・保存のために活用され、また地域の歴史を学ぶ上で広く役立つならば幸いに存じます。

発掘調査の実施、報告書の作成に際しましては、第二次山陽遺跡整備委員会の先生方、文化庁をはじめ、関係各位ならびに地元の方から多大な御支援と御協力を賜りました。記して厚く御礼を申し上げます。

平成30年2月

赤磐市教育委員会
教育長 内田 恵子

例 言

- 1 本書は墳丘裾保存整備工事に伴う国史跡両宮山古墳の第4～6次調査報告書である。
- 2 両宮山古墳は岡山県赤磐市穂崎790他に所在する。
- 3 調査は文化庁から国庫補助金（国宝重要文化財等保存整備費補助金）を得て赤磐市教育委員会が実施した。
- 4 調査は平成25～27年度の3か年にわたって実施した。
第4次調査は平成26年1月14日から平成26年3月13日まで実施し、88.8㎡を調査した。
第5次調査は平成27年1月14日から平成27年3月13日まで実施し、96.1㎡を調査した。
第6次調査は平成27年12月1日から平成28年2月29日まで実施し、45.5㎡を調査した。
第1～3次調査の成果については『両宮山古墳』（2005・赤磐市文化財調査報告第1集）を参照いただきたい。調査年次は、平成14～16年度調査からの通番としている。
- 5 第4次調査を高田恭一郎・有賀祐史・畑地ひとみ、第5・6次調査を金田善敬・有賀・畑地が担当して実施した。
- 6 本書作成のための整理作業は、平成28・29年度に赤磐市教育委員会において行った。
- 7 調査にあたっては第二次山陽遺跡整備委員会をはじめ文化庁文化財部記念物課・岡山県教育庁文化財課から指導および助言を得た。
- 8 本書の執筆は、第1～第4章第1節、第4章第3節を有賀が、第4章第2節を金田が担当し、全体の編集は有賀が行った。
遺物の実測は、石田知子が行った。
- 9 本書に掲載した出土遺物・実測図・写真等は赤磐市教育委員会（岡山県赤磐市下市337）に保管している。

凡 例

- 1 本書に用いた高度値は海拔高であり、方位は平面直角座標第Ⅴ系の座標北である。調査地付近における磁北は西偏7°42′を測る。報告書抄録に記載した経緯度は世界測地系（平面直角座標第Ⅴ系）に準拠している。
- 2 遺構および遺物の縮尺は各図面に記しているが、基本的には次のとおり統一している。
トレンチ平・断面：1/60 遺物：1/4
- 3 掲載した土器のうち中軸線の両側に白抜きのあるものは、小片のため径が不確実なものである。
- 4 註は、各節ごとにそれぞれの末尾にまとめている。
- 5 土層断面図、遺物観察表に用いた土色は、『新版 標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財日本色彩研究所色票監修）を参考にした。
- 6 図2は国土地理院発行の1/50,000地形図「和気」「岡山北部」を複製・加筆したものである。
- 7 図版20～22は平成29年12月に実施した「航空レーザ計測」による成果で、現地での補備測量等を行っていない。
- 8 時代・時期区分は一般的な政治史区分に準拠し、文化史区分・世紀を併用している。
- 9 本書では、内濠と外濠の間の周堤のことを中堤と呼称している。外濠の周囲に外堤の存在が認められていないため、内堤・外堤の用語は用いていない。
3段築成の墳丘については、下段を第1段、中段を第2段、上段を第3段と呼び、それぞれが斜面とテラスで構成されている。
- 10 本書掲載の遺構図中の地山等に付したトーンは、基本的に以下のとおりに統一している。



地山



盛土



盛土 (土塊積み)

目 次

序
例言
凡例
目次

第1章 調査の経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過と体制	2
第2章 遺跡の位置と環境	6
第1節 地理的環境	6
第2節 歴史的環境	6
第3章 調査の概要	11
第1節 調査の概要	11
第2節 後円部	16
第3節 くびれ部・造り出し	22
第4節 前方部	28
第5節 中堤	51
第4章 総括	53
第1節 墳丘の構造と構築方法	53
第2節 墳丘の築造企画	63
第3節 墳丘裾の自然崩落	67
遺物観察表	69
図版	
報告書抄録	
奥付	

図目次

図1	遺跡位置図 (1/2,000,000)	6	図20	T63 (1/60)	37
図2	周辺遺跡分布図 (1/50,000)	7	図21	T63出土遺物 (1/4)	38
図3	両宮山古墳周辺図 (1/12,000)	9	図22	T64 (1/60)	39・40
図4	第1～3次調査等による 墳丘の復元 (1/2,500)	13	図23	T64・66出土遺物 (1/4)	42
図5	トレンチ配置図 (1/2,000)	15	図24	T65 (1/60)	43
図6	T53 (1/60)	17	図25	T67・68出土遺物 (1/4)	44
図7	T73・55出土遺物 (1/4)	18	図26	T66 (1/60)	45・46
図8	T54-73 (1/60)	19・20	図27	T67 (1/60)	47・48
図9	T55 (1/60)	21	図28	T68 (1/60)	49
図10	T56 (1/60)	23	図29	T69出土遺物・表面採集遺物 (1/4)	51
図11	T56出土遺物 (1/4)	24	図30	T69 (1/60)	52
図12	T57-72 (1/60)	25・26	図31	T70 (1/60)	52
図13	T57・72出土遺物 (1/4)	27	図32	前方部前面の傾斜変換点 (1/1,000)	54
図14	T58 (1/60)	29	図33	断面図 (1/100)	55・56
図15	T59 (1/60)	30	図34	前方部両側面 断面図 (1/100)	59・60
図16	T60-71 (1/60)	31・32	図35	前方部前面 断面図 (1/150)	59・60
図17	T61 (1/60)	34	図36	墳丘の復元 (1/3,000)	62
図18	T60・71・61・62出土遺物 (1/4)	34	図37	両宮山古墳の築造企画	63
図19	T62 (1/60)	35・36	図38	両宮山古墳の築造企画 (1/5,000)	65
			図39	前方部前面 平・断面図 (1/600・1/200)	68

表目次

表1	文化財保護法に基づく提出書類一覧	5	表3	斜面角度と第1段テラス標高	57
表2	発掘調査履歴一覧	12	表4	両宮山古墳の計測値と区画数	64

図版目次

図版1	1 両宮山古墳全景 (南西から)	図版4	1 T73 (南西から)
	2 墳丘 (南から)		2 T56 遺物出土状況 (南から)
図版2	1 後円部 (西から)		3 T56 (南西から)
	2 南西造り出し (北西から)	図版5	1 T57 (南西から)
	3 前方部 (南から)		2 T72 (南西から)
図版3	1 T53 (南西から)	図版6	1 T72上半 (南西から)
	2 T54 (南から)		2 T72下半 (南西から)
	3 T55 (南から)		3 T58 (南西から)

- | | | | | | |
|------|---|--------------------|------|-----------------------|-----------------------------|
| 図版7 | 1 | T58 (南から) | 図版14 | 1 | T66上段 (南から) |
| | 2 | T59 (南から) | | 2 | T67下段 (北東から) |
| | 3 | T60 (南から) | 図版15 | 1 | T67下段 土塊積み (東から) |
| 図版8 | 1 | T60上半 (南から) | | 2 | T67下段 土塊積み (北東から) |
| | 2 | T60下半 (南から) | | 3 | T67下段 盛土 (南東から) |
| | 3 | T71 (南西から) | 図版16 | 1 | T67上段 第1段テラス～第2段斜面
(東から) |
| 図版9 | 1 | T71上半 (南西から) | | 2 | T67上段 第2段斜面 (東から) |
| | 2 | T71下半 (南西から) | | 3 | T67上段 第1段テラス (東から) |
| | 3 | T61 (南から) | 図版17 | 1 | T68 (東から) |
| 図版10 | 1 | T62下段 (南から) | | 2 | T68 盛土 (東から) |
| | 2 | T62下段 土塊積み (南西から) | | 3 | T69 (南東から) |
| | 3 | T62下段 溝 (南西から) | | 4 | T70 (南東から) |
| | 4 | T62下段 傾斜変換点 (南から) | 図版18 | 1 | 古墳時代以前の遺物 |
| 図版11 | 1 | T62上段 (南から) | | 2 | 中世の遺物 |
| | 2 | T63 (南東から) | 図版19 | 1 | 近世の遺物 |
| | 3 | T63 溝 (南から) | | 2 | 和田村山絵図 |
| 図版12 | 1 | T64下段 (南東から) | | 3 | 和田村分検見取 |
| | 2 | T64上段 (南東から) | 図版20 | 両宮山古墳オルソ画像 | |
| 図版13 | 1 | T64上段 残存墳丘面 (南東から) | 図版21 | 両宮山古墳赤色立体地図 | |
| | 2 | T65 (南から) | 図版22 | 両宮山古墳測量図 (航空レーザ計測による) | |
| | 3 | T66下段 (南から) | | | |

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

本書に報告した平成25～27年度にわたる3か年の発掘調査は、長年の内濠波浪による墳丘裾の浸食・崩落から墳丘を保護する対策を検討するための確認調査である。両宮山古墳は、昭和2年（1927）に国史跡に指定され、水をたたえた周濠をもつ優美な前方後円墳として知られてきた。水濠を有する古墳の多くは奈良県や大阪府に所在する陵墓等であり、経年の波浪により墳丘裾の浸食・崩落が問題となっている。そのため、宮内庁では継続的に墳丘裾の護岸工事を行っている。本墳も例外でなく、内濠波浪の影響を受け、同じく浸食・崩落が進んでいた中堤については、平成18・19年度にその保存工事を実施したところである。

このたびの発掘調査にあたっては、第二次山陽遺跡整備委員会や文化庁文化財部記念物課、岡山県教育庁文化財課をはじめ、関係各位ならびに地元の方から多くの御指導と御教示をいただいた。

本墳が墳丘裾保存整備工事を実施することになった経緯を以下に述べる。

両宮山古墳は、「環濠及壘を存せる前方後円型の古墳にして（中略）此の地方に於ける壮なる古墳にして最も善く保存せられたるものの一に属す」として、昭和2年4月8日内務省告示第315号で国史跡に指定された。その後、昭和53年2月8日文部省告示第23号で後円部北側に位置し陪塚と考えられる和田茶臼山古墳が追加指定を受けている。

平成8年度には山陽町遺跡整備委員会を立ち上げ、平成8・9年度に本墳や隣接する備前国分寺跡を中心とした西高月遺跡群の調査研究、整備活用の指針の協議・検討を行った。その協議成果をまとめた中で⁽¹⁾、本墳は早期の保存活用整備が望まれる整備拠点地区に設定されている。平成13年度には、新たに第二次山陽町遺跡整備委員会を立ち上げ、具体的に両宮山古墳等の調査計画について指導を仰ぎ、追加指定等に向けて動き出した。なお、旧山陽町は平成17年3月7日に旧赤磐郡内の赤坂町、熊山町、および吉井町と合併して赤磐市となり、第二次山陽町遺跡整備委員会は第二次山陽遺跡整備委員会に名称変更した。

史跡隣接地での開発計画が発端となり行われた平成14～16年度の確認調査（第1～3次調査）において、周囲に外濠がめぐることが判明し⁽²⁾、平成18年1月26日文部科学省告示第9号で後円部北側中堤部分から一部外濠に及ぶ範囲が追加指定を受けた。しかしながら、追加指定は外濠の一部までにとどまり、追加指定が望まれる地域が未だ多く残っている。さらに、隣接の史跡備前国分寺跡は公有化を9割以上果たし、本墳に先行して保存整備事業に着手しているところで、この事業後に事業期間を設けている本墳については具体的な遺構整備や公有化計画の策定に至っていない現状である。本墳の整備事業の長期化が予測される中、内濠波浪による斜面浸食および崩落の対策は喫緊の優先課題となっていた。平成16年に通過した台風21号の大雨は中堤に4か所の崩落を生じさせる等の大きな影響を出した。このため、平成18・19年度には中堤斜面の浸食と肩部の崩落、堤体からの漏水に対応するため、中堤保存工事を実施した⁽³⁾。工事は耐久性、景観等に配慮した工法とし、真砂土で保護し、遮

水シートや吸出防止マットを敷設した上で、再生クラッシャーランを置き、表面は割栗石で被覆した。工事に際して中堤肩部に生えていた樹木の伐採を行ったことにより、中堤から墳丘への見通しがきくようになり、景観上も望ましいものとなった。

中堤保存工事後、現在まで中堤のき損は認められないが、対岸となる墳丘裾の浸食・崩落が顕著となってきたため、その保護対策を検討する基礎資料を得る目的で、平成25～27年度の3か年で第4～6次調査を実施することとなった。

なお、『山陽町遺跡保存管理計画書（基本計画）』策定後15年以上が経過し、本墳を取り巻く現状や社会的要請の変化により、この基本計画を見直す必要があり、平成27年度に本墳の保存管理計画を策定している⁽⁴⁾。

註

- (1) 山陽町1998『山陽町遺跡保存管理計画書（基本計画）』
- (2) 宇垣匡雅2005『両宮山古墳』赤磐市文化財調査報告第1集 赤磐市教育委員会
- (3) 宇垣匡雅2008『史跡両宮山古墳中堤保存工事報告書』赤磐市文化財調査報告第2集 赤磐市教育委員会
- (4) 赤磐市教育委員会2016『史跡両宮山古墳保存管理計画』

第2節 調査の経過と体制

(1) 調査および報告書作成の経過

本書に収載した両宮山古墳の調査および報告書作成は、平成25年度に第4次調査および整理作業、平成26年度に第5次調査および整理作業、平成27年度に第6次調査および整理作業、平成28年度に全体整理作業、平成29年度に編集作業・報告書刊行といった工程で実施した。次にその経過を記す。

平成25年度

第4次調査を平成26年1月14日に着手し3月13日に終了した。内濠に面した墳丘西側の裾を対象として、後円部からくびれ部・造り出しを経て前方部南西側面まで、T53～61の計9本のトレンチを設定して調査した。

後円部のT53～55は溜め池の取水点に近いので、内濠の堆積土が厚く、墳端を推定する傾斜変換点は確認できなかった。堆積土の下から地山の斜面を検出したが、墳丘第1段の斜面は大きく失われていると考えられる状況であった。くびれ部・造り出しのT56・57においても、内濠の堆積は深く、墳端を確認できなかった。しかし、中世の土師器等を包含する堆積層を確認し、その下にそれよりも時代が遡る堆積土が地山の斜面上に認められたため、さらに下の墳丘第1段斜面は比較的古い様相を示していると考えられた。前方部南西側面のT58・59でも地山の斜面を検出し、T60・61では、弥生土器を含む盛土を施して第1段斜面を構築していた。

第4次調査では、平生溜め池水面下になる第1段斜面のみを調査対象としていたが、次年度以降は第1段テラスまで調査区を延長して、斜面角度や高さ等の情報を得る必要性が感じられた。

調査期間中、3月1日に現地説明会を開催し100名の参加を得た。

整理作業は出土遺物の台帳作成、洗浄作業、調査図面・写真の整理作業、実績報告書作成を行った。

また、前方部前面の墳丘裾について自然崩落の現状を記録し保存工事の資料とするため、地上からの三次元計測を委託した。

平成26年度

第5次調査を平成27年1月14日に着手し3月13日に終了した。第4次調査に引き続き、前方部前面の第1段斜面およびテラスの残存状況や内濠の状況について、T62～66の計5本のトレンチを設定し調査した。

T62・64～66において墳端を反映している可能性のある地山の傾斜変換点を確認した。T62・63では、後世に前方部前端に南西－北東方向の溝が掘削されており、T63では比較的新しい段階で第1段テラス面上部の盛土が墳丘裾側へ大きく崩落している状況が認められた。T62では、地山の上に土塊状の盛土を施し、第1段斜面を造っていることが判明した。さらに、第1段斜面と連続して盛土を行い、テラス面を形成していることが分かった。第1段テラスから第2段斜面へ向かう傾斜変換点を検出した。前方部では、弥生時代の包含層等が盛土として認められることを追認した。T64・66においては、前方部にある伊勢神社の造成面を造るために近世に削られ押し出された土が認められた。その下から第1段テラス面の残存部を確認した。

調査期間中、2月28日に現地説明会を開催して140名の参加を得た。

整理作業は出土遺物の洗浄作業、調査図面・写真の整理作業、実績報告書作成を行った。

平成27年度

第6次調査を平成27年12月1日に着手し平成28年2月29日に終了した。T67～73の計7本のトレンチを設定し調査した。T67・68は前方部北東側の第1段斜面およびテラスの残存状況や内濠堆積土の状況、T69・70は東側の中堤の内濠堆積土の状況、T71～73は第4次調査で実施した第1段斜面のトレンチT54・57・60を墳丘上に延長したもので、第1段テラスから第2段斜面までを対象とした。

後円部のT73は、墳丘主軸と直交する方向でトレンチを設定し、第1段テラスおよび第2段斜面の検出を目的とした。しかしながら、近世以降の開墾による削平が認められ、上部から押し出された土が厚く堆積しており、後円部西側の墳丘の残存状況はよくないと考えられるものであった。T67・71では前方部の北東・南西側面の第1～2段斜面の盛土の状況を確認した。T67の第1段斜面下位においては、土塊状の盛土を確認し、第1段テラス付近では平坦面を形成する盛土が見られた。第2段斜面の表面に近い部分には、斜面に沿って化粧土のように土が盛られていることを把握した。T72では、造り出し中央にトレンチを設定し調査を行った。現在の造り出しは2段で高く築成されているように見えるが、2段目以降は近世以降の造成による可能性が高いことが分かった。したがって、造り出しは第1段テラスあるいはその下に取り付くと推測できる等、大きな成果を得た。中堤を対象としたT69・70は湧水のため深く掘ることができなかったが、内濠堆積土が厚く認められた。

これまで外表施設として葺石・埴輪が確認されていなかったが、このたびの第4～6次調査においても古墳に関わる遺物の出土が認められなかった。

調査期間中、2月13日に現地説明会を開催して、雨天の中60名の参加を得た。

整理作業は出土遺物の洗浄作業、調査図面・写真の整理作業、実績報告書作成を行った。

当該年度には、平成27年3月7日に赤磐市制施行10周年を迎えたことを記念して、市民への普及啓発事業として、平成27年8月22日に史跡シンポジウム「両宮山古墳とその時代」を開催し、295名の

参加を得た⁽¹⁾。

平成28年度

年度を通じて、第4～6次調査の整理作業を実施した。遺物整理は抽出と復元作業を行い、順次実測を実施した。図面整理は遺構実測図をまとめて下図を作成し、順次浄写を行った。また、調査成果をもとに第二次山陽遺跡整備委員会に墳丘裾保存整備工事の工法について諮り、工事基本設計を策定した。

平成29年度

年度を通じて、第4～6次調査の全体編集作業を実施した。遺物整理は実測図の浄写を行い、遺物写真は適宜撮影を進めた。原稿の執筆や図・表類の作成作業は、編集を勘案しながら割付を調整して順次行った。12月にヘリコプターにより墳丘の航空レーザ計測委託を行い、精密な墳丘測量図を作成した。編集作業終了後、10月に契約・入稿し、3回の校正・1回の色校正を経て、2月に報告書を刊行した。

(2) 調査および報告書作成の体制

両宮山古墳の調査および報告書作成において、第二次山陽遺跡整備委員会は、各年度2回開催され、委員の方々に調査方針・計画や検出遺構の評価等について検討いただき、多くの教示と指導を得た。調査に至る協議や調査の過程では、文化庁文化財部記念物課、岡山県教育庁文化財課の御指導と御助言を得た。また、調査にあたっては地元の方々をはじめ、多くの方々から御協力をいただいた。

さらに、本報告書作成の過程で、遺物等について諸氏に鑑定等を依頼し、御指導を得た。記して御礼申し上げる。次にその体制を記す。なお、職名は該期の最終年度のもののみを挙げている。

第二次山陽遺跡整備委員会

平成25～29年度

亀田修一（岡山理科大学生物地球学部教授）

箱崎和久（独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所）

平成25～28年度

伊藤 晃（元岡山県古代吉備文化財センター参事）

狩野 久（元岡山大学文学部教授）

河本 清（元くらしき作陽大学食文化学部教授）

中村 一（京都大学名誉教授）

平成29年度

今津勝紀（岡山大学大学院社会文化科学研究科教授）

清家 章（岡山大学大学院社会文化科学研究科教授）

平井泰男（元岡山県古代吉備文化財センター所長）

前川 歩（独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所）

指導・助言

○文化庁文化財部記念物課

青木達司（文化財調査官）平成27～29年度

市原富士夫（文化財調査官）平成25・26年度

浅野啓介（文化財調査官）平成25～29年度

林 正憲（文化財調査官）平成25・26年度

○岡山県教育庁文化財課

大橋雅也（総括参事）平成25～28年度

柴田英樹（総括副参事）平成29年度

事務局

○赤磐市教育委員会

土井原敏郎（教育長）平成25年度

永島英夫（教育長）平成25年度

杉山高志（教育長）平成26～28年度

内田恵子（教育長）平成29年度

宮岡秀樹（教育次長）平成25年度

奥田智明（教育次長）平成26～28年度

藤井和彦（教育次長）平成29年度

・社会教育課

正好尚昭（課長）平成25年度

前田正之（課長）平成26・27年度
 土井道夫（課長）平成28・29年度
 （調査・整理担当）
 高田恭一郎（副参事）平成25年度
 （調査・整理・報告書担当）
 金田善敬（副参事）平成26～28年度
 有賀祐史（主査）平成25～29年度

畑地ひとみ（主事補）平成25～29年度
 （報告書担当）
 山口香織（嘱託）平成29年度
遺物鑑定協力者
 杉山一雄（岡山県教育庁文化財課）
 乗岡 実（岡山市教育委員会文化財課）
 高畑知功（四国学院大学非常勤講師）

註

（1）赤磐市教育委員会2017『両宮山古墳とその時代』シンポジウム記録集1

表1 文化財保護法に基づく提出書類一覧

国指定史跡の現状変更許可申請（法第125条）・計画変更承認

文書番号 日付	種類及び名称	所在地	目的	申請者	期間	許可条件	許可文書番号 日付
赤教社 第463号 H25.9.9	国史跡 両宮山古墳	赤磐市穂崎794 番地ほか	発掘調査	赤磐市長 友實武則	許可日～ H27.3.31	実施に当たっては、岡山県教育 委員会の指導を受けること。	25受庁財第4号の 1267 H25.11.15
赤教社 第433号 H26.9.11	国史跡 両宮山古墳	赤磐市穂崎794 番地ほか	発掘調査	赤磐市長 友實武則	H25.11.15～ H28.3.31		26受庁財第4号の 1166 H26.9.22

遺物発見通知・文化財認定（法第100条・第102条）

岡山県文書 番号 日付	物件名	出土地・名称・時代・種類	出土年月日	発見者	土地所有者	現保管場所
教文理 第1412号 H26.3.19	土師器、瓦ほか 計整理箱1箱	赤磐市穂崎788 両宮山古墳 古墳・古墳	H26.1.14～ H26.3.13	赤磐市教育委員会 教育長職務代理者 教育次長 宮岡秀樹	赤磐市長 友實武則	赤磐市山陽 郷土資料館
教文理 第1489号 H27.3.18	弥生土器、瓦ほか 計整理箱2箱	赤磐市穂崎788ほか1筆 両宮山古墳 古墳・古墳	H27.1.14～ H27.3.13	赤磐市教育委員会 教育長 杉山高志	赤磐市長 友實武則 ほか1名	赤磐市山陽 郷土資料館
教文理 第1583号 H28.3.14	弥生土器、瓦ほか 計整理箱2箱	赤磐市穂崎788、793-1、791、792 両宮山古墳 古墳・古墳	H27.12.1～ H28.2.29	赤磐市教育委員会教育長	赤磐市 個人	赤磐市山陽 郷土資料館



現地説明会の様子（第6次調査）

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

岡山県南東部に位置する赤磐市は、県南部からの沖積平野と北部の吉備高原からの丘陵地からなり、南北に細長い市域をもつ。北は美作市・久米郡美咲町・久米南町、南および西は岡山市・備前市、東は和気郡和気町と接する。東端には県の三大河川の一つである吉井川が南流し、西端に近接して同じく旭川が南流する。また、市西部には中規模河川の砂川が南北に貫流しており、これらの河川や支流に沿って盆地状の平野が形成され、丘陵と平地が入り組んだ地形となっている。遺跡は河川に沿って広がる平野もしくは平野に面した丘陵の先端に形成されており、両宮山古墳も砂川中流域沿いの平野上に立地している。丘陵地の多くは花崗岩あるいはその風化土からなるが、南部では流紋岩や泥質岩等も分布する。

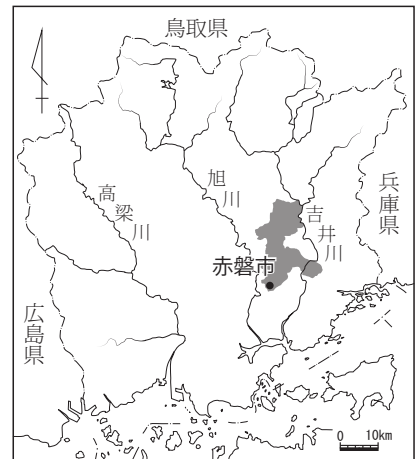


図1 遺跡位置図 (1/2,000,000)

両宮山古墳の位置する市南西部の砂川中流域平野は、東西約5.5km、南北約6.3kmを測り、海拔は11~25m、周囲を標高100~300mの山々に囲まれ、東側の丘陵は比較的低い。東には可真の盆地状平地、南には岡山市東区瀬戸町北西部の盆地状平地、南西には龍ノ口山塊を隔てて旭川下流域東岸平野が広がっている。

第2節 歴史的環境

旧石器・縄文時代

この地域では、旧石器時代の明確な遺跡は現在確認されていない。

縄文時代の遺跡としては、備前国分寺跡(2)で奈良時代以降の包含層から草創期の有舌尖頭器が出土している。また、斎富遺跡(3)からは後期の土器の他、土壙状の遺構から晩期の土器と軟玉製丸玉が出土した。南方前池遺跡(4)からは堅果類を貯蔵した晩期の貯蔵穴がまとまって検出され、吉原遺跡(5)からは晩期に属する石棒が出土している。

弥生時代

弥生時代前期の土器は南方前池遺跡の他、山陽小学校遺跡(6)からも出土しており、集落が沖積平野へと進出・増加していった様子が窺える。中期以降、数多くの集落が出現したことが確認されており、中期中葉から後期初頭にかけての遺跡は丘陵の尾根や斜面等、比較的高所に立地している遺跡が多い。両宮山古墳の北東、東高月丘陵に営まれた中期後半の用木山(7)・惣岡(8)・門前池遺跡(9)等の遺跡群は、この地域の拠点的な集落と考えられる。



- | | | | | |
|-----------|------------|------------|-------------|-------------|
| 1 両宮山古墳 | 10 門前池東方遺跡 | 19 吉原6号墳 | 28 小山古墳 | 37 備前国府関連遺跡 |
| 2 備前国分寺跡 | 11 浦山遺跡 | 20 備前車塚古墳 | 29 廻り山古墳 | 38 賞田廃寺跡 |
| 3 斎富遺跡 | 12 丸田遺跡 | 21 正崎古墳群 | 30 大廻小廻山城跡 | 39 唐人塚古墳 |
| 4 南方前池遺跡 | 13 四辻土壇墓群 | 22 岩田14号墳 | 31 備前国分尼寺跡 | 40 葛木城跡 |
| 5 吉原遺跡 | 14 愛宕山遺跡 | 23 牟佐大塚古墳 | 32 馬屋森向遺跡 | 41 善応寺城跡 |
| 6 山陽小学校遺跡 | 15 便木山遺跡 | 24 和田茶白山古墳 | 33 馬屋出水遺跡 | 42 正崎城跡 |
| 7 用木山遺跡 | 16 着銅遺跡 | 25 正免東古墳 | 34 馬屋遺跡 | 43 龍ノ口山城跡 |
| 8 惣囷遺跡 | 17 山の間遺跡 | 26 森山古墳 | 35 高月条里遺構 | |
| 9 門前池遺跡 | 18 用木古墳群 | 27 朱千駄古墳 | 36 西山高陽条里遺構 | |

図2 周辺遺跡分布図 (1/50,000)

後期の遺跡は中期に対して、谷口や山裾の微高地等に立地する集落が多い。中期から続く門前池遺跡の他、門前池東方遺跡（10）や弥生時代から中近世にわたる集落跡の斎富遺跡、大量の土器が出土した浦山遺跡（11）等が確認されている。また、平野部においては旧河道により形成された自然堤防上に主に後期前半の集落が確認された丸田遺跡（12）がある。両宮山古墳の墳丘下でも後期前葉の弥生土器が採集されており、当該地域でも弥生時代の遺跡が展開していることが分かる。

墳墓も数多く確認されており、土壙墓群が確認された四辻土壙墓群（13）、愛宕山遺跡（14）、特殊器台・壺を伴う土壙墓群が検出された便木山遺跡（15）等がある。

古墳時代

集落遺跡は、門前池遺跡や着銅遺跡（16）、山の間遺跡（17）、朝鮮系の遺物が多数出土した斎富遺跡等がある。砂川西岸に営まれた着銅遺跡と山の間遺跡は、中期後半から後期にかけての集落で、この地域において6世紀前葉に造り付けカマドの普及が認められる。両宮山古墳をはじめとする古墳が築造された時期と重なり、集落と墳墓の消長は注目される。

前期の古墳としては、東高月丘陵上で前方後円墳の用木3号墳（18）が築造され、平野部北部では獣帯鏡や方格規矩鏡などが副葬された前方後円墳の吉原6号墳（19）が築かれる。また、南西の龍ノ口山塊には前方後方墳の備前車塚古墳（20）が築造されている。

中期後葉には、本書に掲載した両宮山古墳（1）が造られる。二重周濠を有する全長206mの前方後円墳で、備前地域最大である。周辺には大形の前方後円墳が集中し、備前地域においては卓越した様相を呈する。その他、首長墳とは異なるが、銅鏡・三環鈴・甲冑等の様々な副葬品が出土した径約20×16mの円墳の正崎2号墳（21）がある。

後期後半には東高月丘陵に環頭大刀や雁木玉等の豊富な副葬品を伴った横穴式石室をもつ岩田14号墳（22）が築造されている。7世紀代に至ると、旭川東岸の小平野に吉備の三大石室墳の一つで、貝殻凝灰岩の家形石棺を伴う牟佐大塚古墳（23）が築かれ、備前においては枢要な地域であったことが窺える。

両宮山古墳周辺の古墳

両宮山古墳の評価には、同時期あるいは本墳に後続する時期に築かれた周辺の古墳の状況を欠くことはできないため、ここでその内容を詳述する。

両宮山古墳の北には二重周濠を有する陪塚の和田茶白山古墳（24）がある。墳丘全長55mの帆立貝形古墳で、主墳と同様に葺石・埴輪が見られない。南には正免東古墳（25）、墳丘全長82mの帆立貝形古墳の森山古墳（26）が築造されている。正免東古墳は径約25mの削平古墳で、墳形は円墳あるいは帆立貝形と考えられる。森山古墳からは円筒埴輪の川西編年Ⅳ期新相段階と考えられるものが出土していて、両宮山古墳の時期を考える上で重要である。両宮山古墳と和田茶白山古墳には葺石・埴輪が見られず、正免東古墳と森山古墳には葺石・埴輪が認められるという特異な状況がある。中期末には朱千駄古墳（27）、続いて小山古墳（28）が築かれ、後期前半には廻り山古墳（29）が築かれた。朱千駄古墳には竜山石製長持形石棺、小山古墳には阿蘇溶結凝灰岩製の古式家形石棺が伴い、両宮山古墳に続く有力な首長墳である。廻り山古墳を最後に両宮山古墳周辺での大形古墳の築造は終息する。

古代

古代山城である大廻小廻山城跡（30）は、両宮山古墳から穂崎や長尾の丘陵地および岡山市東区瀬

戸町観音寺の平野部を隔てたところに位置し、城壁をめぐるしている。

両宮山古墳の位置する砂川中流域平野は、赤坂郡高月郷と鳥取郷にあたる可能性が高い。また、古代山陽道は日古木から国分寺南面を経て岡山市北区牟佐へ向かうと想定されている。

高月郷に属する門前池遺跡では奈良時代と考えられる建物と多量の白鳳時代の瓦が確認されており、寺院あるいは官衙の可能性が高い。両宮山古墳の西隣には備前国分寺が建立された。備前国分寺跡（31）は、国分寺から古代山陽道を挟んで300mほど南、現在の仁王堂池に比定される。本格的に調査がなされていないため詳細は不明であるが、国分寺創建期と同範の瓦が出土している。馬屋森向遺跡（32）では平城宮式（6225型式系）の1点を除く軒丸瓦はすべて国分寺の創建瓦と同文であり、この北側が高月駅家である蓋然性は極めて高いとされる。馬屋出水遺跡（33）からは官衙との関係が推定される奈良時代の遺構・遺物が検出されており、馬屋遺跡（34）からも整然と配置された奈良時代の建物群が検出されており公的施設の可能性がある。また、国分寺創建期の軒瓦をはじめ多数の同範瓦が出土しており、国分寺の寺地を限るとみられる溝や国分寺と国分尼寺を結ぶとみられる道も検出された。さらに、鳥取郷にあたる可能性のある斎富遺跡では、奈良時代と考えられる建物24棟や方形に区画する溝が見つかり、官衙機能が想定されている。

この地域の平野部には現在でも整然とした条里地割が残っているが、これらの高月条里遺構（35）や西山高陽条里遺構（36）がどの段階に施行されたものかは判然としない。平安末期に鳥取郷は、在地領主であった葛木氏によって鳥取荘と呼ばれる荘園として開発され、後白河法皇の持仏堂である長

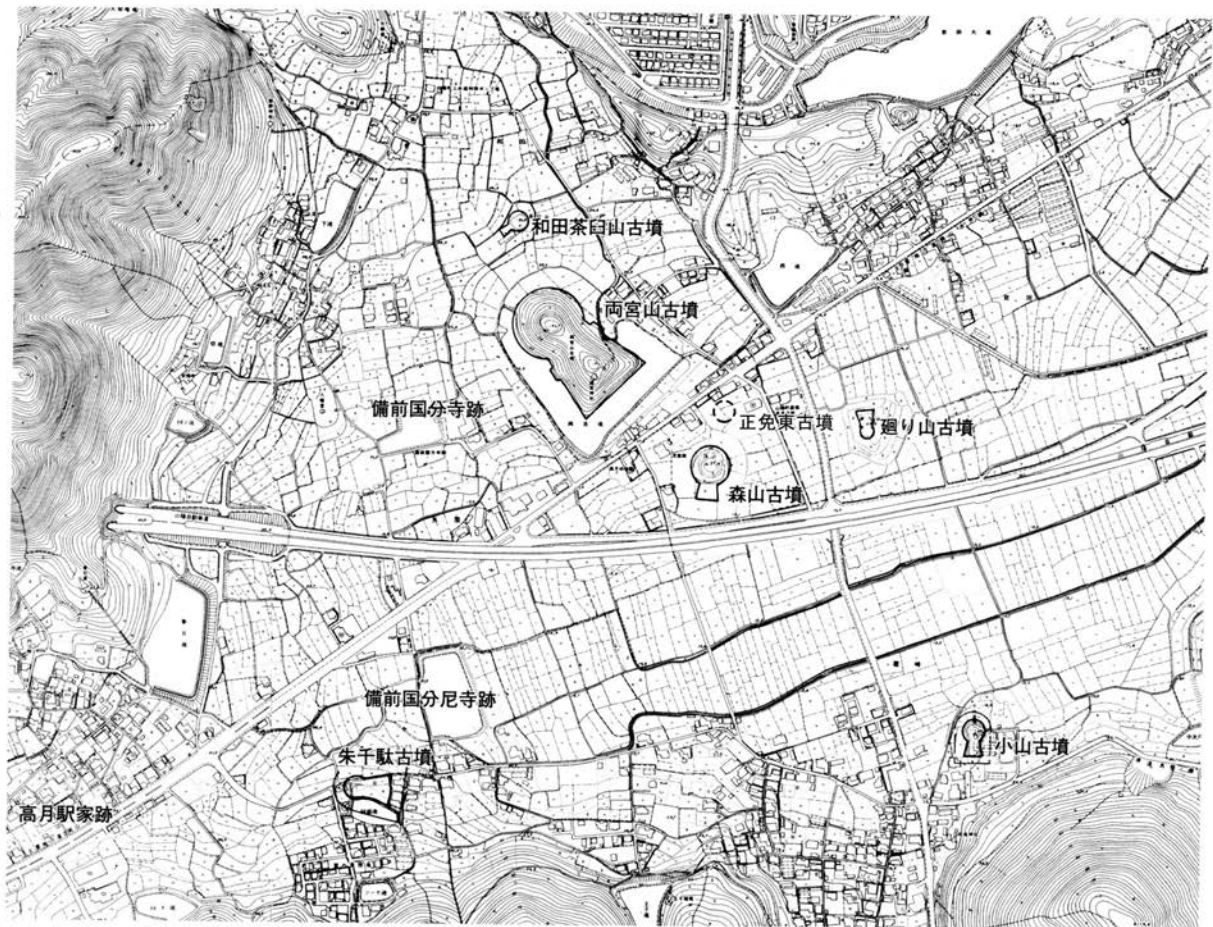


図3 両宮山古墳周辺図 (1/12,000)

講堂領となった。

一方で、備前国府（37）は龍ノ口山塊を隔てた岡山市中区国府市場付近、古代の上道郡に推定されている。詳細は不明であるが、周辺には工房を伴う寺院的性格の官衙と考えられるハガ遺跡、多量の土師器食膳具が出土し、国府との関わりを想起させる南古市場遺跡が所在する。その北、龍ノ口山塊の山裾には飛鳥時代創建の賞田廃寺跡（38）が位置し、金堂と凝灰岩製壇上積基壇の東西双塔があったことが判明している。また、賞田廃寺跡の西隣には竜山石製の刳抜式家形石棺をもつ唐人塚古墳（39）があり、賞田廃寺とともに有力氏族の存在を窺わせる。

中世

馬屋遺跡は平安時代末期から室町時代前期を中心とした集落である。また、斎富遺跡からも鎌倉時代以降の建物が検出されている。戦国時代には、遠藤氏が鳥取荘を本領としており、浦上正宗に仕えた後、宇喜多直家、そして岡山藩主池田忠雄に仕えた。戦国時代の備前国の支配権争いにおいて、鳥取荘のあるこの地域は備前中南部における重要な地域であった。中世山城として、葛木城跡（40）、善応寺城跡（41）、正崎城跡（42）等が知られている。旭川を見下ろす龍ノ口山には龍ノ口山城跡（43）が築かれた。18世紀後半に岡山藩士土肥経平によって記された『備前軍記』には、松田方の龍ノ口城を宇喜多勢が攻めた際に、龍ノ口城の穰所元常を救援すべく赤坂郡和田の城主和田伊織が馳せ参じたとある。この和田の城が両宮山古墳を利用したものであるという説もあるが、明確な城郭の遺構は確認されておらず、その判断は慎重になるべきであろう。

引用・参考文献

- 有賀祐史ほか2013『向山宮岡遺跡・丸田遺跡・中屋遺跡の大量出土銭』赤磐市文化財調査報告第6集 赤磐市教育委員会
- 伊藤晃ほか1995『松尾古墳群・斎富古墳群・馬屋遺跡ほか』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告99 岡山県教育委員会
- 宇垣匡雅2004『森山古墳・両宮山古墳』山陽町文化財調査報告第2集 山陽町教育委員会
- 宇垣匡雅2005『両宮山古墳』赤磐市文化財調査報告第1集 赤磐市教育委員会
- 宇垣匡雅2008『史跡両宮山古墳中堤保存工事報告書』赤磐市文化財調査報告第2集 赤磐市教育委員会
- 宇垣匡雅ほか2009『備前国分寺跡』赤磐市文化財調査報告第3集 赤磐市教育委員会
- 金田善敬ほか2017『山の間遺跡』赤磐市文化財調査報告第11集 赤磐市教育委員会
- 草原孝典2004『ハガ遺跡－備前国府関連遺跡の発掘調査報告－』岡山市教育委員会
- 岸田裕之1995「浦上正宗支配下の備前国衆と鳥取荘の遠藤氏」『岡山県地域の戦国時代史研究』広島大学文学部紀要55-2
- 神原英朗1971～1977『岡山県営山陽新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報』1・2・4 山陽町教育委員会
- 近藤義郎編1995『南方前池遺跡』山陽町教育委員会
- 下澤公明ほか1996『斎富遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告105 岡山県教育委員会
- 高田恭一郎ほか2014『着銅遺跡』赤磐市文化財調査報告第7集 赤磐市教育委員会
- 椿真治1990「〔5〕馬屋森向遺跡ほか」『岡山県埋蔵文化財報告』20 岡山県教育委員会
- 西川宏1957「岡山県山陽町上仁保出土の石棒類」『私たちの考古学』4-3 考古学研究会
- 則武忠直ほか1986『山陽町史』山陽町
- 則武忠直ほか2004『正崎2号墳』山陽町文化財調査報告第1集 山陽町教育委員会
- 松本和男ほか1975『門前池遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告9 岡山県教育委員会

第3章 調査の概要

第1節 調査の概要

(1) 古墳の立地

古墳は、赤磐市南西部の標高100～300mの丘陵に囲まれた盆地状の平野部の西端に位置し、岡山市との境界にある本宮高倉山（標高458m）の南東麓に形成された扇状地の斜面に築造されている。墳丘主軸を斜面の方向に合わせてあり、後円部が北西、前方部が南東に向く。標高は、後円部側外濠外側が約23～24mで、前方部側外濠外側で約16～17mを測り、前方部側が大きく下降する。

墳丘の南西側は幅60mの浅い谷状の地形をなし、北東側も幅100mの浅い谷状地形を呈する。したがって、両宮山古墳は2つの谷状地形に挟まれた舌状の高まりを選地して築かれている。墳丘主軸の延長線上、前方部の南東には森山古墳が位置している。南西側の谷状地形の西側には備前国分寺が立地しており、前方部側外濠外側には古代山陽道が通過していたと考えられている。

基本的に古墳周辺の地山上部は黄色の粘質土で、後円部西側の裾部には岩盤が見られ、墳丘は地形の高まりを利用して構築されていると推定される。また、墳丘盛土下には弥生時代の遺構が認められ、同時代の集落が営まれていたとみられる。

(2) 古墳の現状と既往の調査（表2、図4）

言うまでもなく、現在見ることができる両宮山古墳の景観は、後世に自然に変化したものばかりでなく削平・造成等の様々な改変を受けた結果で、古墳築造当初の規模や姿でない。後世の自然変化や人工的な改変を一つずつ除去していくことで、両宮山古墳の築造当時の状況を解明していかなければならない。

このたびの調査は、墳丘裾保存整備工事に伴う第4～6次調査として実施した墳丘調査である。しかし、古墳は外濠までの広大な墓域をもつ。さらに本墳と有機的に結びつく周辺の古墳群については前章で詳述した。そこで、これまでの調査研究等で明らかになった本墳の内容について、既刊の測量調査成果⁽¹⁾および発掘調査成果⁽²⁾を参考に以下にまとめておく。

初めて調査が行われたのは、昭和55年（1980）の前方部前面の周堤に埋設された水樋の改修工事に伴ってである。全長約25m、上面幅7m、下端幅2～3mの逆台形の工所用掘方の調査で、中堤を断ち割った形である。本来の中堤は標高19.4～19.65mを測る盛土第Ⅱ層上面までで、それより上は後世において用水利用に伴って補強したものとされている。

昭和61年（1986）には『岡山県史』考古資料編が刊行され、県史編纂事業に伴い航空測量が実施された。さらに平成15年（2003）に測量調査が行われ、段築の観察等から墳形の復元が実施された。平成14～16年度には後円部北東側の中堤および外濠における開発計画に伴って、和田茶臼山古墳を含めた範囲内容確認を目的に、第1～3次調査が行われた。この調査は陪塚の内容、外濠の確認による墓域確定

表2 発掘調査履歴一覧

調査年度	調査年次	内容（調査区）	調査主体	文献
昭和54（1979）		水樋改修工事に伴う周堤（中堤）確認調査	岡山県教育委員会	1
平成14（2002）	1	範囲・内容確認調査 両宮山古墳・和田茶白山古墳 T1～9	山陽町教育委員会	2
平成15（2003）	2	範囲・内容確認調査 測量 両宮山古墳・和田茶白山古墳 T10～27	山陽町教育委員会	2・3
平成16（2004）	3	範囲・内容確認調査 両宮山古墳 T28～50	赤磐市教育委員会	2・4
平成25（2013）	4	墳丘裾保存整備工事に伴う確認調査 T53～61	赤磐市教育委員会	本報告
平成26（2014）	5	墳丘裾保存整備工事に伴う確認調査 T62～66	赤磐市教育委員会	本報告
平成27（2015）	6	墳丘裾保存整備工事に伴う確認調査 T67～73	赤磐市教育委員会	本報告

文献〔1〕河本清1980「両宮山古墳周堤確認調査報告」『岡山県埋蔵文化財報告』10 岡山県教育委員会

〔2〕宇垣匡雅2005『両宮山古墳』赤磐市文化財調査報告第1集 赤磐市教育委員会

〔3〕宇垣匡雅2004『森山古墳・両宮山古墳』山陽町文化財調査報告第2集 山陽町教育委員会

〔4〕宇垣匡雅2008『史跡両宮山古墳中堤保存工事報告書』赤磐市文化財調査報告第2集 赤磐市教育委員会

といったことから、外周調査として画期的なものであった。調査結果によって、二重周濠の存在は古備の巨大墳である造山古墳・作山古墳との違いを明瞭にすることとなった。また、陪塚と思われる和田茶白山古墳も二重周濠をもつ帆立貝形古墳であることが判明した。

墳丘

3段築成で、発達した前方部をもち両くびれ部の前方部側に造り出しを設けている。後円部頂最高所41.32m（後円部頂の平均的な高さ41.1m）、前方部頂42.0mで、前方部の高さが後円部のそれを上回る。大部分が山林となっており、樹木や竹、笹等が繁茂している。植林もあり、かつては果樹園や畑として利用されていた。前方部には、第2段テラスから第3段斜面付近を大きく削平して伊勢（両宮）神社が造られ、その参道が前方部東側に設けられている。これらの造成により、段築のかなりの部分が削平・埋没している。明瞭な第2段テラスは前方部南西側に見られ、第1段テラスは南西くびれ部から前方部南西角の汀線浸食部の真上、標高22～23mに認められる。内濠の池の満水時の汀線は19～20mで、水面から上の墳丘規模は194mを測るが、墳端は水面下に推定される。墳丘規模は、ピンポールでの探査による傾斜変換をもとに206mと復元されている。

内濠

内濠の北部は埋没して水田となっているが、中堤側から大きく下降している水田面は内濠の形状をよくとどめている。残りの後円部西側から前方部の周囲を経て北東くびれ部に至る約20,000㎡は水濠となっており、農業用溜め池「両宮池」として利用されている。現在、池への取水は後円部西側と北東造り出し側の2か所からなされる。池の東に余水吐をもちF.W.L = 19.85mで、墳丘は標高20m前後の浸食が激しい。前方部前端から中堤までの長さは満水時で41mを測る。

中堤

内濠の周囲には中堤があり、その上面は後円部南西側から前方部東側にかけて畑や果樹園となっている。後円部側は大部分が水田となっていて、北東くびれ部から前方部北東側までは宅地が所在する。中堤は古墳築造後に1.5～2.5mの厚さの盛土がなされていることが判明しており、これに伴い現在の内濠水位に上昇したことが想定される。近世に周囲の土地利用が進み農業用水が必要となり、盛土造成



図4 第1～3次調査等による墳丘の復元 (1/2,500)

がなされたのであろう。つまり、古墳築造時の内濠は今より浅い。

後円部後方は地山の削り出しによって、前方部前面は地山の削り出しと厚い盛土によって構築されている。盛土は後円部側面から始まり、前方部側に向かって順次厚さを増す。盛土は黄色の上層と暗褐色の下層の上下2層に大別される。

外濠

墳丘を全周しており、主軸線上での長さ349mで、前方部前面の長さは318mと推定される。濠の上面幅は後円部後端で14m、前方部前面で21mと復元される。なお、外堤の存在を示す状況は認められていない。

これまでの調査研究では、外表施設である葺石・埴輪が伴わないと判断されている。これらの欠落が本墳の評価に関わる重要な問題であり、寿陵との関連で注目すべきとされる。古くは梅原末治が埴輪一片も採集できないことから、元々円筒埴輪を欠いているのかと記している⁽³⁾。宇垣匡雅は葺石・埴輪の設置が古墳構築の最終段階になされたと考え、「なんらかの特殊な事情が発生して通常どおりの葬送儀礼が実施されなかった可能性が考えられる」としている⁽⁴⁾。両宮山古墳が未完成墳である蓋然性が高いと唱えているのは岸本直文である⁽⁵⁾。「墳丘が成形されながら、段築は整わず、葺石材や埴輪が見られないので、中途段階で工事が停止したことを示す」としている⁽⁶⁾。墳丘部に初めて調査区を設けたこのたびの第4～6次調査では、従前表面観察において認めることができなかった葺石・埴輪の有無についても、実際に確認することが可能な状況を得た。

註

- (1) 岡山県史編纂室1986「付図3 両宮山古墳群」『岡山県史』第18巻考古資料 岡山県
宇垣匡雅2004『森山古墳・両宮山古墳』山陽町文化財調査報告第2集 山陽町教育委員会
- (2) 河本清1980「両宮山古墳周堤確認調査報告」『岡山県埋蔵文化財報告』10 岡山県教育委員会
宇垣匡雅2005『両宮山古墳』赤磐市文化財調査報告第1集 赤磐市教育委員会
- (3) 梅原末治1924「備前国西高月村の古墳」『歴史と地理』13-4
- (4) 宇垣匡雅2006『両宮山古墳』日本の遺跡14 同成社
- (5) 岸本直文2008「前方後円墳の二系列と王権構造」『ヒストリア』208 大阪歴史学会
- (6) 岸本直文2012「墳丘と周濠」『古墳時代(下)』講座日本の考古学8 青木書店

(3) 調査区の概要(図5)

トレンチは、内濠のうち現在溜め池となっている後円部西側から前方部北東側にかけて設定した。現地形や墳丘の残存状況等を考慮しながら、原則として20m間隔で設けた。T64は墳丘主軸、T54・73は墳丘主軸と直交するように配置している。また、T57・72は南西造り出しの主軸方向に設定した。

1か年毎の調査経過は第1章で述べたとおりである。調査したトレンチはT53～73までの計21本で、それ以前のT1～52は第1～3次調査等で終了・報告済みのものである。つまり、トレンチに付した番号は第1～6次調査まで通番としている。トレンチによっては第1段斜面と第1段テラス以上で番号が別々になっているものもあるが、調査年次の違いによるもので混乱を避けるため番号は調査時のものをそのまま使用した。

T53～55・73が後円部、T56・57・72がくびれ部・造り出し、T58～68・71が前方部に関するトレンチである。なお、これまで未調査であった中堤東側の内濠斜面側にもT69・70を設定した。トレン



図5 トレンチ配置図 (1/2,000)

チの規模は各トレンチ概要において述べるが、遺構の掘削を最小限にとどめるため幅1～2mとしている。原則、遺構面の検出を目的とし、必要に応じて遺構を断ち割ってその内容を確認した。また、崩落あるいはそれを助長させてしまう危険性があるため、浸食によって汀線上に傘状に残る部分の調査は行わなかった。

調査は農閑期に溜め池の水を落として実施したが、上方からの水の流入を完全に遮断することは不可能で、池の水を完全に排水することは困難であった。そのため、第1段斜面では墳端の検出を目的にできる限り内濠側にトレンチを延ばしたが、湧水とトレンチ壁面の崩落に配慮しながらの調査とならざるを得なかった。後述するが、このことが古墳築造後から今日まで水をたたえた内濠、溜め池の維持がなされた歴史と相まって、墳端の評価を困難とさせた。将来、万全の体制で内濠を横断したトレンチ調査を行うことで、墳端や墳丘と内濠の関係性の解明を期待したい。

第2節 後円部

(1) 概要

後円部周囲の内濠は約3分の2が既に埋没し、南西側の残り3分の1が内濠に面しているため、墳丘裾の保存整備工事の対象となる範囲は前方部に比べ狭い。後円部南西側の第1段斜面にT53～55の3本、第1段テラスから第2段斜面にかけてT73の1本、計4本のトレンチを設定して調査した。T54とT73は、墳丘主軸に直交するラインに連続して設けたものである。

内濠汀線付近には地山の岩盤が露出しているところがあり、墳丘第1段は地山削り出しによって築かれた可能性が考えられた。また、浸食を受けている現汀線上は比較的急な斜面となっており、第1段テラスの残存状況がよくないと思われた。

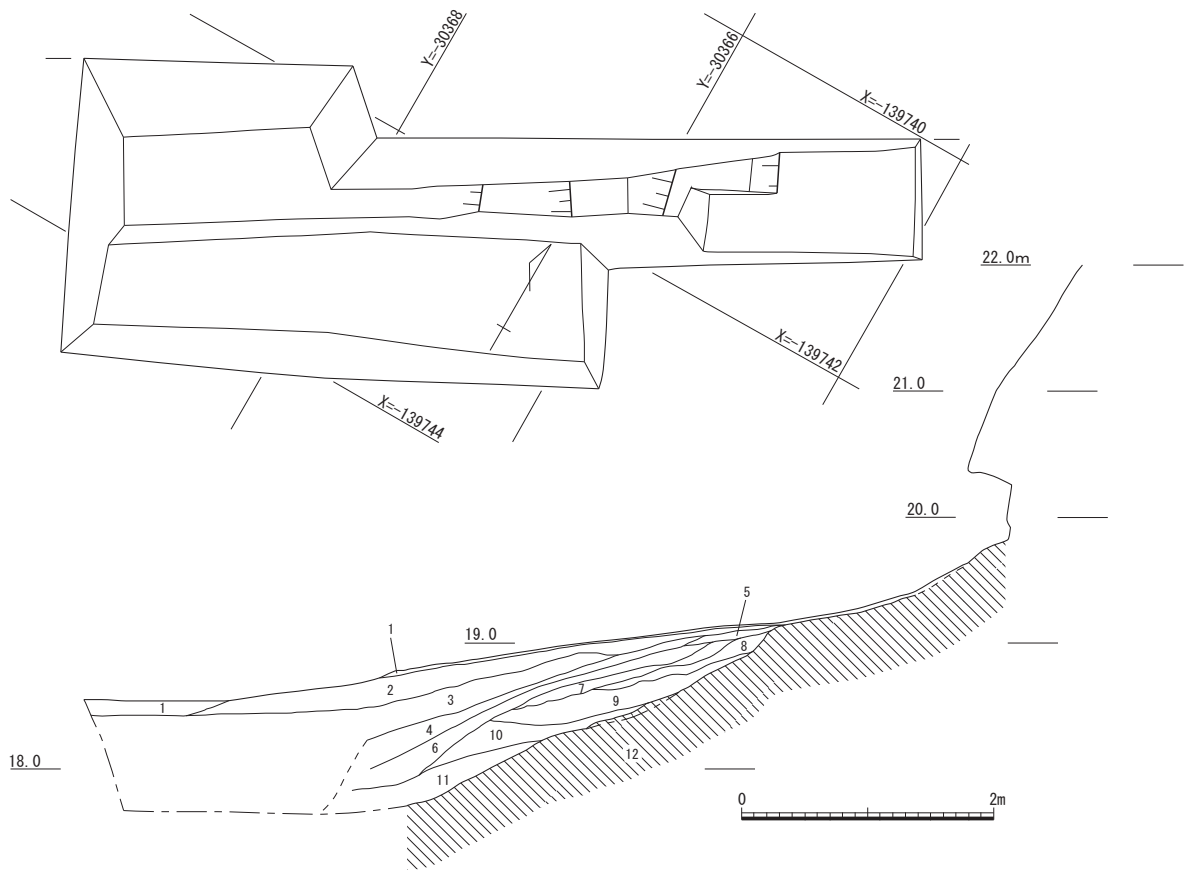
(2) T53 (図6、図版3-1)

墳丘主軸に直交するラインに設定したT54を基準に、その北西に設定した。第1段斜面の遺存状況の確認を目的としたもので、トレンチの長さ6.7m、幅1.0～2.5mである。

表土下は、汀線から現地表面に沿って地山が緩やかに傾斜し、それより内濠側は標高19.1mで傾斜が変わり下降する。その傾斜角は25.7°である。堆積土は3層が水分を多く含む泥土で、壁面の崩落の危険性と湧水により標高17.7mまでの掘削で断念した。地山上の堆積はしまりが弱く、古い遺物の出土がないため、第1段斜面は大きく流失していると考えられる。そのため調査範囲においては、墳端を推定する傾斜変換点を確認することができなかった。

(3) T54・73 (図7・8、図版3-2・4-1)

墳丘主軸に直交するラインに設けた。当初調査した第1段斜面のT54の上位に追加して第1段テラスから第2段斜面にかけてのT73を設定した。T54で長さ5.3m、幅1.0～2.0m、T73で長さ6.8m、幅1.0mのトレンチで、総延長は14.2mである。トレンチより上の第3段斜面には後世の開墾によると推定される平坦面が認められた。また比較的急な斜面であったため、第1段テラスの遺存が危ぶまれたが第2段斜面は比較的良好に残存しているのではないかと考えて調査に入った。



- | | |
|-----------------------|-------------------------|
| 1 腐植土 | 7 灰褐色粘土 (7.5YR5/2) |
| 2 灰白色微砂～粗砂 (7.5YR8/2) | 8 褐灰色粘質砂 (7.5YR5/1) |
| 3 黄灰色泥土 (2.5Y4/1) | 9 灰褐色粘土～粘質微砂 (7.5YR5/2) |
| 4 にぶい褐色微砂 (7.5YR6/2) | 10 灰黄褐色粘質土 (10YR5/2) |
| 5 にぶい褐色微砂 (7.5YR6/2) | 11 灰黄褐色粘質砂 (10YR6/2) |
| 6 にぶい黄褐色粘質砂 (10YR6/3) | 12 明黄褐色粘質土 (10YR7/6) 地山 |

図6 T53 (1/60)

T54は地山が汀線から現地表面に沿って比較的緩やかに下降していき、内濠側標高19.0mで傾斜が変わる。その傾斜角は23.2°である。湧水により標高17.4mまでの掘削にとどまった。そのため調査範囲においては、墳端を推定する傾斜変換点を確認することができなかった。

T73の表土下19～23層には礫を非常に多く含んだ、しまりの弱い土が堆積していた。この土層からは近世に属する陶磁器類が出土し、この堆積は第3段斜面に見られた平坦面を造成する際に押し出されたものと推定する。この押し出し土からは、土師質土器1・2、備前焼播鉢3・4、肥前磁器5～7、備前国分寺の補修平瓦8・9が出土した。備前焼、肥前磁器は18世紀代のものである。補修平瓦はいずれも凸面格子叩きで、平安時代に属すと考えられる。古代の遺物も含まれるが下層からも近世の遺物が出土するため、この造成の時期は近世段階と想定する。

標高22.35～23.4mまでの堆積土を除去すると、トレンチ底面全体の長さ5.7mにわたってやや下降していく明黄褐色土(24層)の墳丘残存面を確認した。この墳丘残存面直上から、弥生土器の高杯10が出土した。現状では、この面を地山と判断しており、その上面には古い堆積層を確認できなかった。墳形復元から想定すると、この面すべてを第1段テラスと考えるには、後円部中心方向に延びすぎていると考えられる。すなわち、第2段斜面は検出できなかったと判断する。

総合的に考えると、この面は近世以降の開墾によって削出されたものと考えられる。したがって、現地形では第2段斜面が良好に遺存するように見えるが、後世の造作によるものであることが分かった。ただし、墳丘残存面を確認した22.35~23.4mという標高は、後述する前方部で想定できる第1段テラスの標高と近いので、後円部における第1段テラス面を反映している可能性も捨てきれない。

(4) T55 (図7・9、図版3-3)

後円部でもくびれ部に近くなる位置に設定した。第1段斜面の遺存状況の確認を目的としたもので、長さ5.2m、幅1.0~2.0mである。

表土下は、地山が汀線から現地表面に沿って緩やかに認められ、それより内濠側は標高19.1mで傾斜が変わり下降する。その傾斜角は27.1°である。堆積土は主に砂質土である。調査範囲においては、墳端を推定する傾斜変換点を確認することができなかった。

出土遺物として、表土から弥生土器の甕11の口縁部が出土した。弥生時代後期に属すと考えられる。

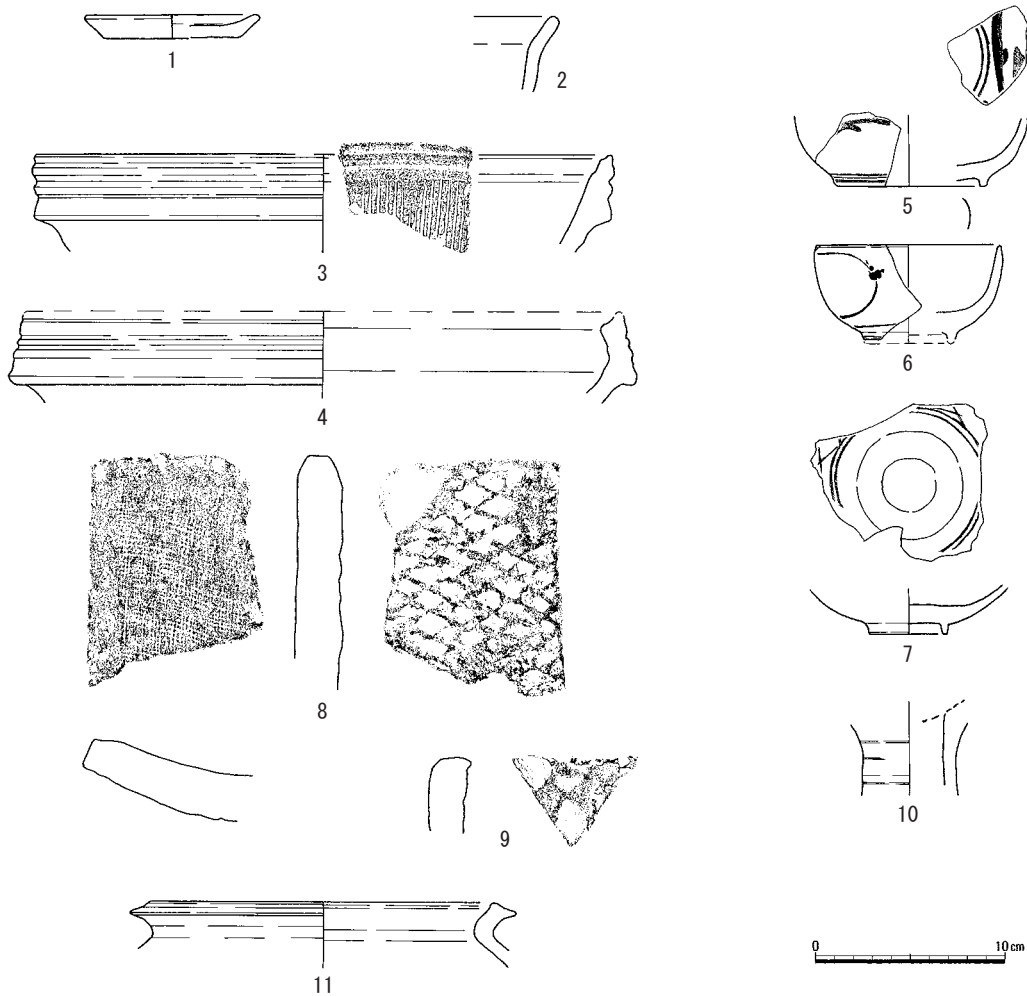


図7 T73・55出土遺物 (1/4)

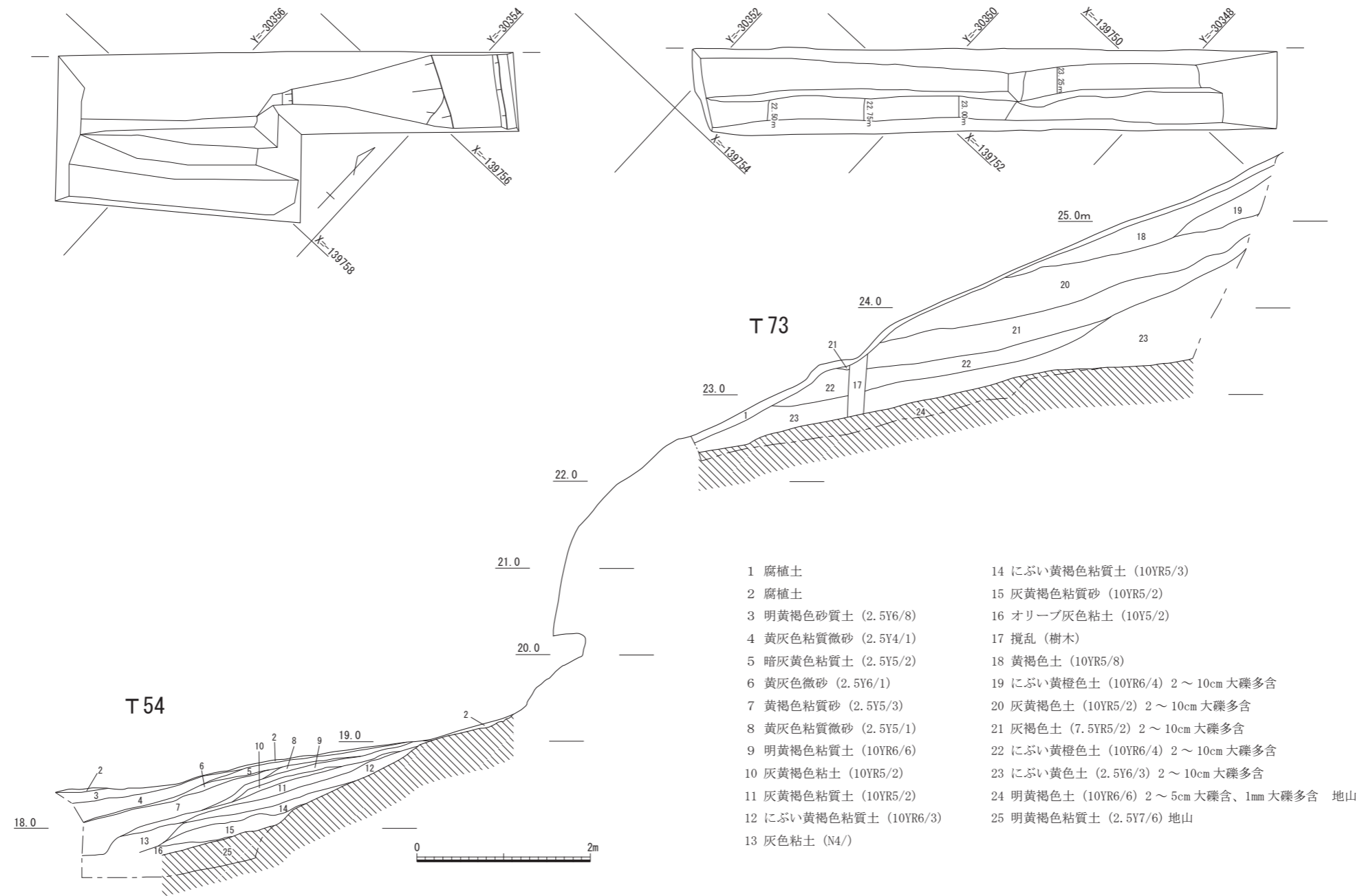


図8 T54-73 (1/60)

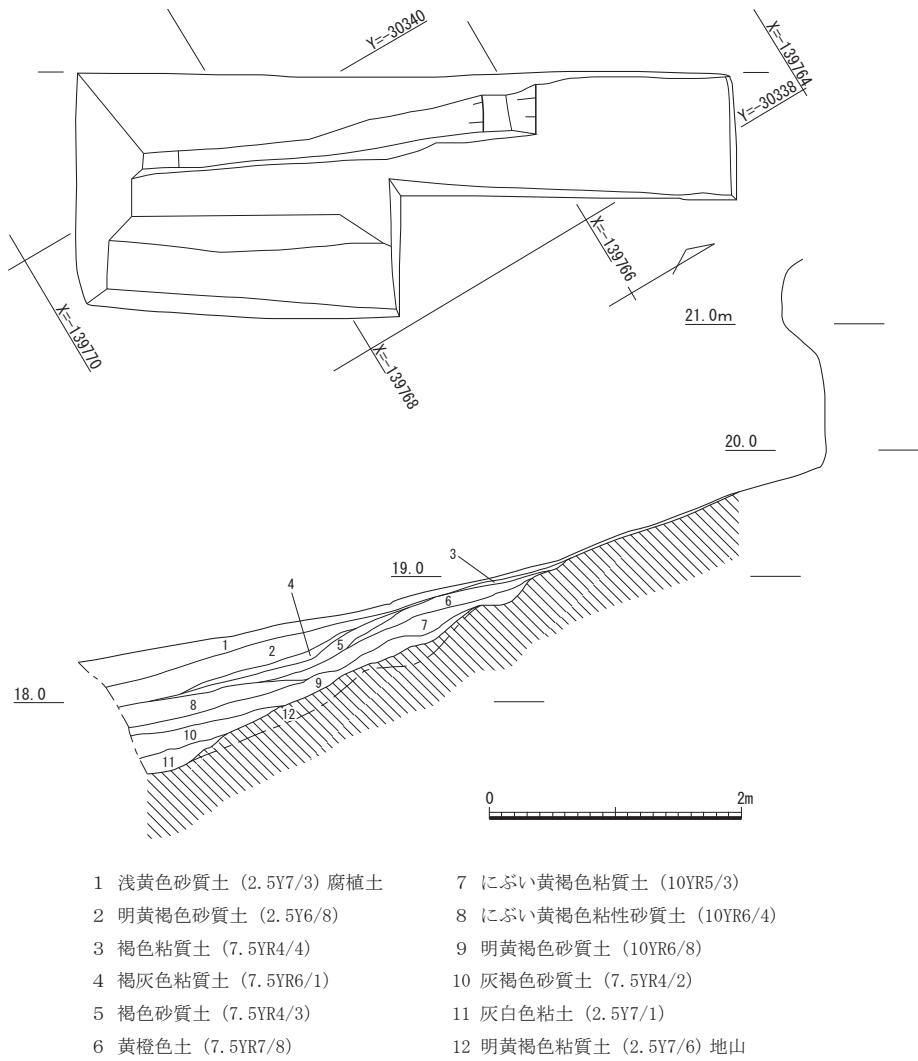


図9 T55 (1/60)

(5) 小結

計4本のトレンチにより主に後円部の第1段斜面を調査した。結論的には、墳端は検出することができなかった。湧水と壁面崩落の危険性により標高17.4~17.7mまでしか調査できなかったが、中堤内濠側のボーリング調査結果を参考にするならば、標高17.0mに平坦面をもつようであるため、さらに内濠側に墳端が想定されるものと考えたい。残存する墳丘面の傾斜角は23.2~27.1°で前方部南西側面のそれと比べると緩やかであり、また堆積土を積極的に古く見積もる要素はなく、第1段斜面は大きく失われている可能性が高い。第1段テラスから第2段斜面については、残存する遺構面直上まで近世の造成土が見られ、第2段斜面が検出されなかった。一部の調査ではあるが、後円部は近世に大きく造成がなされ、墳丘の形状を変化させていると考えられる。

第3節 くびれ部・造り出し

(1) 概要

南西くびれ部第1段斜面にT56、その前方部側に付設された造り出しの第1段斜面にT57、造り出しのテラス面にT72の計3本のトレンチを設定して調査した。T57とT72は造り出し主軸ラインに連続して設けたものである。造り出しは浸食により見かけは台形状を呈するが、南北の基部幅35m（水面上22.5m）の方形に復元されている。前方部第1段テラスに沿ってテラス面が認められる。第2段テラスを越えて第3段斜面下端辺りに取り付く平坦面があり、現状では高く2段築成に見える。

(2) T56（図10・11、図版4-2・3）

くびれ部、造り出しの北東角の取り付け部に設定した。第1段斜面の遺存状況の確認を目的としたもので、トレンチの長さ7.6m、幅1.0~2.0mである。表土下は、汀線から現地表面に沿って地山が緩やかに傾斜し、それより内濠側は標高19.4mで傾斜が変わり下降する。その傾斜角は31.1°である。

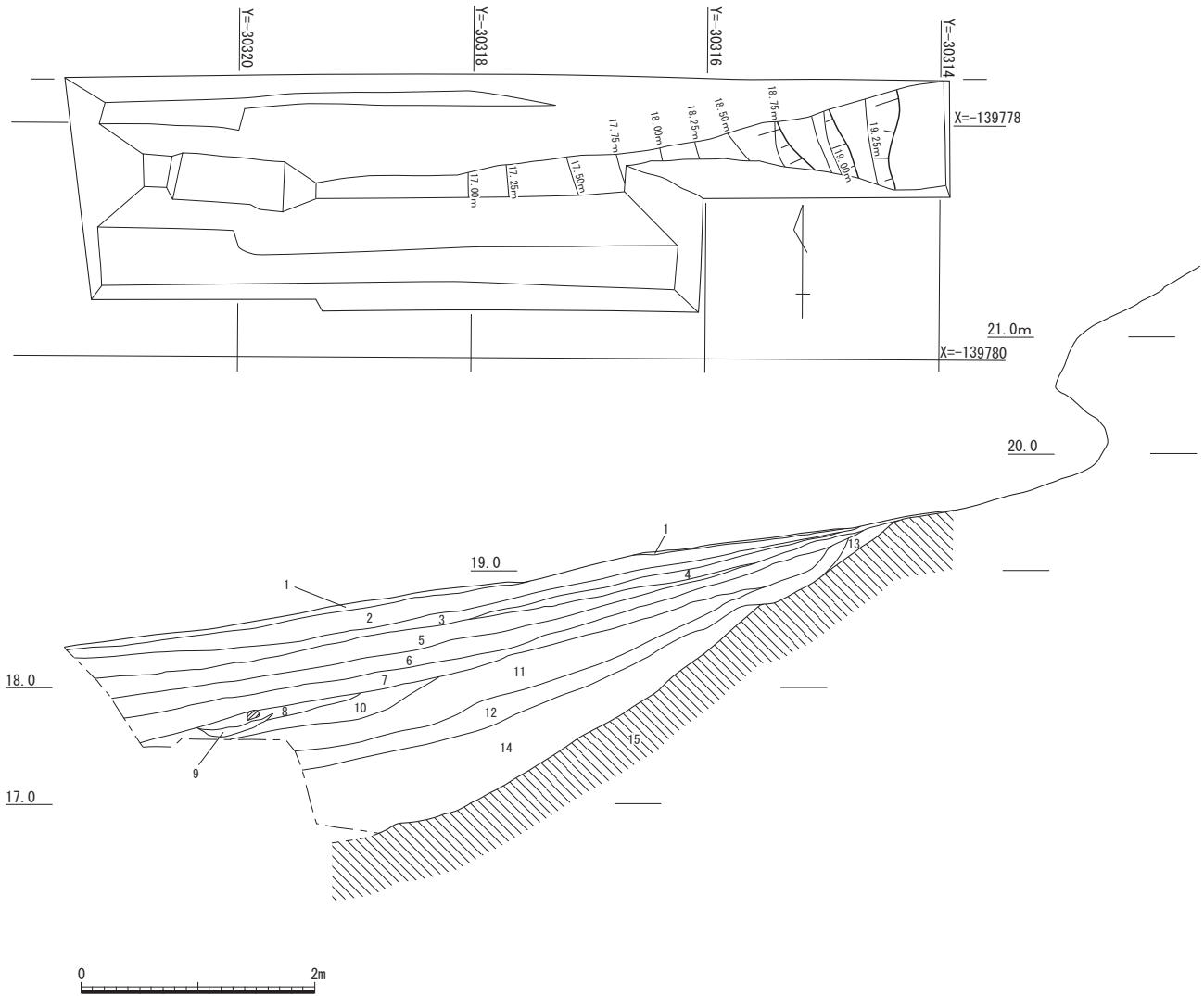
内濠堆積土は2~14層である。2~7層からは、土師器26~29、須恵器30、平瓦31、軒平瓦32・33、備前焼と思われる甕34が出土している。32は連珠文、33は唐草文で、中・近世に属す。9層は炭層で8・10・11層上面を境に、時期の異なる堆積となる。8~12層からは中世に属すと考えられる土師器等が多く出土した。土師器の小皿12と杯13は8層から出土した。12は口径8.2cm・器高1.7cmで底部糸切り、13は口径14.8cm・器高2.8cmで底部に板目が残る。他に、土師器や吉備系土師質土器碗17・18・21が出土しており、底部片のため時期判定は困難であるが、13~14世紀前半と考える。

その下の黒褐色を呈する14層からは遺物の出土はなく、中世以前の堆積と考えられる。くびれ部で、造り出しの取り付け部分であることから、水の流れが少なく、また後世の改変を受けることなく、有機質分を含んだ黒褐色を呈した粘質土が残存したものとみられ、濠底に向かって延びていくと思われる。したがって、その下位で検出した地山の斜面は比較的古く想定でき、築造当時の第1段斜面をよく反映している可能性がある。標高16.8mまで掘削したが、調査範囲においては、墳端を推定する明瞭な傾斜変換点を確認することができなかった。

また、トレンチの幅が狭いこともあり、造り出しの形状に関する情報は得られなかった。内濠堆積土には中世の遺物が包含されることから、くびれ部、造り出し周辺の墳丘上に中世の遺跡が所在すると考えられる。

(3) T57・72（図12・13、図版5、6-1・2）

造り出し中央に設けた。当初調査した第1段斜面のT57に追加してテラスから斜面部にかけてのT72を設定した。T57で長さ6.9m、幅1.0~2.0m、T72で長さ6.8m、幅1.0mのトレンチで、総延長は15.9mである。T57では造り出しの端部の検出、斜面の残存状況の確認を目的とした。T72では先述したとおり、前方部第1段テラスに沿うテラス面から第3段斜面下端に取り付く平坦面まで斜面が続き、見かけ上は2段築成の高い造り出しであるため、この形状が本来の造り出しの形状であるのか、



- | | | |
|--|---|--|
| 1 腐植土 | 8 にぶい褐色粘土 (7.5YR5/3)
礫 2cm 大～細礫・炭・焼土・土器含 | 13 黄褐色粘質土 |
| 2 灰白色微砂～粗砂 (10Y7/2) | 9 炭層 焼土塊含 | 14 黒褐色～黄灰色粘質土 (10YR3/1～2.5Y4/1)
炭・焼土含 |
| 3 灰色粘質微砂 (10Y6/1) | 10 黄褐色粘質土 (2.5Y5/3) | 15 明黄褐色粘質土 (2.5Y7/6) 地山 |
| 4 灰白色微砂 (5Y7/2) | 11 灰褐色粘質砂 (7.5YR5/2)
礫 0.5cm～3cm 大・炭・焼土・土器多含 | |
| 5 灰色粘質微砂 (5Y6/1) | 12 灰黄褐色粘質土 (10YR5/2)
炭・焼土含、土器多含 | |
| 6 オリーブ黄色粘質砂 (5Y6/3) | | |
| 7 にぶい黄橙色粘質土 (10YR6/3)
粗砂～細礫多含、炭・焼土含 | | |

図10 T56 (1/60)

造り出し上に遺物はないのかについて確認を行った。

T57は地山が汀線から現地表面に沿って比較的緩やかに下降していき、内濠側標高18.7mで傾斜が変わる。傾斜角度は35.5°で下降し、標高17.8mで平坦面が見られる。地山は再度内濠側に向かって下降する。22層は砂質土でT56において認められたように中世に属すと考えられる土師器が含まれていた。35～38は土師器で、小皿35は口径8.3cm・器高1.6cm、小皿36は口径7.8cm・器高1.5cmで、いずれも底部糸切りである。T56で出土した小皿12と量量・調整が一致するため、同時期と捉えている。23層は壁面で検出した柱穴であり、中世と考えられる22層と同時期と考える。22層の堆積後に標高17.8mが平坦になり、20層が水平に堆積したのであろう。14～19層は砂質土であるが、13～14世紀前

半以降に堆積したものとみてよい。平坦面が13～14世紀前半以降と考えると、古墳築造時の斜面は失われている可能性が高い。

まずT72の表土下3～11層、標高20.8～21.4mまでは近世以降の造成土である。これらの土層からは18世紀を中心とした近世に属する陶磁器類が出土した。41・42は肥前陶器の片口鉢、43・44・46は肥前磁器の碗や皿、47は萩焼である。45は明の染付の可能性が高い。48・49は備前焼播鉢、50は備

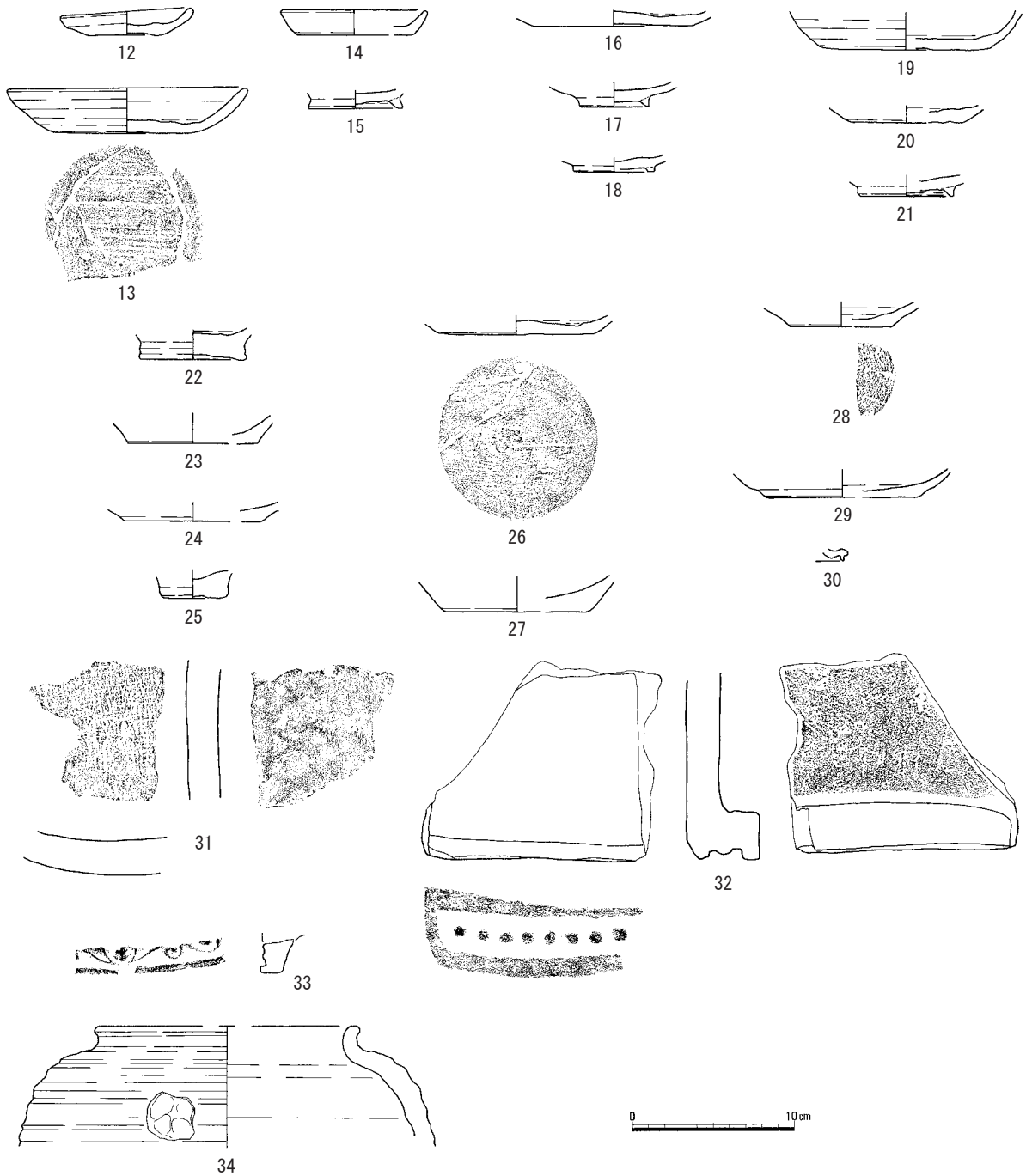


図11 T56出土遺物 (1/4)

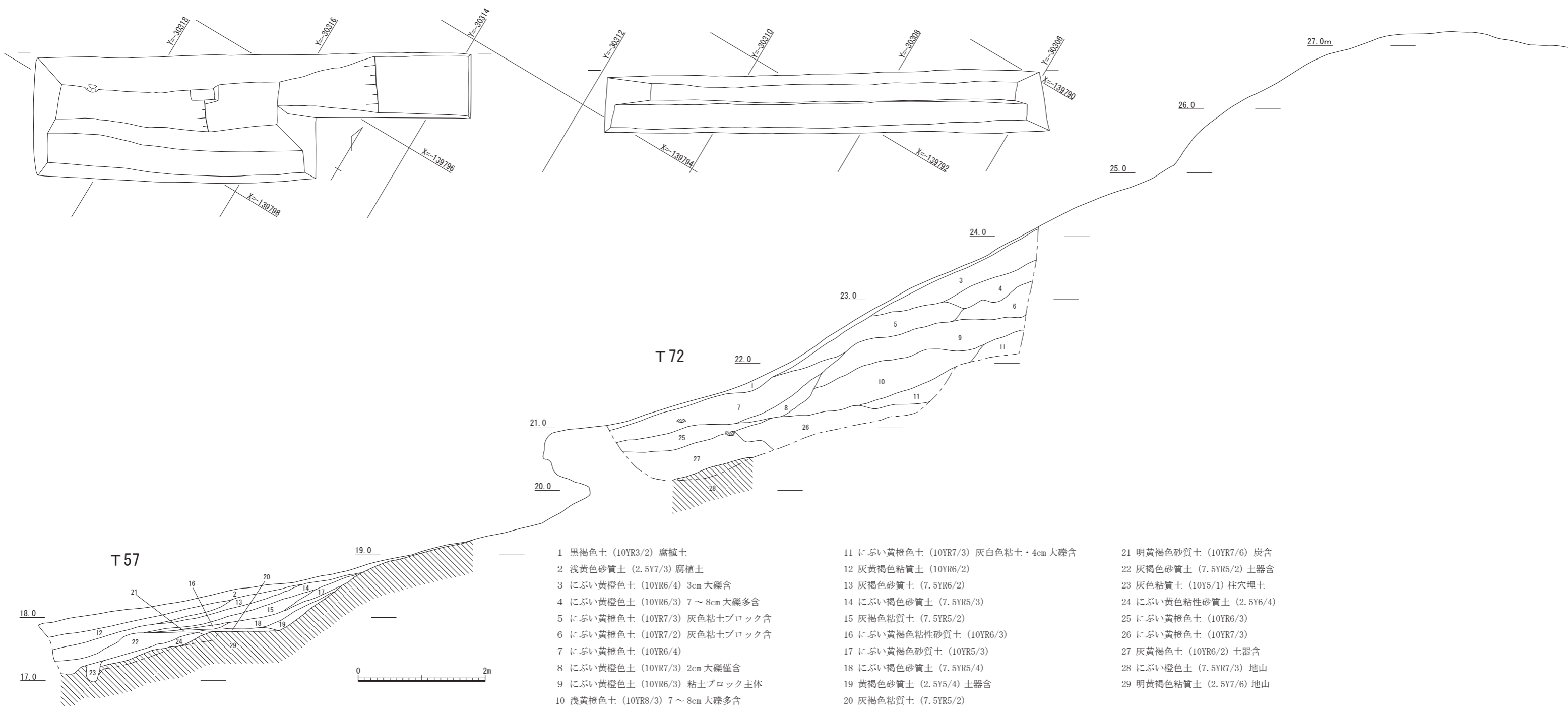


図12 T57-72 (1/60)

前焼鉢、51・52は焙烙、53は羽釜である。3層は礫を多く含みしまりがなく、10層も礫を比較的多く含むが、9層は粘土ブロックを主体とする層で池の浚渫土を盛り上げた可能性がある。したがって、標高21.4m以上は近世以降の造成によるものである。

25層以下27層の評価が難しいが、27層はやや暗い黄橙色、25・26層は黄橙色を呈する。25・26層からは中世と考えられる土師器片40が認められたため、28層の地山が造り出しの残存遺構面と判断した。造り出しの上部が削平を受けていると想定したい。27層は盛土の可能性はある。

見かけ上高く2段に見える造り出しの標高21.4m以上は近世以降の造成によるもので、本来の造り

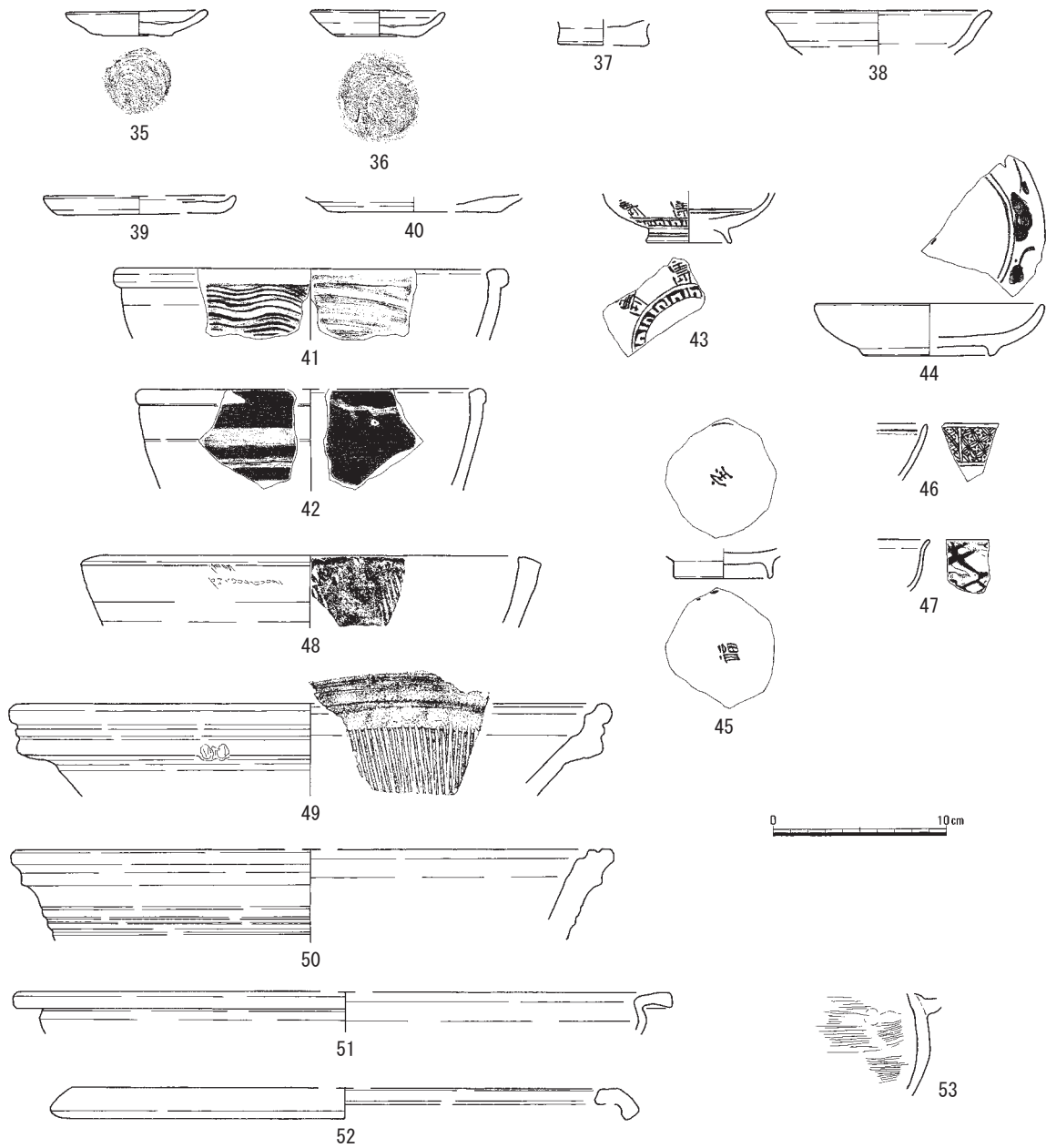


図13 T57・72出土遺物 (1/4)

出しは第1段テラスあるいはその斜面に取り付くものであったと考えることができる。しかし、直接的に造り出しに伴う遺物は皆無であった。

(4) 小結

計3本のトレンチによりくびれ部と造り出しを調査した。造り出しの平面形状についての情報は得られなかった。その斜面については、中世以降に削られている。見かけ上高く2段に見える造り出しの標高21.4m以上は近世以降の造成によるもので、本来の造り出しは第1段テラスあるいは斜面に取り付くものであったと考えることができる。しかし、造り出し上面も中世以降に改変を受けている可能性があり、詳細は不明と言わざるを得ない。将来における造り出しの面的調査を期待したい。

くびれ部では、13～14世紀前半以前の堆積層下に検出した地山の斜面はその堆積状況から、本来の第1段斜面を反映している可能性が高い。現状での残存墳丘面の傾斜角は31.1°で、やや流出していると考え、20°後半から30°前半を想定しておきたい。

第4節 前方部

(1) 概要

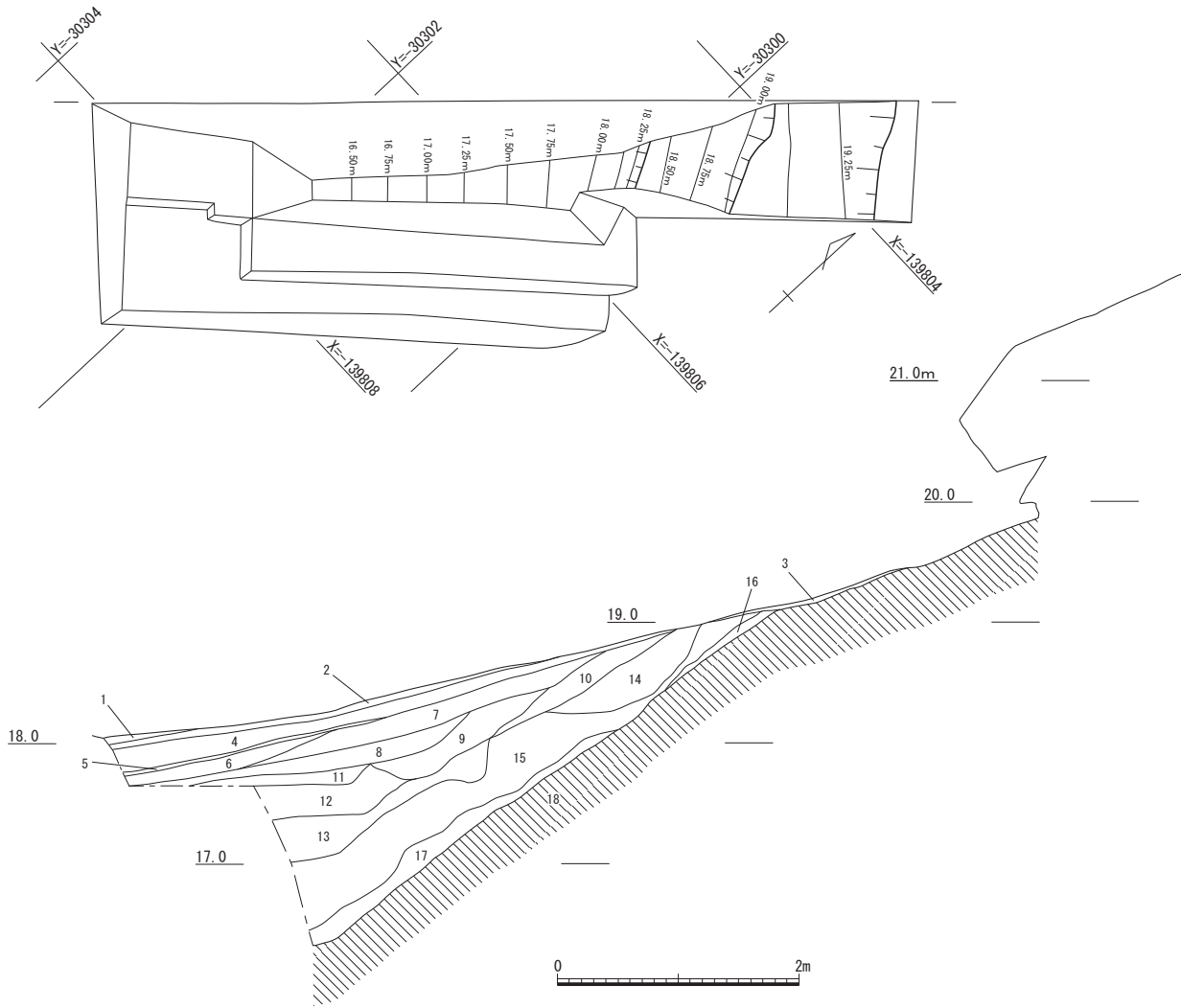
前方部は北東造り出しの付設されるその北東側を除いて周囲の内濠が溜め池となっているため、調査対象は広範囲に及ぶ。前方部南西側面にT58～61・71の5本、前方部前面にT62～66の5本、前方部北東側面にT67・68の2本の計12本のトレンチを設定して調査した。T60と71・62・64・66・67は、第1段斜面から第2段斜面まで一連に設定したトレンチであり、そのうちT64は墳丘主軸ラインに合わせて設けたものである。

前方部前面の南西側には大きな崩落が認められるが、前方部南西角は等高線が緩やかで平坦面が見られるため第1段テラスが比較的良好に残っているのではないかと考えられた。一方で、前方部前面の東半は神社の造成により等高線が密になっており、第2段斜面の検出が困難ではないかと思われた。

(2) T58 (図14、図版6-3・7-1)

前方部南西側面に取り付く造り出しの南東に位置する。造り出しの取り付けを意識して設定したが、トレンチ幅が狭く、造り出しに関する情報は得られなかった。トレンチの長さ6.9m、幅1.0～2.0mである。

表土下は汀線から現地表面に沿って標高19.1mまでは地山が緩やかに認められ、それより内濠側は傾斜角35.9°の急傾斜で下降する。標高16.3mまで掘削したが、調査範囲において墳端を推定する傾斜変換点を確認することができなかった。8～14層はしまりがあり、墳丘崩落土もしくは墳丘からの流出土と推定される。また、15層は褐灰色を呈し帯状のブロックが互層に見える。T56の地山上面で見られた黒褐色粘質土の14層とは異なる堆積と考えている。隣接するくびれ部や造り出しのトレンチT56・57と異なり、中世に属す遺物の出土はない。やや地山の斜面は急傾斜であるが、T56の状況を勘案すると、地山斜面は古墳築造時の第1段斜面を反映している可能性を考えたい。



- | | |
|--------------------------------|----------------------------------|
| 1 浅黄色細砂 (7.5Y7/3) | 10 灰黄褐色粘質砂 (10YR6/2) 円礫・細礫含 |
| 2 腐植土 | 11 灰黄褐色粘質土 (10YR6/2) 円礫多含 |
| 3 にぶい黄色砂 (2.5Y6/3) | 12 明黄褐色粘質土 (10YR7/6) 粘質微砂塊少含、角礫含 |
| 4 灰黄褐色微砂 (10YR5/2) | 13 暗灰黄色粘質土 (2.5Y4/2) 円礫・細礫多含 |
| 5 緑灰色粘質微砂 (5G6/1) グライ化 | 14 灰黄褐色土 (10YR6/2 ~ 5/2) 円礫・細礫多含 |
| 6 緑灰色粘土 (10G6/1) グライ化 | 15 褐灰色粘質微砂 (10YR4/1 ~ 5/1) |
| 7 灰褐色粘質砂 (7.5YR5/2) 上部 Fe 沈着 | 16 灰黄色粘質微砂 (2.5Y6/2) |
| 8 褐灰色粘質土 (10YR4/1 ~ 5/1) 角礫拳大含 | 17 黄灰色粘土 (2.5Y6/1) 下部グライ化 |
| 9 灰黄褐色土 (10YR5/2) 細礫多含 | 18 明黄褐色粘質土 (2.5Y6/6) 地山 |

図14 T58 (1/60)

(3) T59 (図15、図版7-2)

前方部南西側面中央付近に設定したもので、第1段斜面の遺存状況の確認を目的とした。トレンチは長さ7.3m、幅1.0~2.0mである。

表土下は汀線から現地表面に沿って標高19.0mまでは地山が緩やかに認められ、それより内濠側は傾斜角33.3°の傾斜で下降する。汀線から標高19.0mの傾斜変換点までの距離が3.7mと長いのは、波浪による浸食がかなり墳丘側に入り込んでいるためである。堆積土は、1~3層が砂質土で4~8層は

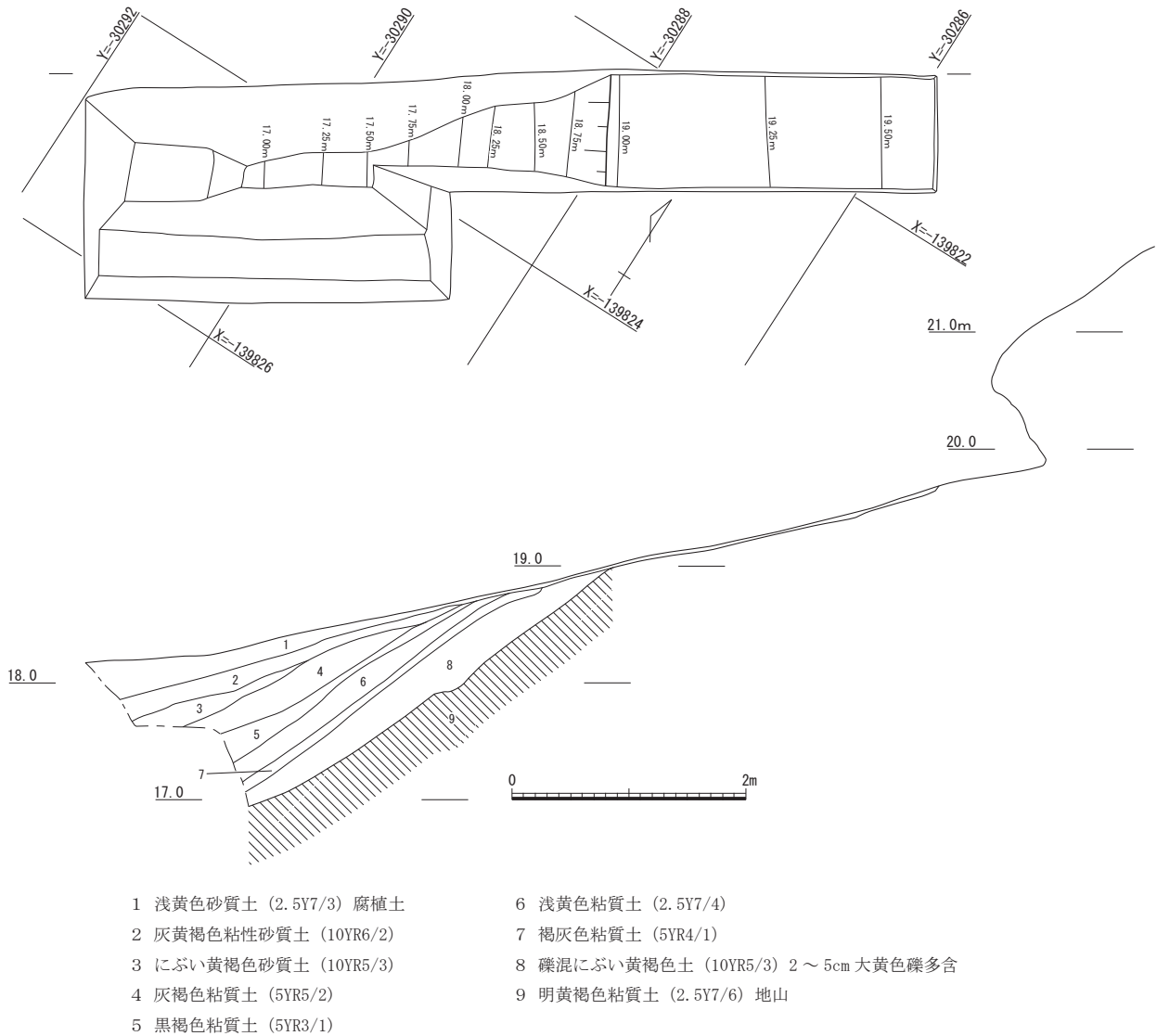


図15 T59 (1/60)

しまりがある。5・7層は地山斜面に沿って黒褐色系の粘質土が堆積する。その間の6層は浅黄色を呈し墳丘崩落土の可能性がある。8層はにぶい黄褐色で礫を多く含みしまりがあるため、T56の地山上面で見られた中世以前と考えられる黒褐色粘質土(14層)とは異なる堆積であり、墳丘崩落土の可能性を考えている。調査範囲においては、墳端を推定する傾斜変換点を確認することができなかったため、傾斜変換点はさらに内濠側に位置すると思われる。

(4) T60・71 (図16・18、図版7-3、8、9-1・2)

前方部南西側面の南西角近くに設定した。当初調査した第1段斜面のT60の上位に追加して第1段テラスから第2段斜面にかけてのT71を設けた。T60で長さ4.9m、幅1.0~2.0m、T71で長さ7.2m、幅1.0mのトレンチで、総延長は14.7mである。前述のとおり前方部南西角付近は汀線の浸食部分の上に第1段テラスが比較的良好に残っていると考えられた。

T60は汀線から現地表に沿って墳丘の残存面が緩やかに認められ、それより内濠側が標高18.9mから傾斜が変わり下降していく。T59までの墳丘残存面と異なり、地山上の25層はしまりが強く弥生土器を含むもので、盛土と判断した。地山と大差なく見分けは困難であった。出土した弥生土器は54~

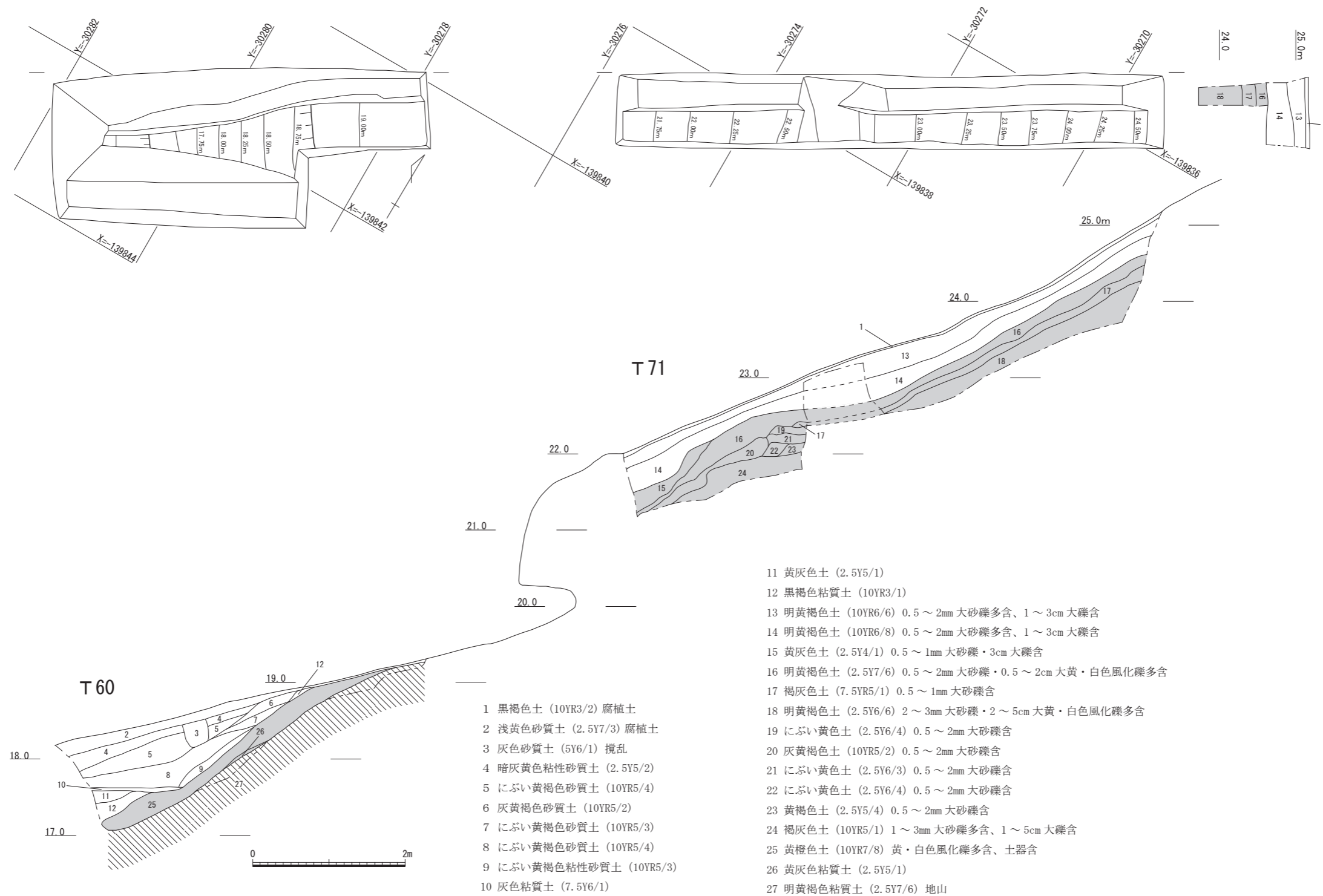


図16 T60-71 (1/60)

56で、壺あるいは甕の口縁部片と底部片である。

内濠堆積土3～9層は砂質土である。内濠堆積土の11・12層が粘質土で古く、その後10層より上位が堆積したようである。12層は黒褐色を呈し有機質分を含んでおり、比較的古い内濠堆積土と推定する。10層は水平堆積であり、25層上面も10層により段をなしていて、この段より上の第1段斜面の傾斜角が37.9°と急傾斜であることを考えると、浚渫等で人工的に掘削された可能性が考えられる。調査範囲においては、墳端を推定する傾斜変換点を確認することができなかった。

T71の表土下13・14層は流土である。流土を除去すると、墳丘面を確認した。調査した範囲において墳丘は15～24層の盛土で構成されている。樹木があり掘ることができなかったが、標高22.6m付近は平坦に近く、そこから傾斜が変わって上部が第2段斜面になる。第2段斜面の傾斜角は27.8°である。第1段は地山上に盛土を行うことで形成し、テラスから第2段斜面にかけて斜面に沿って盛土を施している。16層は明黄褐色、17層は褐灰色で精良な土を使用している。16層は弥生土器片を包含しており、器台57が出土した。これらの層は、前方部北東側面のT67の第2段斜面でも認められたもので、前方部にわたってその第2段斜面に見られる基本的な盛土であろう。第1段テラス面は標高22.6m以上と想定できる。その幅は流出により判断がつかない。

(5) T61 (図17・18、図版9-3)

前方部南西角に設けた長さ4.9m、幅1.0～2.0mのトレンチで、第1段斜面の遺存状況を確認することを目的とした。

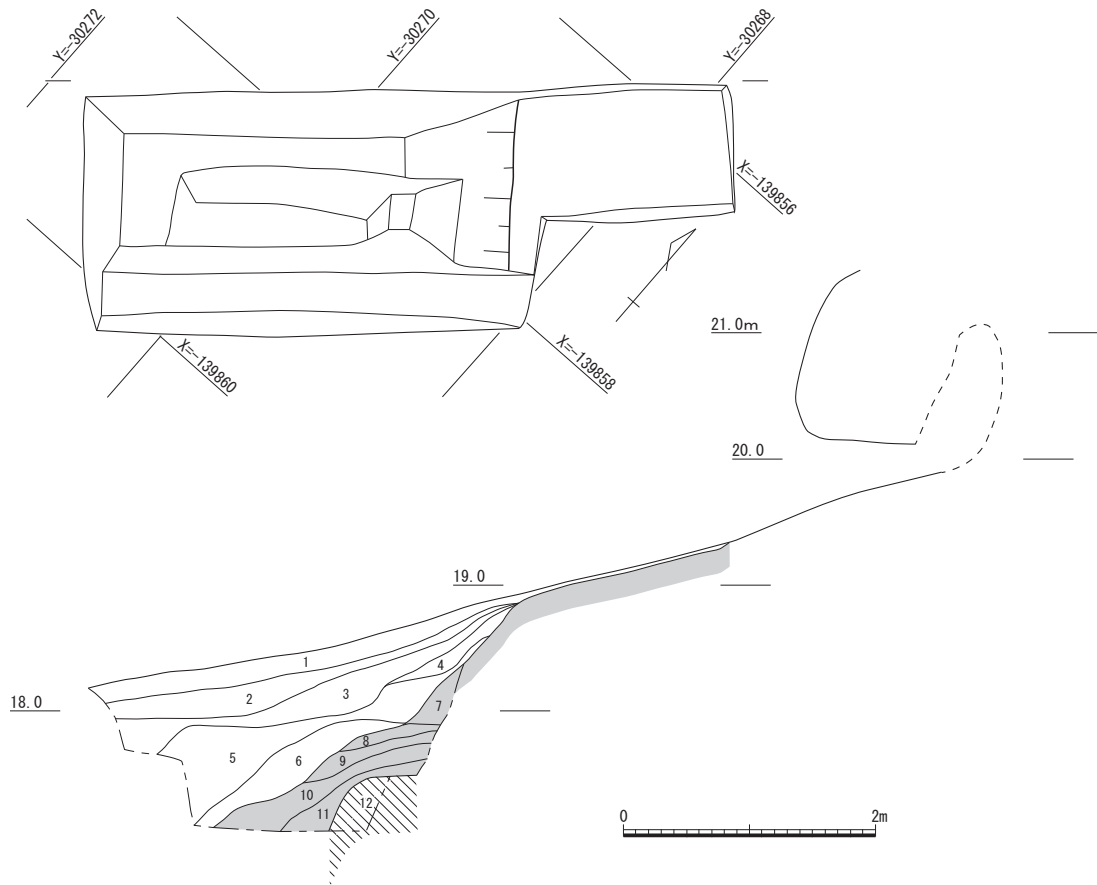
汀線から現地表面に沿って墳丘の残存面が緩やかに認められ、それより内濠側が標高18.8mから傾斜が変わり下降していく。12層は地山で、その上の7～11層は盛土であり、7層には弥生土器が含まれていた。盛土の表面から、弥生土器の高杯58が出土した。内濠堆積土は1～4層が砂質土で、5層は明黄褐色を呈し墳丘崩落土の可能性はある。

(6) T62 (図18・19、図版10、11-1)

前方部前面の南西側に設けたトレンチで、第1段から第2段斜面までの確認を目的とした。T71と同様に第1段テラスが比較的良好に遺存していると思われた。汀線より下（以下、下段という）でトレンチの長さ8.3m、幅2.0m、上（以下、上段という）で長さ9.9m、幅1.0mである。総延長は19.7mである。

下段の5～8層は墳丘崩落土が堆積したものである。10～16層までは上面幅4.3m、下面幅1.7mで墳丘を溝状に掘り込んだものである。底面に近い15・16層は灰色系の粘質土で、10～14層は砂質土である。後述するT66の9層のあり方から見れば、17～21層の内濠堆積土を切って設けられているため、それほど古く見積もることはできない。この溝状の掘削はT63においても認められ、前方部前端を南西～北東方向に掘られている。掘削された内濠側の墳丘斜面の地山は断面三角形に遺存する。この内濠側、標高16.8mで墳端と推定できる傾斜変換点を確認した。その上部の堆積土21層の時期が不明であるため、この傾斜変換点がどの段階のものであるか分からない。古墳築造以後の改変による可能性もある。

汀線近くは墳丘構築土が認められ、黄色土38層の地山上に盛土を施すことで第1段斜面を築いている。まず地山上に黄色系土の37層、褐色系土の35・36層を積み、その後小さな単位の盛土で構成さ



- | | |
|----------------------------|-------------------------|
| 1 灰黄色砂質土 (2.5Y6/2) 腐植土 | 7 褐色土 (10YR4/4) |
| 2 褐灰色粘質土 (7.5YR6/1) | 8 褐色土 (10YR4/4) |
| 3 灰黄褐色粘性砂質土 (10YR6/2) 橙色礫含 | 9 褐色土 (10YR4/4) |
| 4 にぶい褐色砂質土 (7.5YR5/4) | 10 褐色土 (10YR4/4) |
| 5 明黄褐色粘質土 (10YR6/6) | 11 にぶい褐色粘質土 (7.5YR5/4) |
| 6 褐灰色粘質土 (10YR4/1) | 12 明黄褐色粘質土 (2.5Y7/6) 地山 |

図17 T61 (1/60)

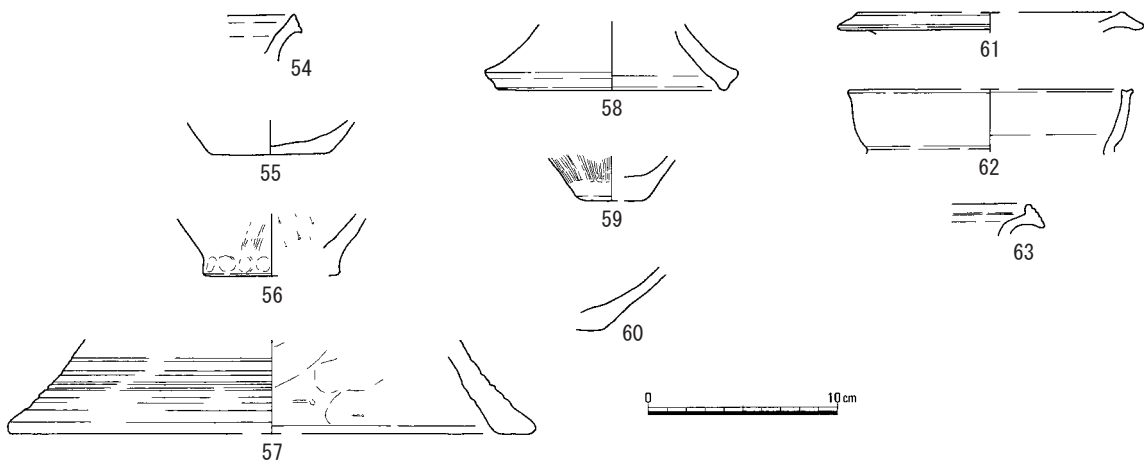
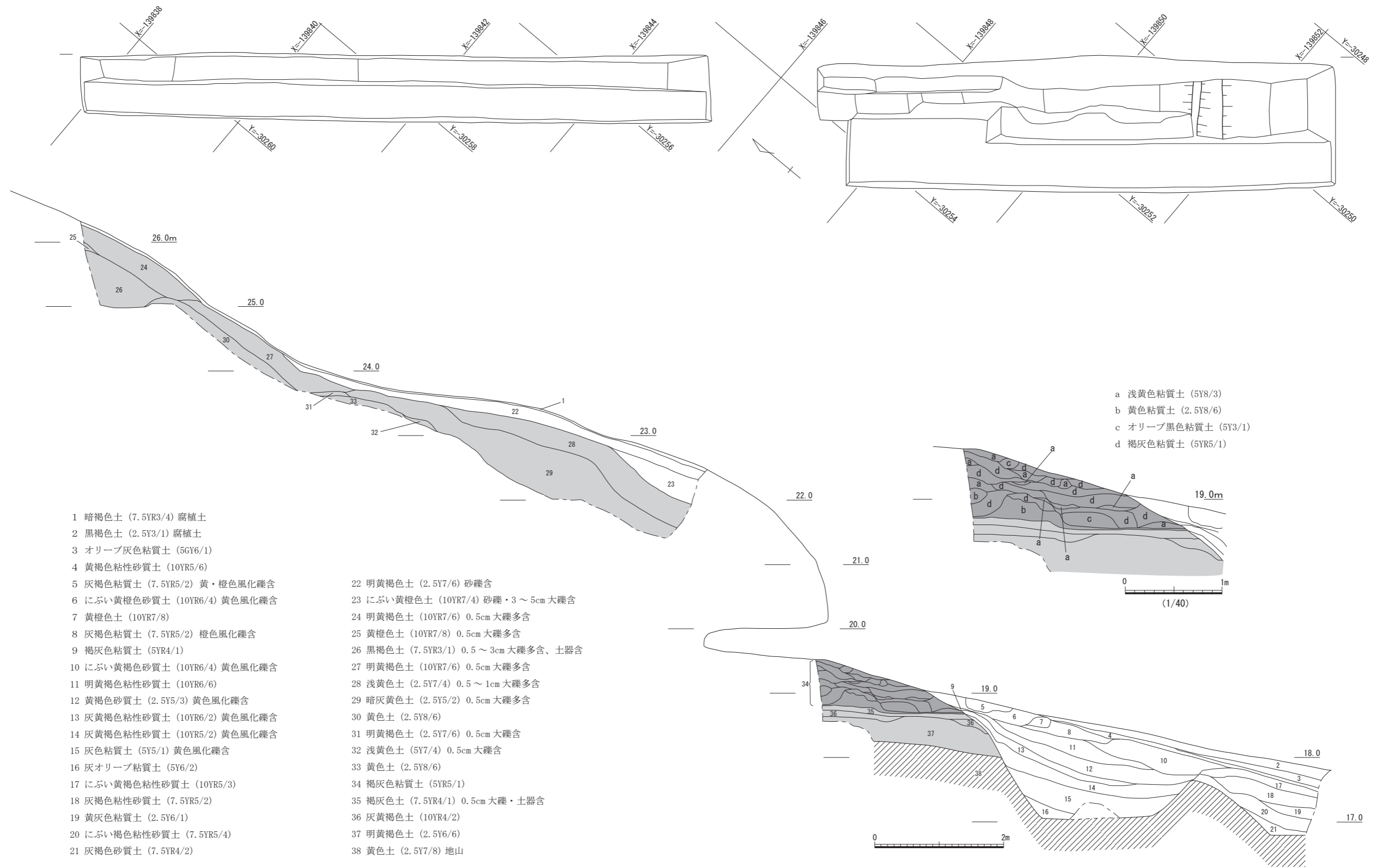


図18 T60・71・61・62出土遺物 (1/4)



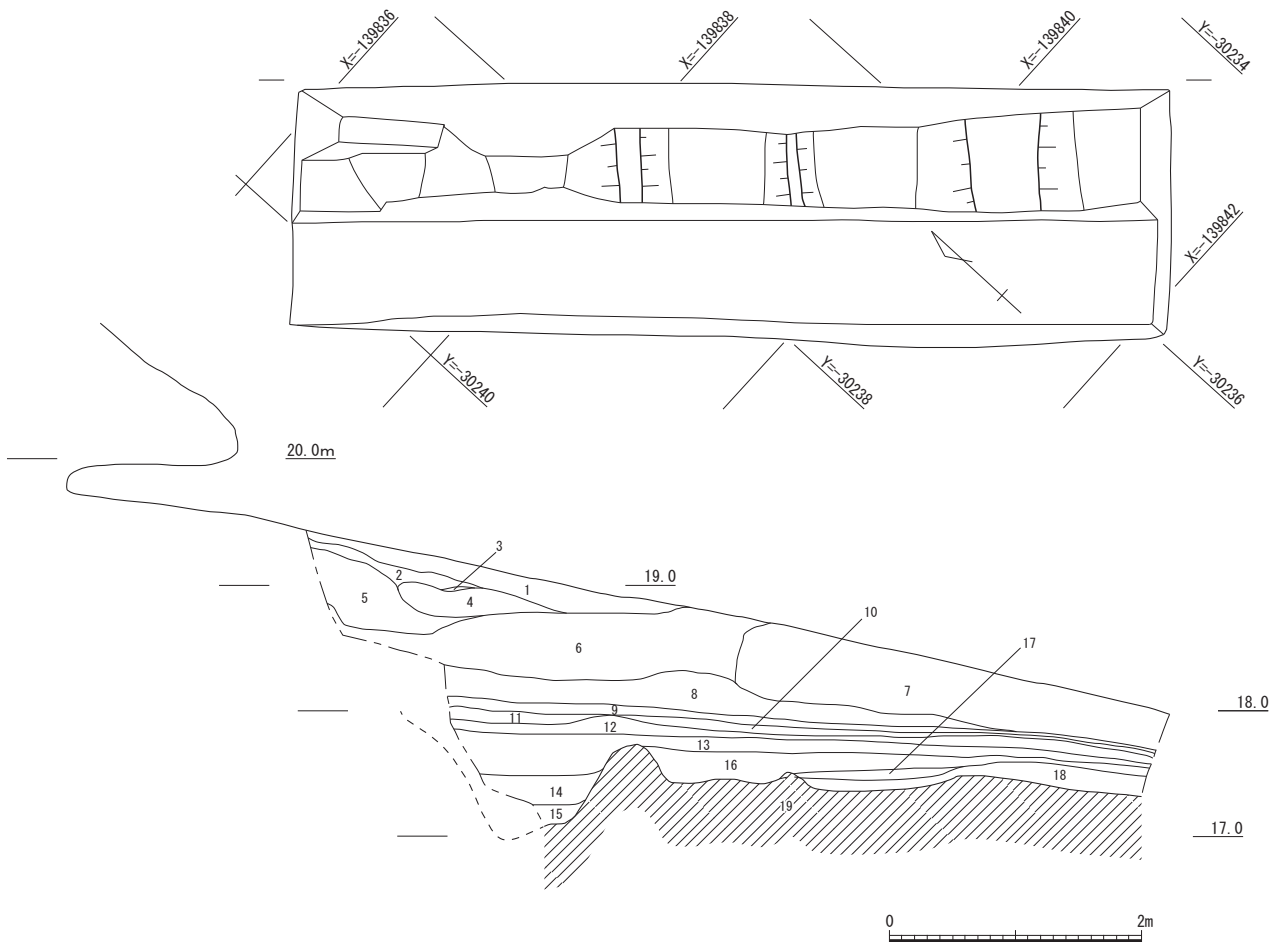
- | | |
|-------------------------------|-------------------------------------|
| 1 暗褐色土 (7.5YR3/4) 腐植土 | 22 明黄褐色土 (2.5Y7/6) 砂礫含 |
| 2 黒褐色土 (2.5Y3/1) 腐植土 | 23 にぶい黄橙色土 (10YR7/4) 砂礫・3～5cm 大礫含 |
| 3 オリーブ灰色粘質土 (5GY6/1) | 24 明黄褐色土 (10YR7/6) 0.5cm 大礫多含 |
| 4 黄褐色粘性砂質土 (10YR5/6) | 25 黄橙色土 (10YR7/8) 0.5cm 大礫多含 |
| 5 灰褐色粘質土 (7.5YR5/2) 黄・橙色風化礫含 | 26 黒褐色土 (7.5YR3/1) 0.5～3cm 大礫多含、土器含 |
| 6 にぶい黄橙色砂質土 (10YR6/4) 黄色風化礫含 | 27 明黄褐色土 (10YR7/6) 0.5cm 大礫多含 |
| 7 黄橙色土 (10YR7/8) | 28 浅黄色土 (2.5Y7/4) 0.5～1cm 大礫多含 |
| 8 灰褐色粘質土 (7.5YR5/2) 橙色風化礫含 | 29 暗灰黄色土 (2.5Y5/2) 0.5cm 大礫多含 |
| 9 褐灰色粘質土 (5YR4/1) | 30 黄色土 (2.5Y8/6) |
| 10 にぶい黄褐色砂質土 (10YR6/4) 黄色風化礫含 | 31 明黄褐色土 (2.5Y7/6) 0.5cm 大礫含 |
| 11 明黄褐色粘性砂質土 (10YR6/6) | 32 浅黄色土 (5Y7/4) 0.5cm 大礫含 |
| 12 黄褐色砂質土 (2.5Y5/3) 黄色風化礫含 | 33 黄色土 (2.5Y8/6) |
| 13 灰黄褐色粘性砂質土 (10YR6/2) 黄色風化礫含 | 34 褐灰色粘質土 (5YR5/1) |
| 14 灰黄褐色粘性砂質土 (10YR5/2) 黄色風化礫含 | 35 褐灰色土 (7.5YR4/1) 0.5cm 大礫・土器含 |
| 15 灰色粘質土 (5Y5/1) 黄色風化礫含 | 36 灰黄褐色土 (10YR4/2) |
| 16 灰オリーブ粘質土 (5Y6/2) | 37 明黄褐色土 (2.5Y6/6) |
| 17 にぶい黄褐色粘性砂質土 (10YR5/3) | 38 黄色土 (2.5Y7/8) 地山 |
| 18 灰褐色粘性砂質土 (7.5YR5/2) | |
| 19 黄灰色粘質土 (2.5Y6/1) | |
| 20 にぶい褐色粘性砂質土 (7.5YR5/4) | |
| 21 灰褐色砂質土 (7.5YR4/2) | |

- a 浅黄色粘質土 (5Y8/3)
- b 黄色粘質土 (2.5Y8/6)
- c オリーブ黒色粘質土 (5Y3/1)
- d 褐灰色粘質土 (5YR5/1)

図19 T62 (1/60)

れる34層を積み上げている。37層は地山の可能性もあるが、35層は弥生土器を含むもので、34層は凸レンズ状を呈し、青木敬氏が「土塊積み」と呼んでいるものに相当すると考えられる⁽¹⁾。魚のうろこ状のようにも見えるこの盛土の一単位は長さ30~80cmで下部が黒褐色系で上部になるにつれて灰白色系を呈する。中には浅黄色や黄色を呈するものも含まれ、拡大図にa~dの細分した層を示した。標高18.7~19.5mの範囲に認められ、前方部北東側面のT67においてもこの盛土が確認できた。

上段は22・23層が流土とみられ、流土か盛土かの認定は非常に困難であったが、前方部南西側面のT71の状況等から24~33層を盛土と判断した。これらの土層からは弥生時代後期に属すると考えられる弥生土器59~62が出土した。29層は分層を試みたものの明瞭でなかったが、土塊状に浅黄色、褐灰色、黄色の粘質土が所々で認められたので、下段の34層に近い盛土と考える。26層は黒褐色を呈するもの



- | | |
|--------------------------------|------------------------------|
| 1 灰色粘性砂質土 (N6/1) 2cm 大礫含 | 11 オリーブ黄色粘性砂質土 (7.5Y6/3) |
| 2 明黄褐色土 (2.5Y7/6) 黄・白色粘土ブロック含 | 12 灰オリーブ粘性砂質土 (7.5Y6/2) |
| 3 褐灰色土 (5YR4/1) | 13 灰色粘質土 (7.5Y5/1) |
| 4 明黄褐色土 (2.5Y7/6) 黄・白色粘土ブロック含 | 14 灰オリーブ粘質土 (5Y5/2) |
| 5 にぶい黄褐色土 (10YR5/4) 5cm 大礫含 | 15 灰色粘質土 (N6/) |
| 6 黄灰色粘性砂質土 (2.5Y5/1) 1~4cm 大礫含 | 16 オリーブ灰色粘質土 (10Y5/2) |
| 7 明黄褐色土 (2.5Y6/6) | 17 オリーブ黄色砂質土 (5Y6/4) |
| 8 オリーブ灰色粘性砂質土 (10Y6/2) | 18 暗灰黄色粘質土 (2.5Y5/2) 5cm 大礫含 |
| 9 オリーブ黒色粘質土 (5Y3/1) 旧表土 | 19 黄色土 (2.5Y7/8) 地山 |
| 10 灰色粘質土 (10Y6/1) | |

図20 T63 (1/60)

で、弥生土器を含んだものであった。弥生土器63が出土している。明確な平坦面は認められないが、標高23.5~24.0m付近で傾斜が変わるため、この辺りに第1段テラス面を想定したい。それより上が第2段斜面となり、傾斜角度は30.6°を測る。

(7) T63 (図20・21、図版11-2・3)

前方部前面に設定した長さ7.0m、幅2.0mのトレンチで、第1段斜面の遺存状況を確認することを目的とした。

このトレンチの現汀線より上の段は、大きく墳丘が崩落していた。墳丘第1段斜面の遺存状況は悪く、地山は標高17.4m程で比較的平坦な面として検出した。9層は黒褐色系の腐植土で現段階以前の表土面と考えられる。9層は標高17.7~18.1mに堆積しており、古墳築造以降のある段階の汀線があった可能性がある。その段階で既に第1段斜面は失われていて、かなり墳丘側に入り込んだ状態となっていたことになる。それより上の1~8層は9層が地表面であった以降の墳丘崩落土である。先述したように、これだけ厚く崩落土が堆積したのは現汀線より上の段に大きな崩落の痕があることから分かる。内濠堆積土から、肥前磁器64・65、肥前陶器66、備前焼播鉢67・68、平瓦69が出土した。備前焼播鉢68は16世紀半ば、69は凸面縄目叩きで備前国分寺から流入したものであるが、他は近世の18世紀に属するものである。

トレンチの墳丘側には、T62から延びていると考えられる溝状の掘削があり、全体として第1段斜面は大きく失われていた。溝底面の標高は17.1mで、T62の溝状の掘削と同じであり、やはりこの掘削の内濠側の地山は断面三角形の土手状に遺存する。

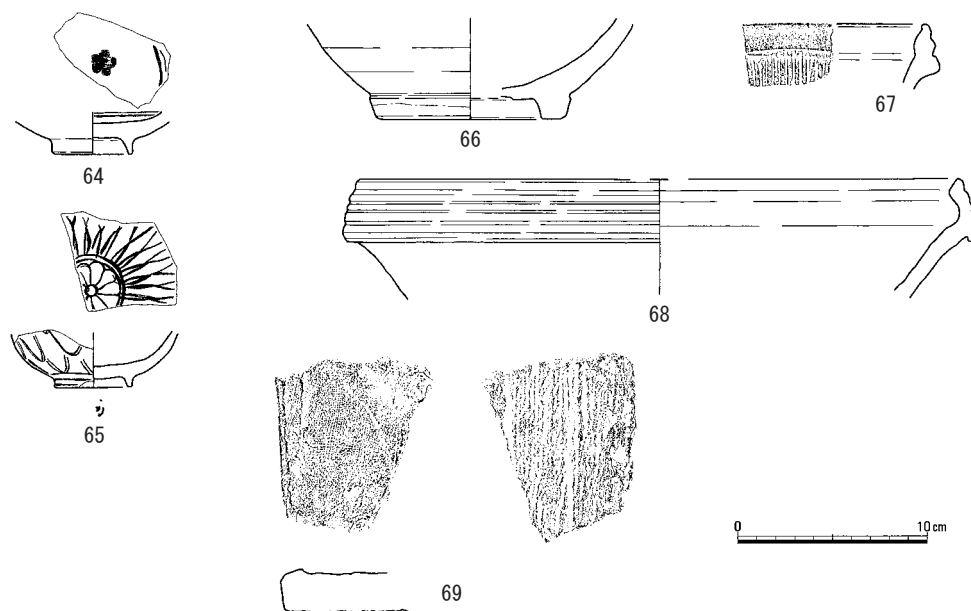


図21 T63出土遺物 (1/4)

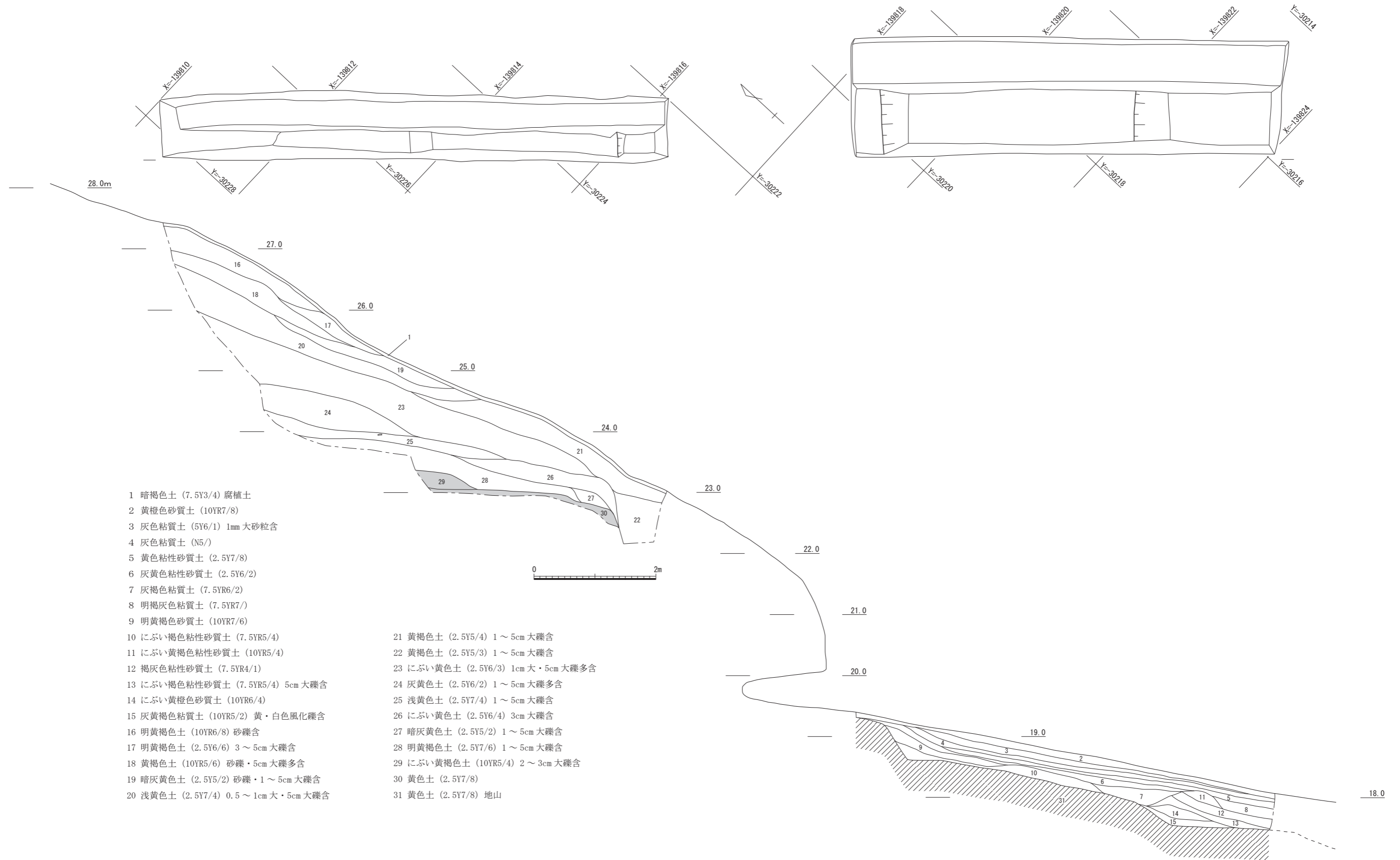


図22 T64 (1/60)

(8) T64 (図22・23、図版12、13-1)

前方部前面の墳丘主軸ラインに、墳丘第1段から第2段斜面にかけて設定したトレンチである。汀線より下（以下、下段という）でトレンチの長さ7.0m、幅2.0m、上（以下、上段という）で長さ8.4m、幅1.0mである。総延長は18.4mである。想定される第1段テラスには等高線が詰んでおり、テラスは埋没している可能性が考えられた。

下段は、汀線からの距離2.3mまで地山が現地表に沿って認められ、それより内濠側標高18.6mで段をもち、緩やかに下降し、標高17.5mで傾斜変換点が認められる。内濠堆積土は土手状に残る11～15層が古く、7層が新しい。すべてがしまりの弱い砂質土等で古く見積もることはできず、汀線近くの標高18.6mの段は比較的新しい段階のものとする。標高17.5mの内濠側の傾斜変換点は墳端を反映している可能性はあるが、11～15層には古い遺物の出土はなく、古墳築造以降の汀線あるいは浚渫の痕跡と推定することもできる。積極的に評価するならば、この傾斜変換点の若干内濠側に本来の墳端があった可能性もある。出土遺物として、弥生時代後期前葉の高杯**78**、青磁**79**、備前焼甕**80**がある。

上段の16～28層は礫を含むしまりのない堆積で、18世紀代の陶磁器類を含んでいた。**70**は弥生土器、**71・72**は肥前陶器、**73**は肥前磁器の碗、**74～77**は備前焼挿鉢である。そのため、神社を造成する際の押し出し土が堆積したものと考えられる。24層は礫混層が幾重にも堆積している状況である。この押し出し土の厚さは2.5m以上にも及ぶ。29層および黄色土の30層は墳丘の残存面で墳丘構築土と考えられるので、第1段テラスを標高23.4m以上に想定することが可能である。

(9) T65 (図24、図版13-2)

前方部前面に設定した長さ7.0m、幅2.0mのトレンチで、第1段斜面の遺存状況を確認することを目的とした。

汀線から標高18.9mまでは地山が露出し、これに沿って地山の斜面が続き、標高17.8mで平坦面をもつ。そして標高17.3mに傾斜変換点を認めることができる。やはり堆積土は砂質土でそれほど古くは見積もることができず、古墳築造以降の汀線あるいは浚渫の痕跡と推定することも可能である。この傾斜変換点の若干内濠側に本来の墳端があった可能性も付け加えておく。

(10) T66 (図23・26、図版13-3、14-1)

前方部前面の前方部北東角近くの墳丘第1段から第2段斜面にかけて設定したトレンチである。

汀線より下（以下、下段という）でトレンチの長さ7.0m、幅2.0m、上（以下、上段という）で長さ6.0m、幅1.0mである。総延長は14.9mである。T64と同様に想定される第1段テラスには等高線が詰んでおり、それが埋没している可能性が考えられた。

下段は、汀線からの距離3.1mまで地山が露出しており、それより内濠側はこの傾斜に沿って下降し、標高17.4mで傾斜変換点が認められる。堆積土は砂質土で9層からは瓦質で近世以降と考えられる瓦が出土したため、この段階で浚渫等が行われた可能性が考えられる。ただし、浚渫が大きな削平でなければ、標高17.4mの内濠側の傾斜変換点は墳端を反映している可能性はある。

上段の10～13層はしまりのない堆積で、近世以降の陶磁器類を含んでいた。**83・85**は肥前陶器、**84**は肥前磁器の碗で、**86**は肥前陶器の片口鉢である。13層は礫を多く含む。そのため、神社を造成する

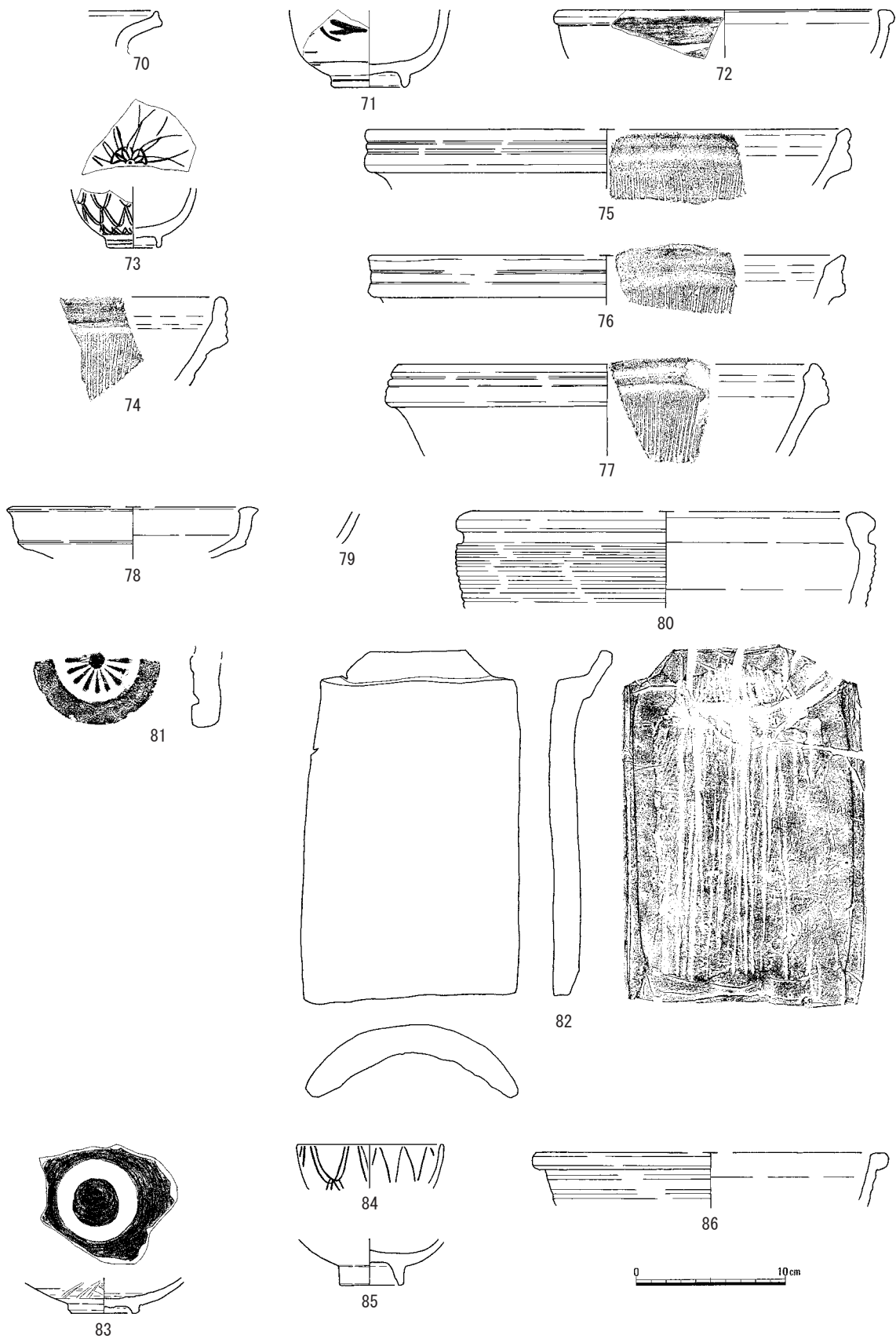


図23 T 64・66出土遺物 (1/4)

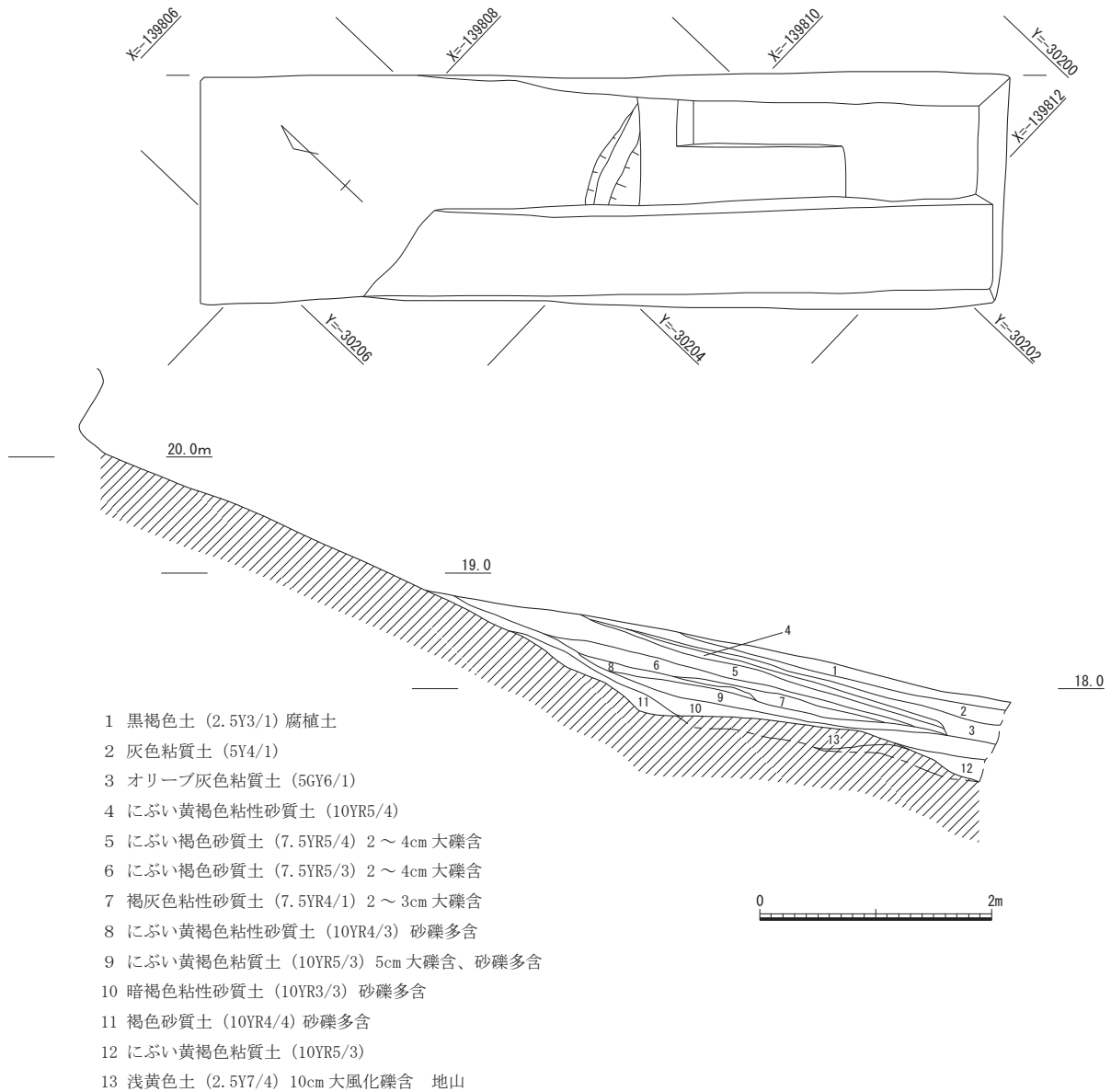


図24 T65 (1/60)

際の押し出し土が堆積したものと考えられる。15層はしまりのある黄色土で内濠に向かって傾斜している。墳丘の残存面と考えられ、第1段テラスを標高23.5m付近に想定することが可能である。

(11) T67 (図25・27、図版14-2、15、16)

前方部北東側面の北東角近くの第1段から第2段斜面にかけて設定した。汀線より下（以下、下段という）で長さ5.9m、幅1.0m、上（以下、上段という）で長さ6.4m、幅1.0mのトレンチで、総延長は14.0mである。現状では前方部北東角付近は南西角と比べると第1段テラスの痕跡は明瞭でない。また、神社の境内に近く、T64や66と同じように近世の押し出し土が見られるのではないかと思われた。

下段は3～6層が内濠堆積土で、7～9層は墳丘崩落土である。26層は小さな単位で構成される墳丘構築土で、「土塊積み」とみられる。前方部前面南西角のT62でも認められたもので、前方部前面付近における第1段斜面の基本的な盛土方法と考えられる。やはり魚のうろこ状あるいは凸レンズ状

に見え、この盛土の一単位は長さ30～80cm程度で下部が黒褐色系で上部になるにつれて灰白色系を呈している。標高18.5～19.7mの範囲に位置し、T62で見られた標高とほぼ一致する。26層の内濠側34～36層は土手状になる。35層は比較的礫を多く含み、26層を積む前の内濠側の土留めの役割をもつ可能性がある。このトレンチでは地山を検出することができず、墳丘構築土はすべて盛土と判断した。29・31層には弥生土器が含まれていて、29・31層は黒褐色系、28・30・33層は黄褐色系を呈している。87～89は甕、90は高杯である。破片のため詳細は判断しかねるが、後期後半～古墳時代初頭の属するものと考えられ、他のトレンチで出土する弥生時代後期前葉のものとは時期が異なる。調査範囲においては、墳端を推定する傾斜変換点を確認することができなかつたため、墳端はさらに内濠側に位置すると考えられる。

上段の表土下10・11層は流土である。流土を除去すると、墳丘面を確認した。調査した範囲において墳丘は12～25層の盛土で構成されている。標高22.5m付近は平坦でそこから傾斜が変わって上部が第2段斜面になる。第2段斜面の傾斜角は28.2°である。前方部南西側面のT71で確認した第2段斜面の傾斜角に近い数値である。第1段は盛土を積み上げ構築し、テラスから第2段斜面にかけては斜面に沿って盛土を施している。12層は黄褐色、15層は黒褐色で精良な土を使用している。これらの層は、前方部南西側面のT71の第2段斜面でも16・17層に認められたものである。テラスの残存面の標高から、第1段テラス面は標高22.5m以上と想定できる。その幅は流失により判断がつかないが、1.5m以上である。

上段からの出土遺物として、弥生時代後期前葉の高杯91、須恵器92、備前焼と思われる播鉢93がある。

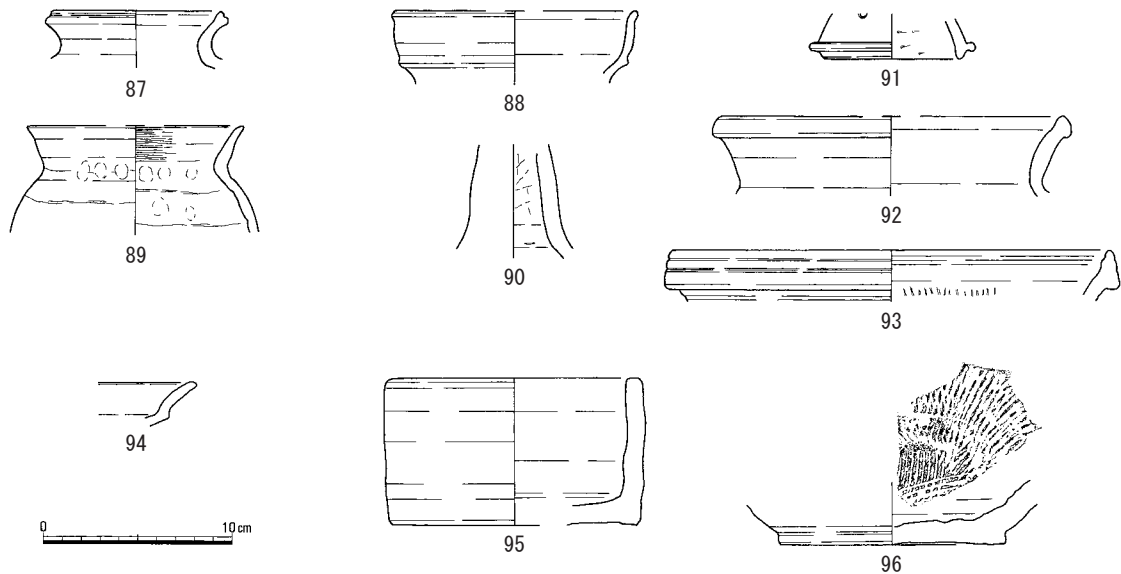


図25 T 67・68出土遺物 (1/4)

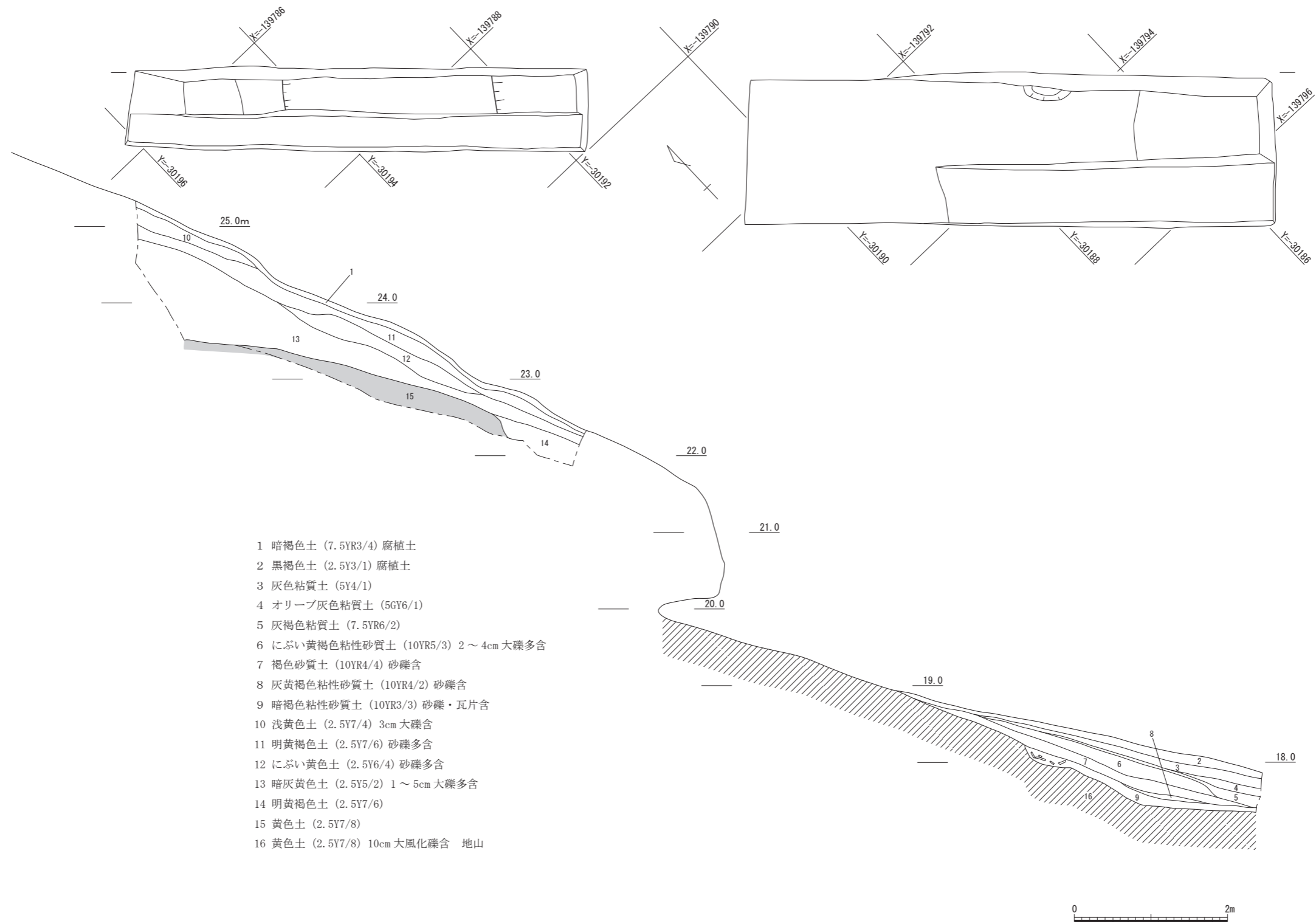


図26 T66 (1/60)

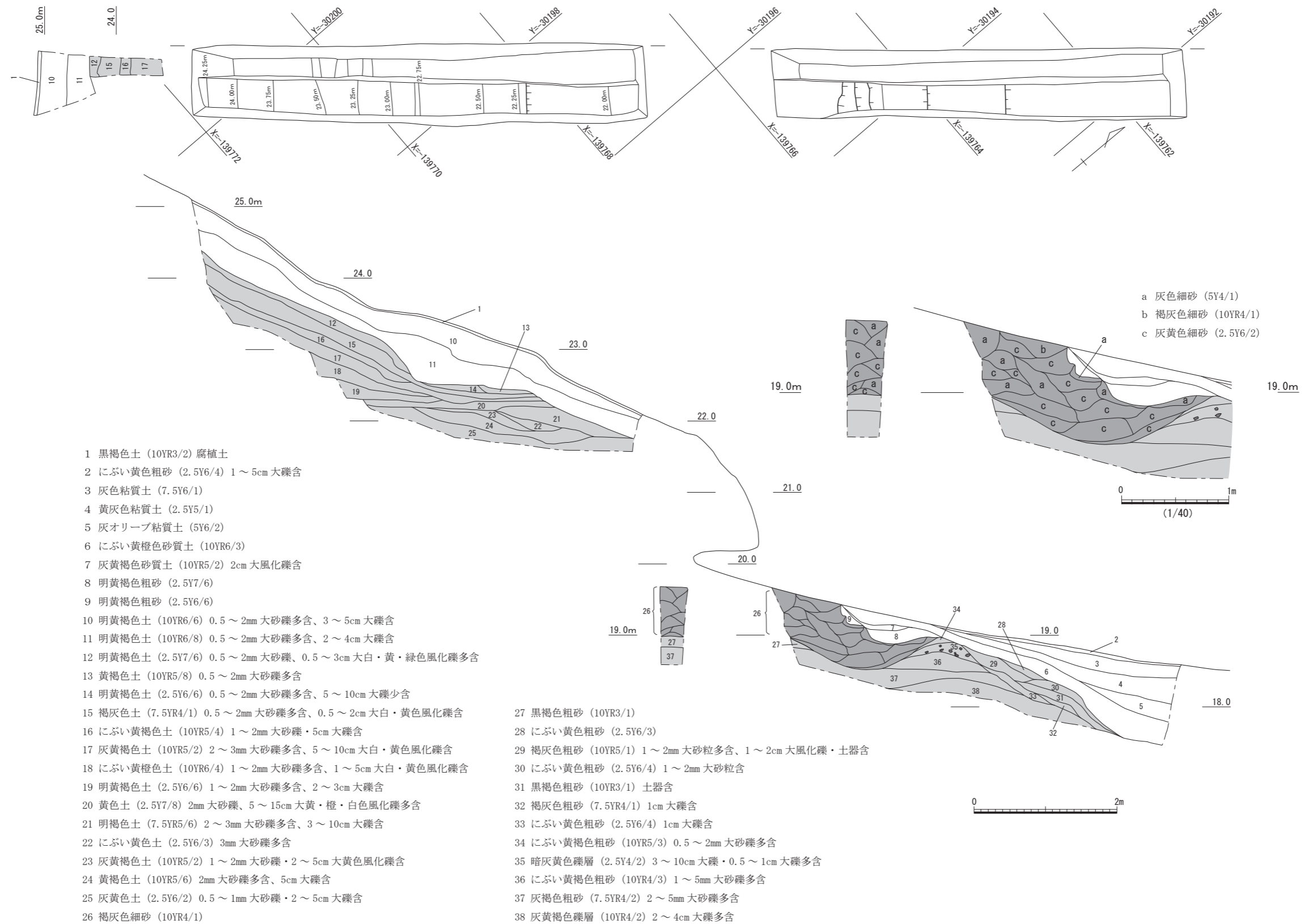


図27 T67 (1/60)

(12) T68 (図25・28、図版17-1・2)

前方部北東側面に設定した長さ5.7m、幅1.0mのトレンチで、第1段斜面の遺存状況を確認することを目的とした。汀線からの距離2.2mまで現地表に沿って墳丘の残存面が認められ、それより内濠側の標高19.4mから傾斜が変わり下降していく。

トレンチ内において墳丘構築土は盛土のみで構成される。盛土は非常にしまりのある土で、11・13・15・16層が黄色系、12・14層が褐色系を呈し、層の細分を示している。これらは、T67の黄褐色

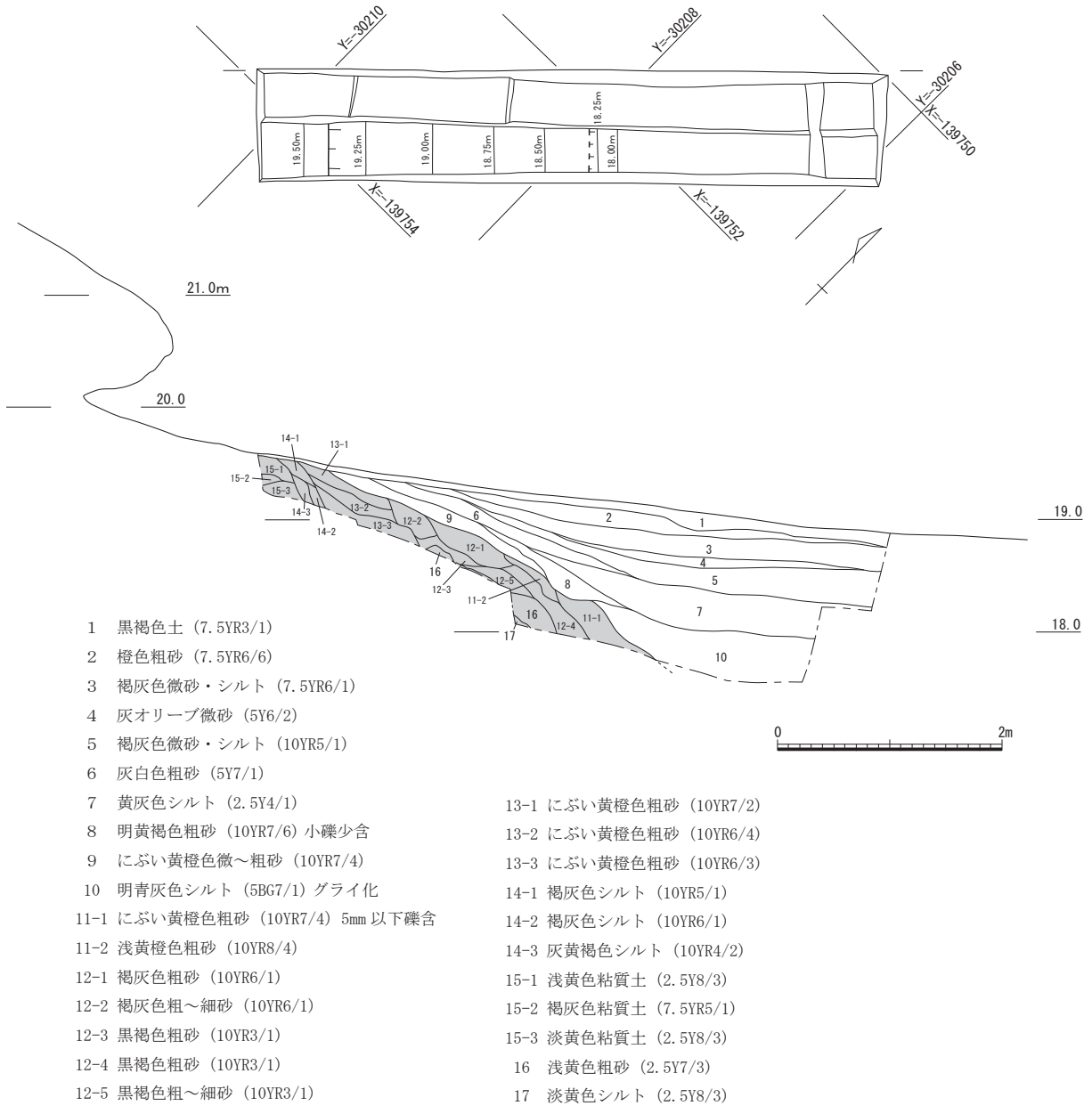


図28 T68 (1/60)

系(28・30・33層)、黒褐色系(29・31層)の土層に対応するものと考えられる。T67から20mしか離れていないが、「土塊積み」は見られなかった。「土塊積み」は前方部前端およびそれに近い場所で用いられたのかもしれない。

2～10層の内濠堆積土は厚く、墳端と推定できる傾斜変換点はさらに内濠側に位置すると推定される。10層はグライ化し、青灰色を呈していた。

出土遺物として、弥生時代後期後葉の高杯口縁部94、備前焼の鉢95、備前焼の播鉢96がある。

(13) 小結

計12本のトレンチにより前方部前面と両側面を調査した。墳丘の構築方法を知る手掛かりをもつトレンチが多かった。まず前方部南西角、北東角付近では第1段斜面の構築に凸レンズ状の小さな単位の盛土を施す「土塊積み」という盛土を行っている。前方部北東側面では、土塊積みから内濠側に黄色系・黒褐色系の盛土を積んでいる。また、第1段を形成後、両側面の第2段斜面では表面に斜面に沿って黄色・黒褐色の盛土を施している。T67・71から前方部側面のこの地点における第1段テラスの標高は22.5～22.6m程度と考えることができる。それに対し、T62・64・66から前方部前面の第1段テラスの標高は23.4～24.0mと想定できる。そのため、前方部第1段テラスはくびれ部方向から前方部前面に向かって上昇している。

前方部南西側面では、T59とT60の間を境に前方部前面側は弥生土器を含む包含層を盛土として使用している。T58・59の地山の斜面は傾斜角度が急なため削平を受けている可能性もあるが、T56の状況を考慮すると、古墳築造当時の第1段斜面を比較的反映している可能性がある。

前方部前面北東側の第1段テラス～第2段斜面は、神社の造成に伴う押し出し土で厚く覆われている。その造成時期は、出土遺物から18世紀後半を中心とした時期とみられる。

また、前方部側面の第2段斜面の傾斜角は、20°後半から30°前後と考えられる。

前方部の墳端・傾斜変換点の評価についてはかなり難しい。1) 墳端の標高が一定していないと考えられること、2) 葺石のない古墳において、どのような傾斜変換点をもって墳端と判断するかが問題になること等が課題として挙げられる。墳丘裾から中堤まで内濠を横断するトレンチを設け、内濠と墳丘の関係を探ることが必要となろう。このたび確認した傾斜変換点については上部に古い堆積層がなく、後世に改変(浚渫等)がなされた結果である可能性もあるが、固い地山を削り込んでまで浚渫するとは考えられず、ある程度古墳築造当時の墳端を反映している可能性があることを指摘しておきたい。

註

(1) 大阪府藤井寺市津堂城山古墳外堤や高槻市今城塚古墳の墳丘盛土に認められる「ウロコ(鱗)状盛土(層序)」「土囊・土塊積み」と呼ばれる技術と同種のものと考えられる。ただし、土囊を用いたとする証拠がないため、「土塊積み」と呼ぶ。

青木敬2003『古墳築造の研究－墳丘からみた古墳の地域性－』六一書房

富成哲也2000「古墳の墳丘盛土にみるウロコ状層序の覚え書き(Ⅰ)」『あまのともしび』原口先生古希記念集

第5節 中堤

(1) 概要

墳丘南西側と前方部前面の中堤内濠側については第3次調査においてその概要が判明し、平成18・19年度にその保存工事を実施したところである。そこで、未調査であった前方部北東側の中堤内濠側についてT69・70の2本のトレンチを設定して調査した。前方部北東側の内濠は北東造り出し付近から水の流入があり、上流から配された土砂がかなりの厚さで堆積している。また、中堤上には宅地のための石垣を積んだ護岸が設けられているが、その崩落が顕著となっている。

(2) T69 (図29・30、図版17-3)

前方部北東側の中堤内濠側の北部に設定した。トレンチの長さ2.8m、幅1.0mである。内濠堆積土は厚く湧水もあり、掘削は標高18.2mまでにとどまった。堆積土は内濠側に向かって傾斜している。調査範囲においては、遺構面に達することができなかった。

出土遺物として円筒埴輪片97がある。しかし、両宮山古墳には埴輪の樹立がないと考えられることから、南東に所在する森山あるいは正免東古墳から流入したものと考えられる。外面調整にはヨコハケがみられ、断面M字のタガをもつ。断面内側は須恵質を呈する。

(3) T70 (図31、図版17-4)

前方部北東側の中堤内濠側の南部に設定した。トレンチの長さ3.0m、幅1.0mである。T69と同様に、内濠堆積土は厚く湧水もあり、掘削は標高17.8mまでにとどまった。堆積土は内濠側に傾斜して堆積し、5層内に石材が認められたが、宅地の石垣が崩落したものである。したがって、調査範囲においては遺構面に達することができなかった。

(4) 小結

計2本のトレンチにより前方部北東の中堤内濠側について調査した。結論的には、内濠堆積土が厚く湧水があり遺構面を検出することができなかった。北東造り出し付近に池水の流入部があり、上流から配された土砂の堆積が厚いことが判明し、この堆積土下に中堤内濠側斜面が存在するものと考えられる。

中堤で須恵器杯身98を表面採集したが、小片のため時期は明確でない。また、前方部前面において、弥生土器の高杯99を表面採集した。古墳築造以前に展開した弥生時代の集落に伴うものである。

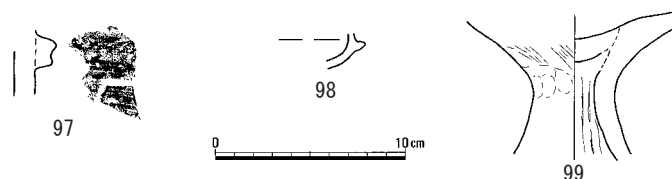


図29 T69出土遺物・表面採集遺物 (1/4)

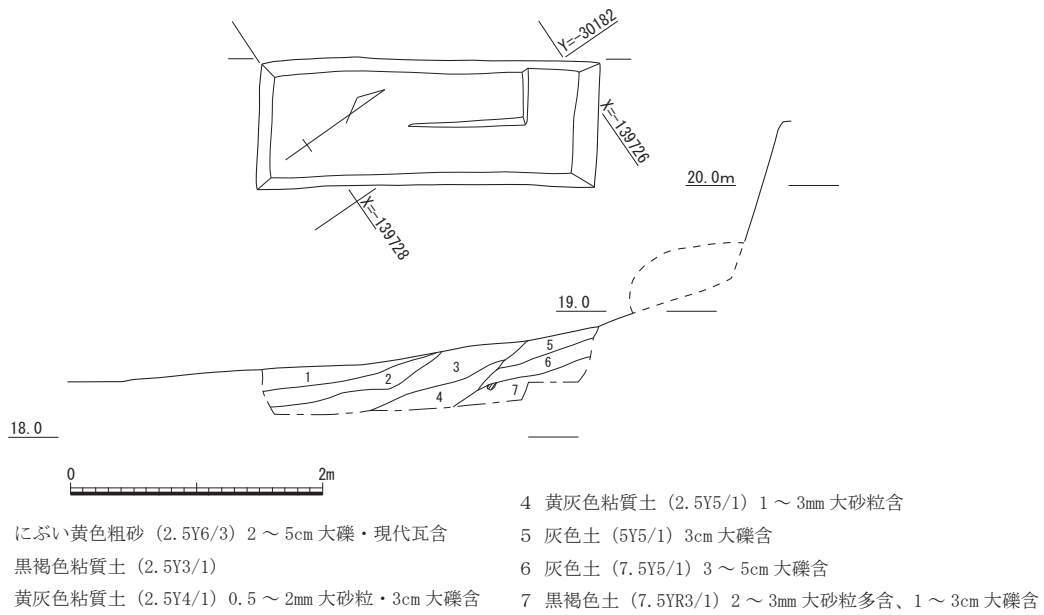


図30 T69 (1/60)

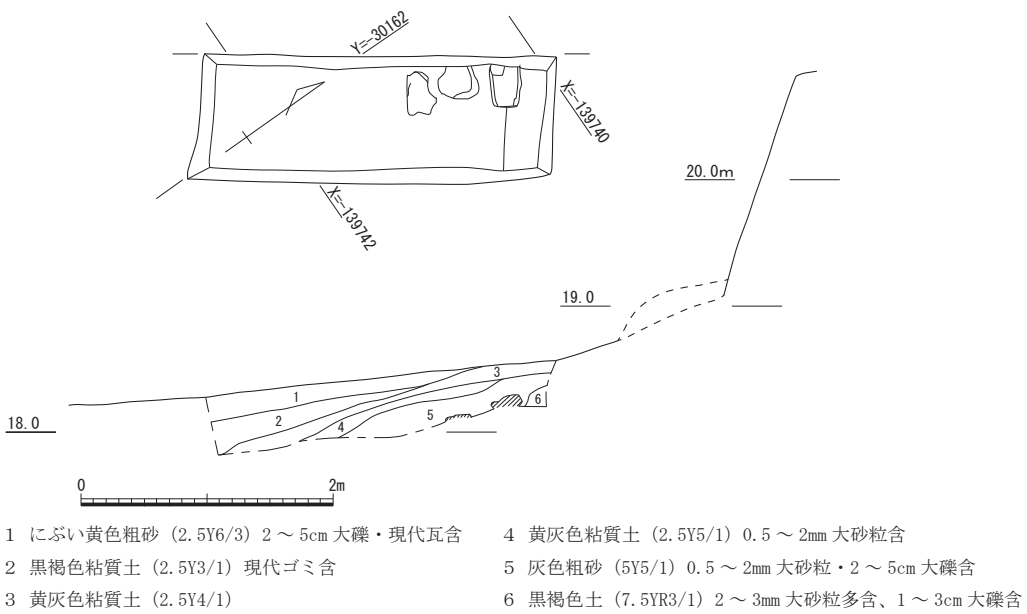


図31 T70 (1/60)

第4章 総括

第1節 墳丘の構造と構築方法

(1) 墳丘の規模と構造

このたびの第4～6次調査において、墳丘の構造についていくつかの知見が得られたので、ここで整理しておきたい。ただし、部分的なトレンチ調査のため、今後の発掘調査によりこの見解が修正される可能性があることを断っておく。

墳端と墳丘規模

はじめに、墳丘基底部の状況についてである。第3章第4節小結においても触れたとおり、第1段斜面の基底部にあたる墳端は、葺石が施されていない本墳においては、斜面の傾斜変換点から推定することになる。しかし、本墳の内濠は平生溜め池として利用されており、上流からの水の流入を完全に遮断して調査することが困難であった。そのことで、限られたトレンチ調査では湧水と壁面崩落の危険性があり、明らかな傾斜変換点、すなわち墳端についての判断は慎重にならざるを得なかった。

墳丘西側、後円部西側から前方部南西側面（T53～61）は、トレンチ内で明瞭な傾斜変換点は確認できなかった。くびれ部T56においては、中世の堆積層の下に有機質を含んだ黒褐色粘質土の堆積があり、比較的古い段階の内濠堆積土と推定した。そして、この層に覆われた地山の斜面についても古墳築造時の第1段斜面を反映しているのではないかと思われる。このことから、第1段斜面の傾斜角は20°後半～30°前半と考えられる一方で、墳端を推定する傾斜変換点を把握することはできなかった。中でも、前方部南西側面T58では標高16.3mまで掘り下げたにもかかわらず、明瞭な傾斜変換点は確認されなかった。そこで、現状では二つの可能性が考えられる。1) 傾斜変換点、本来の墳端がさらに深く内濠中央側に向かって存在する、2) 後世の削平により失われてしまっている。現段階では二つの可能性のどちらか一方に決めるには情報が不足していると思われる。将来、墳丘・内濠・中堤までを横断するトレンチによって、その判断が可能になることを期待したい。

前方部前面（T62～66）においては、傾斜変換点を確認することができた。しかし、1) その標高が一定しないこと、2) その上の堆積層がそれほど古く想定できないことが傾斜変換点、すなわち墳端である判断を困難とさせた。1) については、T62で標高16.8m、T64で標高17.5m、T65で標高17.3m、T66で標高17.4mを測り、西から前方部前面中央に向かって高くなる。この傾向は、前方部南西側面の傾斜変換点を確認できておらず、より深く想定されることを考えれば肯首できる結果と考えられる。2) の傾斜変換点上の堆積層は、T66に見られたように近世の瓦を含み、それほど古く想定できない。くびれ部T56の地山斜面上に堆積する黒褐色粘質土の内濠堆積土と比較すると、その違いは明瞭である。これについては、前述したように、墳丘西側での可能性と同様の理由が考えられる。この傾斜変換点は近世の改変によるもので、本来の墳端は失われているか、さらに内濠中央側に墳端が存在する可能性がある。しかし、近世の改変は溜め池維持のための浚渫の可能性が高いことを考慮

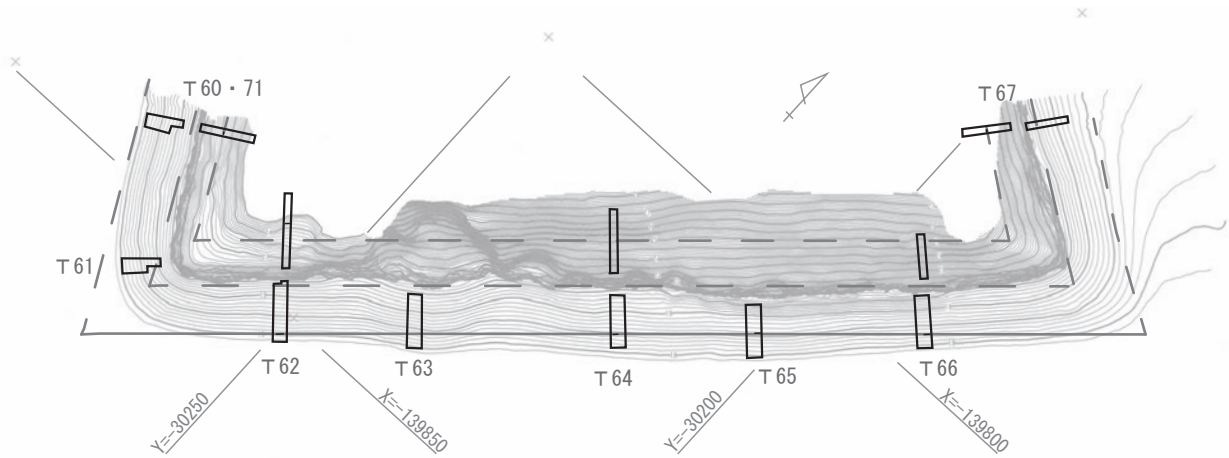


図32 前方部前面の傾斜変換点 (1/1,000)

すれば、固い地山を掘り込んでまで浚渫しないと仮定すると、本来の墳端を反映している可能性が大いにあろう。そこで、前方部前端の傾斜変換点を結んでみると、おおよその直線を描き出すことができた。現汀線からは約5～7m内濠側に位置する。

前方部北東側面 (T67・68) は、トレンチ内で傾斜変換点を確認することができず、やはり内濠中央側に墳端があると考えられる。

さて、墳丘規模についてであるが、前方部前面の墳端と推定されるラインと後円部の北西端の主軸線上の距離となる。後円部の北西端の位置を発掘調査で確認していない段階では、先の墳丘測量およびピンポール探査による墳丘長206mという数値以上を現在提示することはできないが、前方部前面の推定される墳端が現在の満水時の汀線 (満水時水面上の墳丘長194m) より、内濠側に5～7m程大きくなることは確かである。

墳丘第1段斜面と第1段テラス

次に、墳丘第1段斜面の状況である。墳丘西側については後円部から前方部南西側面の途中 (T59と60の間を境) で、地山削り出しから地山の上に盛土を施して築かれるようになると推定する。そして、前方部前面も地山の上に盛土することで第1段を造っている。

第1段斜面が比較的良好に残存していると考えられるのが、くびれ部である。13～14世紀前半と考えられる土師器等の堆積層下に黒褐色粘質土があり、その下の地山の斜面は20°後半～30°前半と推定される。この傾斜は、造山古墳で推定される24.4°より若干急傾斜となる⁽¹⁾。残存墳丘面上の堆積層から、後円部および前方部前面の第1段斜面は流失が大きいと考えられる。

後円部の第1段テラスの標高を推し量る情報はT73の墳丘残存面だけで、その残存面22.35～23.4mという標高が近世の削平によるものか、古墳築造時のテラス面を利用したものかを判断することは困難である。前方部南西側面のT71、前方部北東側面のT67の第1段テラスの標高は22.5～22.6mを提示することができる。また、前方部前面における第1段テラスの標高も23.4～24.0mと推定可能である。つまり、前方部前面に向かって第1段テラスは上昇している。前方部前面の傾斜変換点 (標高17.5m

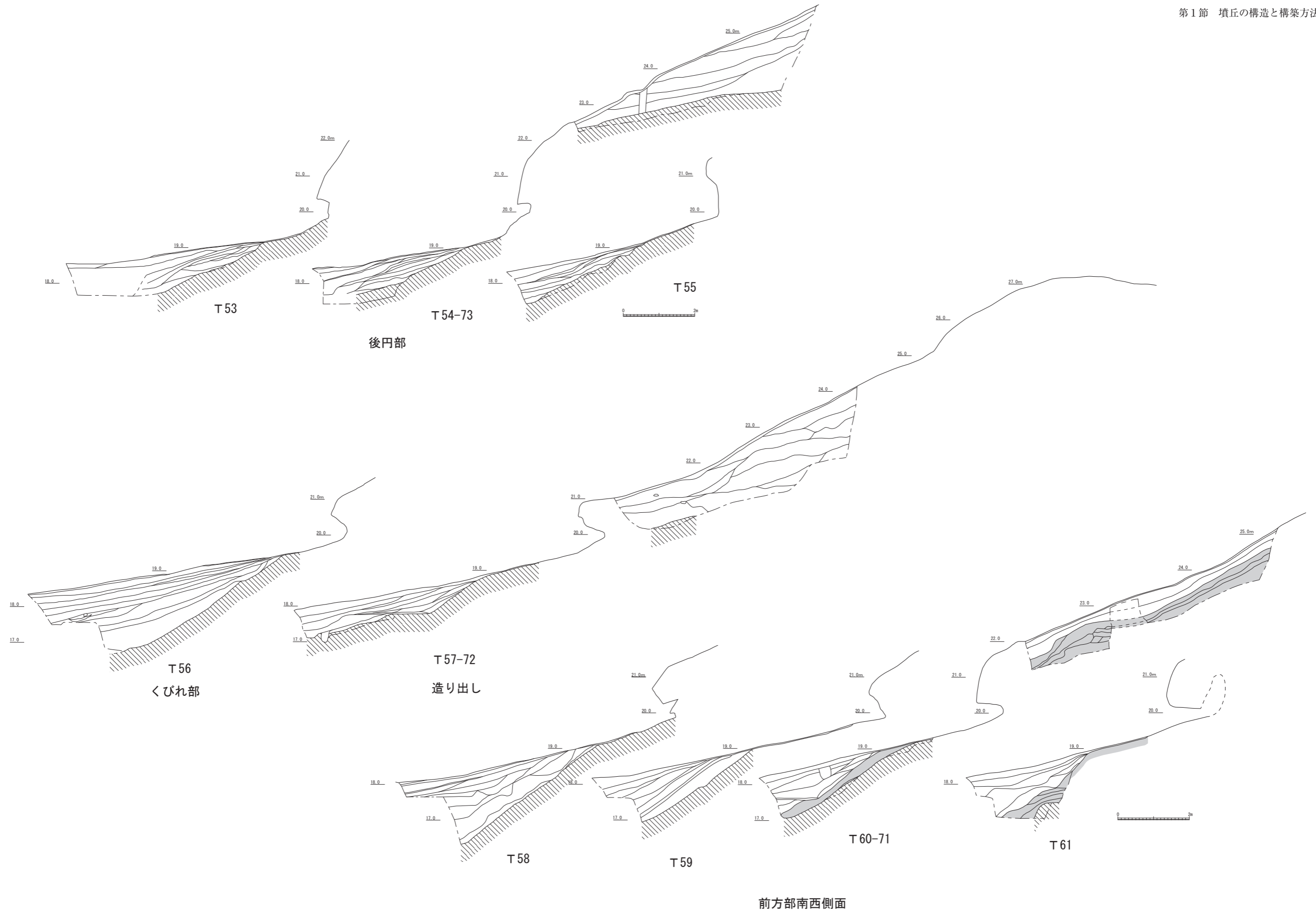


図33 断面図 (1/100)

表3 斜面角度と第1段テラス標高

調査区		傾斜角 (°)		標高 (m)		備考
		第1段斜面	第2段斜面	第1段テラス		
後円部	T53	25.7				
	T54	23.2				
	T55	27.1				
くびれ部	T56	31.1				
造り出し	T57・72	35.5				
前方部	T58	35.9				側面
	T59	33.3				
	T60・71	37.9	27.8	22.6		
	T62		30.6	23.5~24.0		前面
	T64			23.4		
	T66			23.5		
	T67		28.2	22.5		側面

程度)からの第1段の高さは、5.9m~6.5mと見積もることができる。

墳丘第2段斜面

第2段斜面を検出した前方部南西側面T71、前方部北東側面T67、前方部前面南西角T62の状況から、前方部第2段は盛土によって構築されている。第2段斜面の傾斜角は27.8~30.6°で20°後半から30°前後と考えられる。

造り出し

本墳は両くびれ部の前方部側に造り出しをもつ。南西造り出しの調査を行ったが、見かけ上高く2段に見える構造は、標高21.4m以上は近世以降の造成によるもので、本来の造り出しは第1段テラスあるいは第1段斜面に取り付くものと推定される。しかしながら、このたびの調査では平面形にかかる情報は全く得られていない。

外表施設

これまで本墳には埴輪・葺石の外表施設が認められないとされてきた。このたびの調査においても、本墳に伴う埴輪・葺石は出土せず、これらの欠落は確定的となった。この時期のこれほどの大規模古墳に埴輪・葺石が伴わないことは特殊なことである。二重周濠や陪塚まで備えて、最終段階の外表施設を施工しないことは古墳として未完であることを物語るのであろうか。

本墳の南東に近接して築かれた森山古墳は、両宮山古墳に後続する帆立貝形古墳であるが、長さ20~30cmの角礫が石垣状に葺かれていた⁽²⁾。森山古墳の北側で発見された正免東古墳でも葺石が見つかっている。両宮山古墳に続く森山古墳、正免東古墳で施された葺石が認められないことは、本来的に意図されたことでなく、古墳の築造が最終段階まで行われなかったことを示していると考えられる。埴輪の樹立についても同様である。

将来において埋葬施設や詳細な墳丘の調査が望まれる。

(2) 墳丘の構築法

前項で述べたとおり、墳丘西側については後円部から前方部南西側面の途中(T59と60の間を境)で、墳丘第1段斜面は地山削り出しから地山の上に盛土を施して築かれるようになると推定する。そして、

前方部前面も地山の上に盛土することで第1段を造り、第2段も盛土によって構築していると考えられる。ここでは、盛土の方法についてまとめてみたい。

前方部第1段の盛土

前方部前面南西角T62、前方部北東側面北東角T67の第1段、標高18.7～19.5mには、うろこ状あるいは凸レンズ状の「土塊積み」が認められた。トレンチ幅が狭く分層は困難であったが、凸レンズ状になった1単位は、下部が黒褐色系で上部になるにつれて灰白色系を呈しており、他の古墳で報告されている「土塊積み」の事例と同じものであった。「土塊積み」は4世紀末の大阪府藤井寺市津堂城山古墳の外堤を初現に、古市・百舌鳥古墳群で継続的に用いられ、6世紀前半の今城塚古墳にも認められる。

岡山県内では津山市橋本塚1号墳（円墳：直径30.2m）の最下部で検出されている⁽³⁾。2段築成の墳丘高さ4.0mのうち、下段の高さ0.8m、テラス幅3.0m、上段の高さ3.2mを測る。テラスより下は地山整形で盛土は上段のみで、盛土最下層に径40×30cm、厚さ10cm程のブロックによる「土塊積み」が見られる。厚さ15cm程の旧表土と地山部分をブロック状に積んで隙間を充填したもので、詳細に見るとこのブロックは旧表土面が下になり、地山面が上となっているので、削りとった土を反転させて置いたようであると推測されている。地山の傾斜に合わせ多い所で2～3段積んでいるのが観察され、上面の高さを揃えて施されている。報告書でも述べられているとおり、大阪府堺市百舌鳥大塚山古墳や高槻市前塚古墳の調査においても、墳丘盛土最下部で土塊状の盛土が報告されている⁽⁴⁾。樋口吉文氏はこの作業を表土積換工法と呼んでいる。さらに、高島徹氏は長さ30cm内外、厚さ10cm内外の土塊が墳丘封土中や基底部に積み上げている例が増えたことから、土塊の機能・特性の整理を試みている⁽⁵⁾。土塊は基盤整備段階と墳丘盛土の積み上げ段階の工程で使用されており、用途から盛土材料そのものとしての使用と、盛土工事の効率化を図る補助材としての利用の二つに大別している。両宮山古墳の場合、墳丘盛土の大規模な断ち割りを行っておらず、特に第2段以上の墳丘内部の状況は不明であるが、土塊積みがT62や67の墳丘第1段下位で見られることから、基盤整備に近い段階の盛土材料として土塊が積まれたと考えられる。また、橋本塚1号墳や百舌鳥大塚古墳の例と同様に、土塊の下部が黒褐色系で上部になるにつれて灰白色系を呈しており、古墳築造時の旧表土層を剥ぎ取って積み直したものと想定したい。本墳においても、畿内の前方後円墳で採用された墳丘構築法をとっていることが判明した。

また、前方部北東側面のT67・68において、黄色系と黒褐色系の土による盛土の状況が確認された。

前方部第2段の盛土

前方部第2段の構築状況について比較的よく判明しているのは、前方部両側面のT67とT71である。しかし、墳丘構築土の断ち割りの深さが限られているため、詳細は将来の調査にゆだねたい。

北東側面のT67では、20層に墳丘第1段の平坦面が認められ、それ以上を墳丘第2段として盛っている。第2段から第1段テラスまで一連の15・17層があり、段築による明確な盛土の境はないようである。その傾向は南西側面のT71でも認められ、第2段から第1段テラスまで一連に認められる16層がある。

T67・71の墳丘第2段斜面表面では、共通した黄色土（T67-12層、T71-16層）と黒褐色土（T67-15層、T71-17層）が盛られていた。それらは精良な土であり、化粧土と考えてもよいかもしれない。前方部前面のトレンチでは見られなかったが、少なくとも前方部側面では施されていたと考え

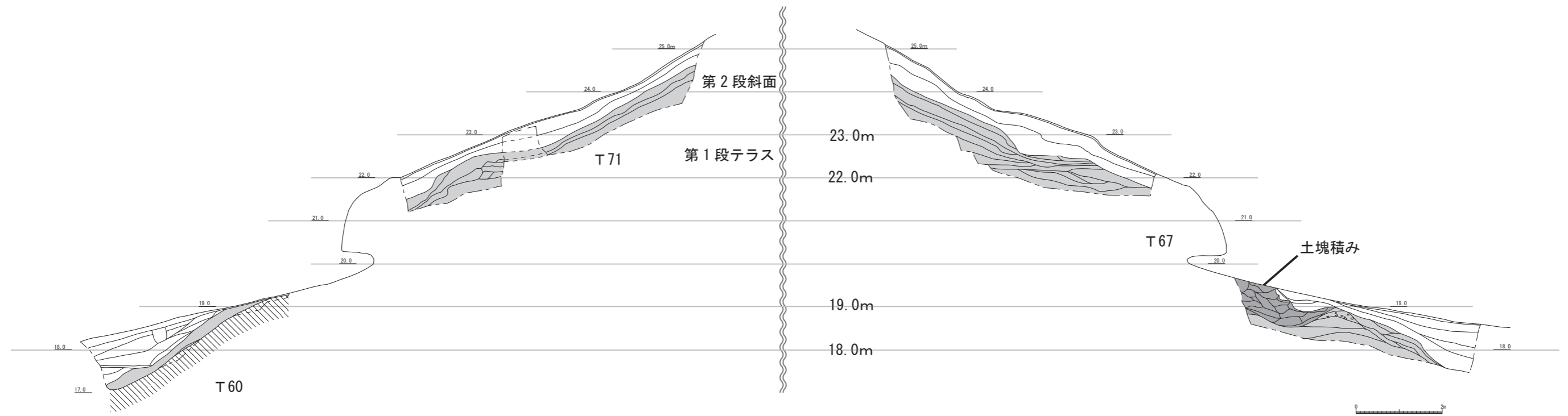


図34 前方部両側面 断面図 (1/100)

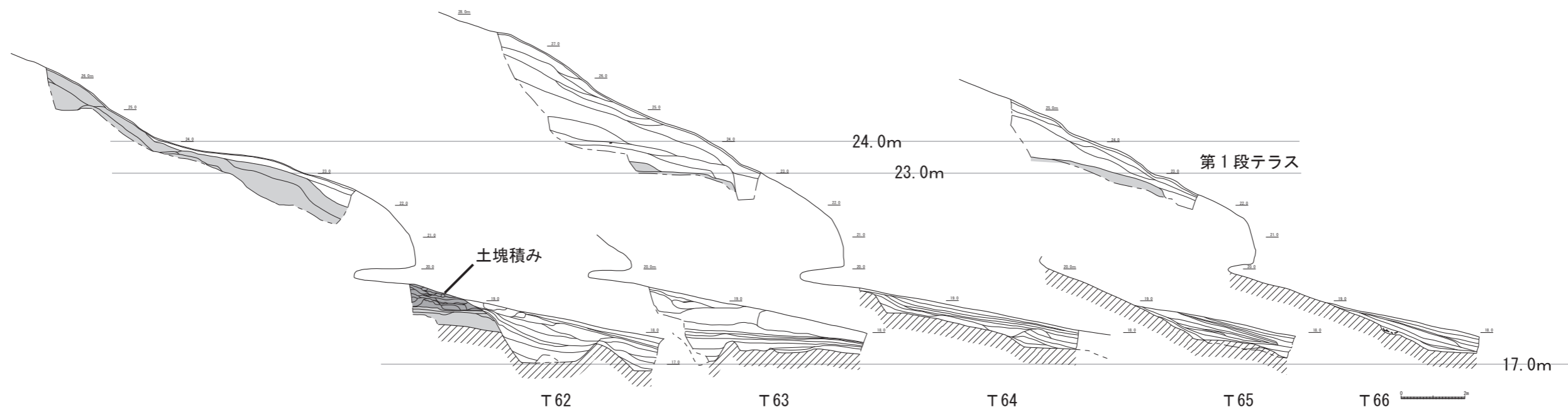


図35 前方部前面 断面図 (1/150)

られる。

(3) 墳丘の利用・改変時期(図版19-2・3)

本墳では古墳築造時に伴う遺物は皆無であったが、築造後の遺物が認められ、それらから墳丘の利用・改変時期について考えてみたい。調査で判明した墳丘の利用・改変時期は2時期であり、①13～14世紀前半以降、②18世紀後半以降である。

①13～14世紀前半以降

13～14世紀前半と考えられる土師器や吉備系土師質土器碗の出土がくびれ部T56、造り出しT57・72で認められた。南西造り出しでは、墳丘が13～14世紀前半以降に削られたと考えられる。くびれ部のT56では墳丘の削平はなく、内濠堆積土にこの時期の土器が含まれていたため、くびれ部上でその時期の営みがなされていた可能性がある。この利用・改変がどういった目的でなされたかは不明であるが、山城の明確な遺構が認められないことから、中世山城としての利用と判断するには熟慮が必要である。

②18世紀後半以降

18世紀後半を中心とする時期の陶磁器類が墳丘の多くで出土した。これらの陶磁器類は、後円部では墳丘第3段から第2段への押し出し土、高く見える南西造り出しの造成土、前方部前面の神社造成の際に第2段斜面に押し出された土に含まれる。したがって、18世紀後半以降に神社造成をはじめ、墳丘の改変が一気に行われたようである。

前方部に鎮座する神社の石鳥居は天保7年(1836)、石灯籠は慶応3年(1867)に造られたものであるが、境内がそれ以前の18世紀後半以降に造成され、造成によって削られた土が第2段に押し出されたと考えられる。南西造り出しは現在高く第3段下端に取り付く平坦面が認められるが、この平坦面は18世紀後半以降に盛り上げられたものである。後円部南西の第3段斜面に平坦面が認められるが、この平坦面を削出して、第2段に土を押し出している。これらの平坦面の造成目的は定かでないが、後世に果樹等の耕作地となっていることから、耕作に伴うものと考えておきたい。

さらに、前方部前面のT66では墳丘残存面上の堆積土から近世の瓦片が見つかり、前方部墳端近くも近世に何らかの改変が行われたと考えられる。それは池の浚渫と関係するのではないかと考えている。内濠を挟んで対岸の中堤においても、江戸時代に古墳築造当初の中堤をかさ上げし、溜め池水量を増やしており、それに関わる可能性がある。

本墳の江戸時代の状況については、地元和田区に残る絵図等をもとに見ていきたい⁽⁶⁾。二つの資料があり、一つは文政元年(1818)の和田村山絵図である。現物は所在不明であるが、全体を撮影した写真が残る。それによれば、現在と同じで後円部北側の内濠は既に埋没している。内濠(溜め池)の取水もまた現在と同じ、後円部西側と北東造り出し付近の2か所である。墳丘の北東側には家並みが描かれている。もう一つは、天保5年(1834)の和田村分検見取であり、文政元年の山絵図と同様に内濠や家並みが描かれる。墳丘前方部には、「龍口宮」という表記の神社があり、これが伊勢(両宮)神社である。さらに、和田茶臼山古墳は、現在の形状とほぼ変化なく、既に前方部は削平されているようである。これらの絵図等から、19世紀の前半の段階で現在とほぼ同様の景観を呈していたことが窺える。したがって、19世紀前半以前に、墳丘を含めた本墳の改変が行われたのであろうとみてよい。

註

- (1) 造山古墳の斜面の傾斜は勾配1:2.2と推定されている(新納2011)。
新納泉2011「前方後円墳の設計原理試論」『考古学研究』58-1 考古学研究会
- (2) 宇垣匡雅2004『森山古墳・両宮山古墳』山陽町文化財調査報告第2集 山陽町教育委員会
- (3) 小郷利幸ほか2003『橋本塚古墳群』津山市埋蔵文化財調査報告73 津山市教育委員会
- (4) 樋口吉文1997「古墳築造考」『堅田直先生古希記念論文集』真陽社
- (5) 高島徹2014「土塊考」『大阪府立狭山池博物館研究報告』8大阪府立狭山池博物館
- (6) 地元の小坂素庸氏が保管しているもので、実見させていただいた。

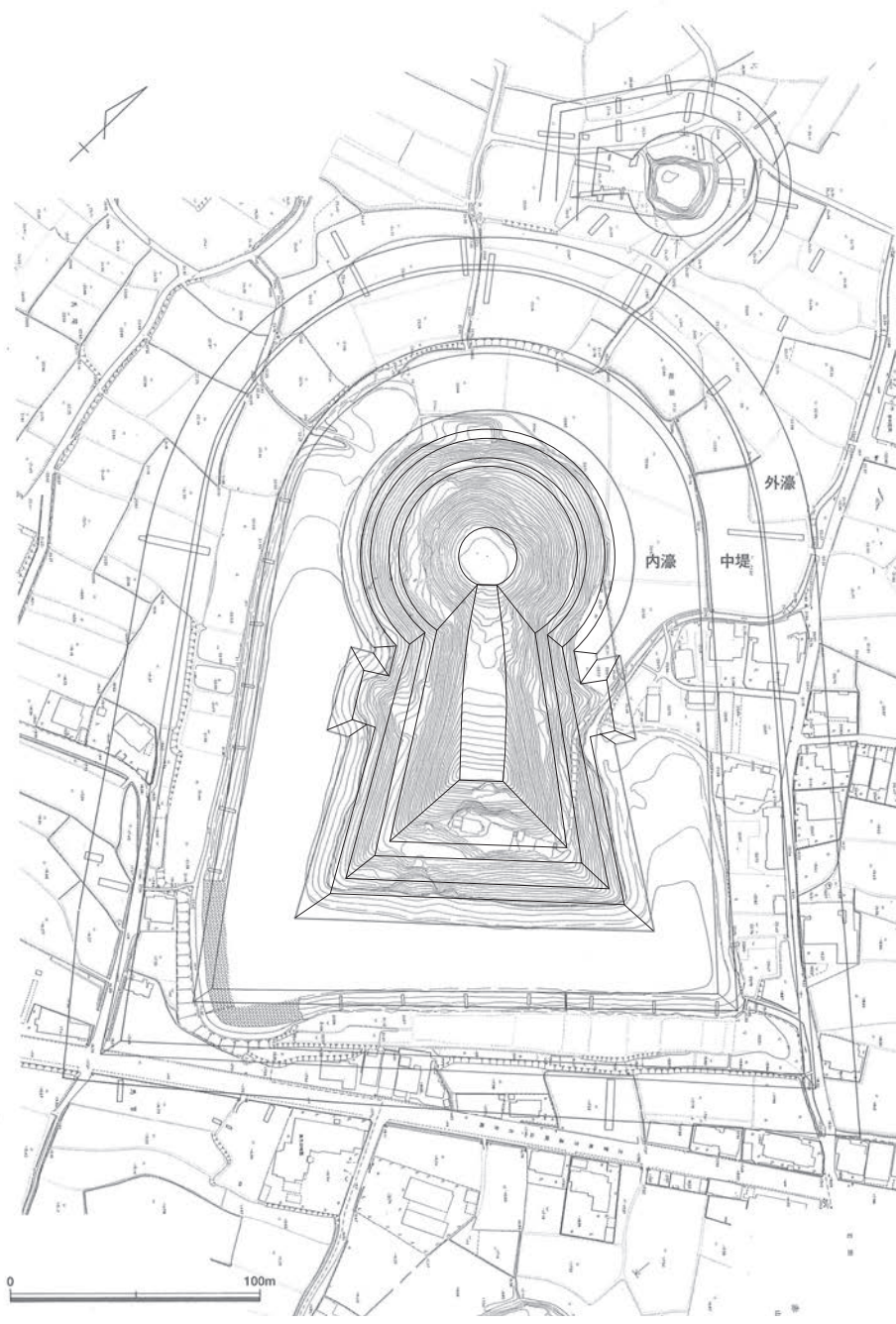


図36 墳丘の復元 (1/3,000)

第2節 墳丘の築造企画

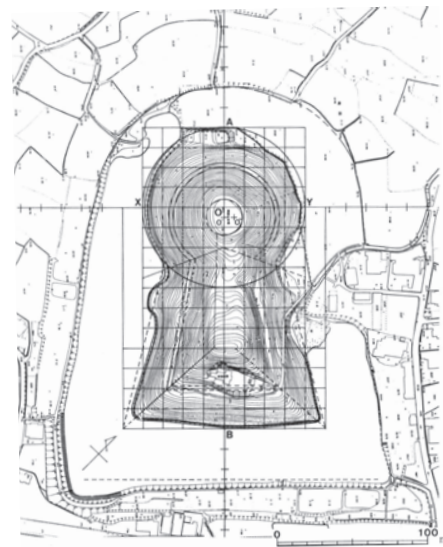
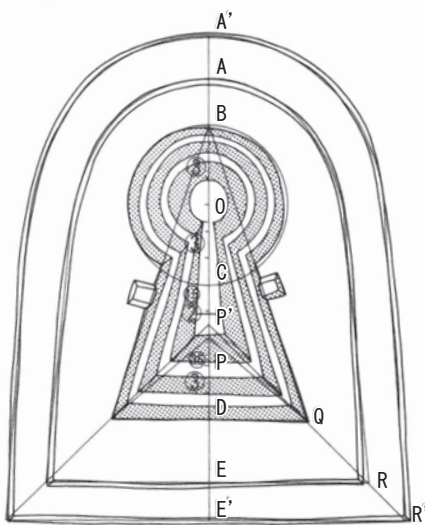
今日まで両宮山古墳の墳丘復元は既存の墳丘測量図の分析や現地踏査をもとに行われてきたが、第4～6次発掘調査により墳端に関する考古学的な知見を得ることができた。その内容は前節までに報告されているとおりであるが、墳丘の復元に関していえば、これまでに赤磐市教育委員会が提示してきた復元図（宇垣2005）をほぼ追認するかたちとなっている。

ところで、このたびの発掘調査は平成29年度からはじまる墳丘裾保存整備工事に先立ち、そのための基礎資料を得る目的で実施されたものなので、保存整備後の墳丘調査は今のところ予定されていない。したがって、本書の刊行をもって両宮山古墳の調査は一つの区切りを迎えたといえる。そこで、本稿では、これまでの調査成果をもとに備前国最大の規模を誇る両宮山古墳の墳形の特徴について、築造企画の観点から言及してみたい。

（1）両宮山古墳の築造企画に関する研究史

前方後円墳を築造する際に存在したであろう設計図（具体的にどのようなものであったのかは不明であるが、ここでは築造企画と呼ぶ）については、前方後円墳企画（規格）論等と称して、これまで様々な手法でその設計案が提唱されてきた⁽¹⁾。その多くは近畿地方の前方後円墳を中心とするものであるが、次に掲げる研究には両宮山古墳の分析も含まれているので紹介する。

前方後円墳の築造企画に関する先駆的な研究として上田宏範の分析がある。上田は前方後円墳の形態の特徴を最も端的に表徴する計測点の設定を重視し、前方後円墳をいくつかの型式に分類した（上田1963）。すなわち、後円部の直径（BC）を6とし、前方部隅角部の稜線が中軸と交わる位置に「P」点⁽²⁾を設定し、BC：C「P」：「P」Dの比率で古墳の分類を行う手法である。氏はこの方法を両宮山古墳にも応用しているが、それによると両宮山古墳は墳丘長11単位で、BC：CP'：P'Dの比率が6：1.5：3.5となるD型式変形型に分類される（上田1984：図37-1）。上田の分類では、「P」Dが3を越すもの



1 上田宏範による築造企画（上田1984） 2 石部正志らによる築造企画（石部ほか1991）

図37 両宮山古墳の築造企画

は一括してE群に含まれることになるが、両宮山古墳のように11単位の古墳はBC：CP'：P'Dの比が6：2：3となる事例が多いので、両宮山古墳についてはD型式の要素を備えながらもE型式の特徴をもった過渡的な型式と評価している。そして、上田は両宮山古墳を含む一連の古墳群を大阪府河内大塚山古墳や土師ニサンザイ古墳を最大型式とするD型式に位置づけ、両宮山古墳を含む墳長約200m級の古墳をそれらに次ぐ地位の古墳群と評価した。しかし、後述するように上田が使用した図は、春成1982で使用された古い墳丘復元図によっているため、その分析内容については再検証が必要である。

一方、石部正志らをはじめとする研究グループは、後円部の直径を8等分した単位を1区とし、これを基準に測量図に方眼を重ねあわせて築造企画を読み取ろうとする（石部ほか1979）。そして、前方部の長さを区に換算し古墳企画の類似性を読み解こうとする。石部らの研究では、両宮山古墳は7区型に分類され（図37-2）、墳丘段築の比高差が高いことから後期への移行期の様相を示すとし、大阪府軽里大塚古墳（軽里前之山古墳）と企画において共通性が高いとする（石部ほか1991）。しかし、この時に使用された原図は、1986年刊行の岡山県史（岡山県1986）に掲載されたもので、現時点では最新のものではない。

同様に、後円部の直径を等分した値を基準とした論考として、近年では沼澤豊の研究（沼澤2005）がある。沼澤は古墳の主丘部直径の24分の1の長さを基準単位としているが、それによると両宮山古墳の墳長は45単位に復元できるという。しかし、墳丘の詳細な築造企画についてはふれていない。

その他、二つの前方後円墳の測量図を主軸にそって半截して対比し墳丘構造の類似性を比較する手法で相似墳の抽出を行った研究として岸本直文の成果がある（岸本1992）。岸本はこうして設定した設計規格を標識となる古墳の名を冠して「○○型」と呼んでいるが、両宮山古墳は大仙型に該当するとしている。後に両宮山古墳の再測量を行った宇垣匡雅は、両宮山古墳が大仙古墳の5分の2の規模であることを再確認し、築造企画のうち平面形は畿内中枢から伝達された可能性を考えている（宇垣2004）。

（2）両宮山古墳の築造企画の再検討

次に、第6次調査までの発掘調査成果を踏まえ、両宮山古墳の築造企画について再検討してみたい。現時点における両宮山古墳の最新の計測値は表4のとおりで、主な計測値は主軸線総長349m、墳丘全長206m、後円部径116m、前方部幅145m等である。

従来の築造企画の研究では基準単位を後円部の直径を等分した値に設定している場合が多いが、その等分する値については6、8、24等諸説ある。しかしながら、3の倍数あるいは4の倍数である値が多いので、これらの数値の最小公倍数である24を取り上げ、両宮山古墳後円部を24等分した値を一目盛とした方眼を作成し、測量図と復元図に重ねてみた（図38-1）。そして、古墳の各部位の目盛数を示したものが表4の区画数aである。この区画数aをもとに、これまでの研究史で紹介した両宮山古墳の築造企画の再検証を行ってみたい。

表4 両宮山古墳の計測値と区画数

	計測値 (m)	区画数 a (図38-1より)	区画数 b(a/6) (図38-2より)
主軸線総長	349	71	約12
墳丘全長 (BD)	206	42	7
後円部径 (BC)	116	24	4
前方部長 (CD)	90	18	3
前方部幅 (QQ')	145	30	5
後円内濠幅 (AB)	約25	約5	約0.8
前方内濠幅 (DE)	約30	約6	約1
後円中堤幅 (AA')	約36	約7	約1.2
前方中堤幅 (EE')	約32	約6	約1

まず、上田の手法でみるとBC24単位、CP'5単位、CP6単位、P'D13単位、PD12単位となるので、後円部を6単位に換算するとBC：CP'：P'Dは6：1.25：3.25となる。先述した上田の分析比率は6：1.5：3.5であったので、若干比率が異なる。そのため、両宮山古墳における氏の分類や評価については再検証が必要である。

う。ところで、両宮山古墳の築造企画の作図としては $BC : CP' : P'D$ ではなく、 $BC : CP : PD$ の $24 : 6 : 12$ 、すなわち $6 : 1.5 : 3$ と考えたほうが数字の切りがよく整合性のとれた比率を得ることができる。つまり、両宮山古墳の築造企画においては、いわゆる「P」点を前方部稜線の延長と中軸の交点である P' 点に設定するよりも、前方部前面斜面上の先端の P 点に設定したほうが理解しやすいといえる。このいわゆる「P」点の設定について、新納泉は大阪府誉田御廟山古墳の分析において、この古墳の「P」点（前方部中央基準点）の位置が、後円部の径にもとづき決定されていた従来の方式を放棄し、墳丘の全長と前方部の高さを先に決めることによって決定されたのではないかと推定している。そして、その理由のひとつとして前方部の相対的な高さを高める必要があったと述べている（新納2011）。両宮山古墳は後円部より前方部のほうが高く設計されており、両宮山古墳の築造においては、このようないわゆる「P」点の設定をめぐる規範の変化が反映された可能性がある。

次に、石部らの方法であるが、石部らは後円部を8等分した値を一区画としているので、後円部径を8区画とすると前方部の長さは6区画となり、これまで7区型としていた両宮山古墳の分類には修整が必要となろう。石部らは内濠の幅についても同様の区画で示しており、後円部側の内濠幅を2区画、前方部側を幅2.5区画、中堤を2区画で想定している。この当時、中堤や内濠の確認調査（第1～3次調査）は実施されておらず、これらの区画は当時の地形図をもとに読み取った値であるが、墳丘と周濠の設計が一体となって実施されたとした点は評価できる。

このように、両宮山古墳の築造企画は、現在入手できる最新の墳丘復元図をもとに分析すると、これまで提示された研究成果の修整が必要であることが分かる。そして、このことによって古墳の評価自体も変わってくる可能性がある。

（3）両宮山古墳の築造企画

前項までに検討したとおり、両宮山古墳の築造について、そのもとになる何らかの築造企画があったことに疑いはない。ここでは、これまでの研究史をふまえ、両宮山古墳の築造企画における基本原理について確認してみたい。

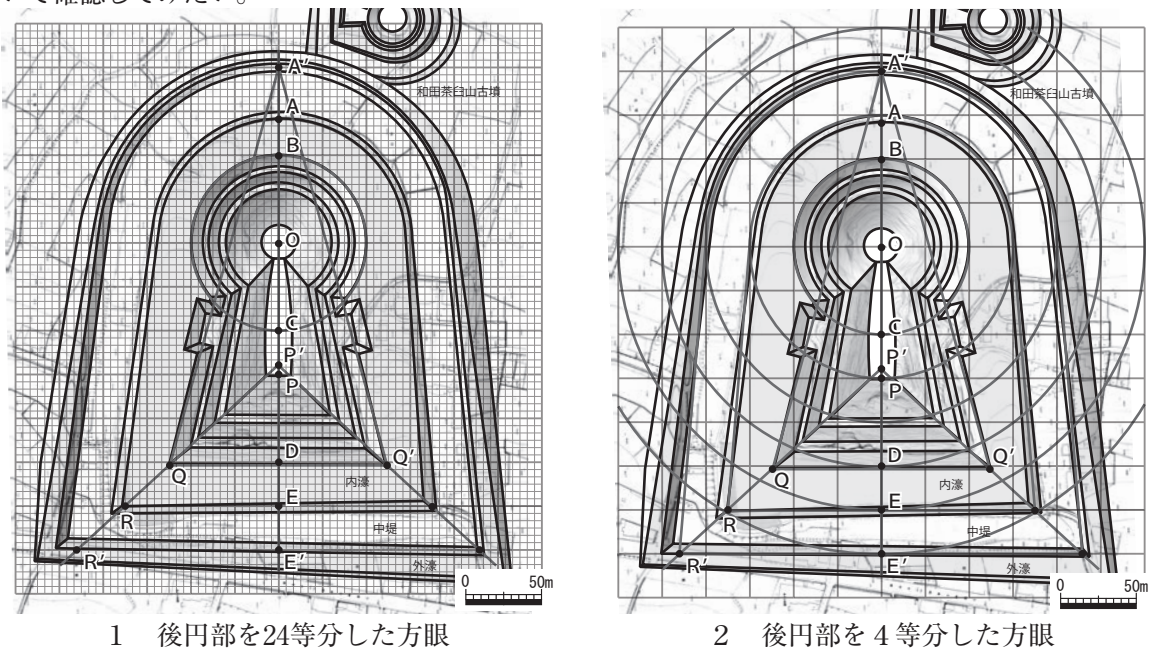


図38 両宮山古墳の築造企画（1/5,000）

前項でも検討したが、両宮山古墳の後円部を24等分して得られた単位をもとに墳丘各部の寸法を示したのが表4の区画数aであるが、それをみると意外に6の倍数あるいはそれに近い数値が多いことに気づく。つまり、区画数aを6で除すと、古墳の平面形を理解するにあたり、比較的整合のとれた最小の整数比を得ることができるのである。その場合、後円部径の区画数aが24であるのでそれを6で除した値、つまり後円部を4等分した値を基準に整理すると両宮山古墳の平面形態が理解しやすくなるという仮説にたどりつく。

そこで、ここでは両宮山古墳の後円部を4等分した値を基本単位として、両宮山古墳の設計手順を次のとおり提起してみたい（第38図-2）。

ア 後円部の設定：まず、後円部としてOを中心に直径4単位の円を描く。

イ 後円部側の内濠・中堤の設定：Oを中心に後円部側の内濠、中堤をそれぞれ1単位の幅で円を描く。

ウ 前方部の設定：前方部（CD）は3単位で、Oから3単位の中軸上にP点を設定する。前方部前面の幅（QQ'）は5単位、中軸上にP'点を設定し前方部稜線を規定する。なお、前方部側面は前方部隅部Q点から中軸が中堤肩と交わるA（あるいはA'）点を結んだ線で設定された可能性が考えられる。

エ 造り出しの設定：くびれ部の前方部側に造り出しを設置する。今回の調査で造り出しの段築は1段と判明した。

オ 前方部側の内濠・中堤の設定：前方部側の内濠および中堤の幅も1単位の可能性が高い。前方部側の内濠外側の隅部はP'点とQ点の延長上のR点付近に設定された可能性がある。そして、R点あるいはR'点からそれぞれ上記イで設定した円に接線を伸ばしてつなぐと内濠、中堤のラインが規定できる。

カ 外濠の設定：最後に中堤の外縁に外濠を設定する。ただし、外濠については、周辺の地形にも左右され、正確な設計寸法はよく分からない。

このように、両宮山古墳は平面形だけでいえば、後円部を4等分した値を基準に考えると理解しやすい。そして、古墳の築造にあたっては、当初から周濠や中堤も同じ築造企画に組み入れられていたことが分かる。

両宮山古墳は二重周濠を具備するなど畿内地域の古墳の特徴がみられ、畿内勢力との強い結びつきを背景に築造された古墳と評価されている。したがって、古墳築造に関する多くの情報が畿内からもたらされたと考えることができるであろう。残念ながら本節では両宮山古墳の築造企画の背景まで検討できなかったが、それについては今後の検討課題としたい。

最後に、今回の築造企画の分析は主に平面形のみであり、段築やテラス等を含めた三次元的な分析はできていない。今回の発掘調査で墳丘第1段目および第1段テラス付近までは復元するだけのデータを得ることができたが、それ以上の2段目や3段目については新たな情報は得ていない。前方後円墳の築造については、1段目と2段目の標高差が基本単位となっているとする研究（新納2011）もあり、立面形態をふまえて築造企画を論じるべきところではある。しかし、両宮山古墳については、そこまで踏み込んで議論するにはまだ情報不足であることを最後に指摘しておきたい。

註

- (1) 前方後円墳の企画（規格）論については、これまで様々な研究者が論究しているが、主な研究動向については北條芳隆がまとめている（北條2011）。
- (2) 「P」点について、上田宏範は「前方部隅角Qと周濠隅角Rとを結び、中軸線の方に延長して交わる点」とし、「この場合、PQ・PQ'は前方部隅角部の稜線と一致する例が殆どである。」と述べている（上田1963）。しかし、両宮山古墳の場合、図37-1（上田1984：第8図-1）のように、「P」点についてはPとP'の2点が設定されており、他の古墳の事例と比較する

場合には注意が必要である。本稿では両宮山古墳の計測点の設置位置については上田1984にしたがうものの、他の古墳の事例や築造企画に関する一般的な「P」点について述べる場合、混乱を避けるため括弧をつけて「P」点と表記する。

参考文献

- 石部正志・田中英夫・堀田啓一・宮川徭1979「畿内大形前方後円墳の築造企画について」『古代学研究』89 古代学研究会1～22頁
 石部正志・田中英夫・堀田啓一・宮川徭1991「造山・作山および両宮山古墳の築造企画の検討」『考古学研究』38-3 考古学研究会 40～64頁
 上田宏範1963「前方後円墳における築造企画の展開」『近畿古文化論攷』奈良県橿原考古学研究所 111～136頁
 上田宏範1984「前方後円墳における築造企画の展開-巨大古墳にみられる吉備と畿内-」『橿原考古学研究所論集』6 257～298頁
 上田宏範1996『前方後円墳』学生社
 宇垣匡雅2004『森山古墳・両宮山古墳』山陽町文化財調査報告第2集 山陽町教育委員会
 宇垣匡雅2005『両宮山古墳』赤磐市文化財調査報告第1集 赤磐市教育委員会
 岡山県1986「両宮山古墳」『岡山県史 考古資料』
 岸本直文1992「前方後円墳築造規格の系列」『考古学研究』39-2 考古学研究会 45～63頁
 新納泉2011「前方後円墳の設計原理試論」『考古学研究』58-1 考古学研究会 16～36頁
 沼澤豊2005「前方後円墳の墳丘規格に関する研究（上）」『考古学雑誌』89-2 日本考古学会 1～46頁
 沼澤豊2005「前方後円墳の墳丘規格に関する研究（中）」『考古学雑誌』89-3 日本考古学会 1～24頁
 沼澤豊2005「前方後円墳の墳丘規格に関する研究（下）」『考古学雑誌』89-4 日本考古学会 1～33頁
 春成秀爾1982「備前の大形古墳の再検討」『古代吉備の検討』古代を考える31 1～38頁
 北條芳隆2011「墳丘築造企画論の現状」『古墳時代の考古学3 墳墓構造と葬送祭祀』同成社 34～43頁

第3節 墳丘裾の自然崩落

両宮山古墳は、奈良県や大阪府等に所在する水濠をもつ陵墓等と同じように、溜め池として灌漑用水に利用されていて、古墳築造以降、いくつかの改変が加えられている。現在の内濠水面についても、古墳築造時のものではなく、江戸時代と考えられる中堤のかさ上げにより水量を増した結果の水面である。

平成25年度に墳丘裾の自然崩落の現状を記録し保存工事の資料とするため、前方部前面の墳丘裾について地上からの三次元計測を実施した（図39）。

平面図 10cm 間隔の等高線図を見ると、墳丘の遺存状況は一目瞭然である。前方部南西角の汀線より上の第1段テラスの残存状況がNo.2・3の間の崩落を境に異なる。この北東側はかなり等高線が密で、第1段テラスの痕跡が全く読み取れない。一方で、この南西側は等高線間隔が緩く、第1段テラスの痕跡が把握できそうである。発掘調査結果でも平面図の所見とほぼ一致する結果を得た。

断面図 現汀線が大きく浸食され、その上部が庇状に残る。浸食が墳丘の奥の方まで見られるのは、標高20.0mである。これは、現在の溜め池満水時の19.85mから波浪を受けて浸食されたことによる。庇の前面から奥行2.6mを測るところもある。この浸食は江戸時代に中堤に盛土してかさ上げを行い、水量を増した結果の浸食である。古墳築造時に滞水していたとしても、汀線はさらに低い位置となる。

このたびの調査は、現汀線の浸食と崩落を防止するための保存整備工事の事前調査である。浸食によって庇状になった墳丘裾は、庇の重量を支えきれなくなった時点で崩落を生じることになる。墳丘や堤の浸食過程については、書陵部紀要に詳しい⁽¹⁾。両宮山古墳の場合、樹木の根が庇になったところに生えているため、その崩落を遅らせているように見えるが、根と一緒に崩落すれば、かなり大きな崩落となることは明らかであり、墳丘樹木の間伐も必要となろう。

註

(1) 笠野毅・福尾正彦1995「履中天皇百舌鳥耳原南陵の墳丘外形及び出土品」『書陵部紀要』46 宮内庁書陵部

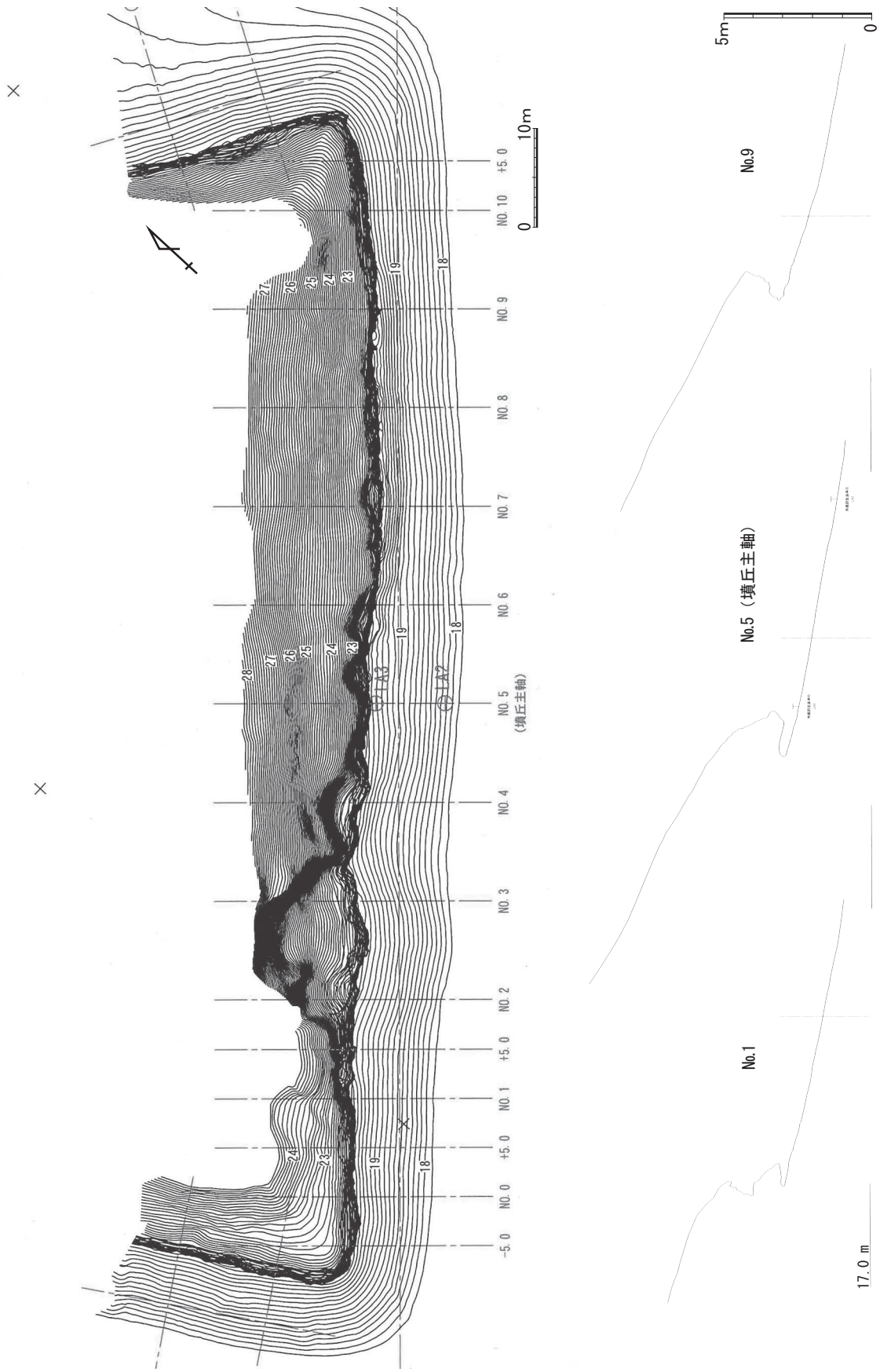


図39 前方部前面 平・断面図 (1/600・1/200)

遺物観察表

掲載 番号	調査 区	種別	器種	計測値(cm)			色調	残存状況	形態・手法の特徴など
				口径	底径	器高			
1	T73	土師質土器	小皿	(9.0)	(7.0)	1.3	にぶい黄橙10YR7/4	底～口縁部1/6	
2	T73	土師質土器	鍋			(3.9)	にぶい黄橙10YR6/3	口縁部小片	
3	T73	備前焼	播鉢	(30.4)		(5.1)	にぶい橙5YR7/4	口縁部小片	
4	T73	備前焼	播鉢	(31.4)		(4.2)	赤橙10R6/6	口縁部小片	
5	T73	肥前磁器 (波佐見焼)	碗		7.6	(3.6)	釉：透明	高台～体部下半1/6	
6	T73	肥前磁器 (波佐見焼)	碗	(9.6)	(4.6)	(5.0)	素地：灰白5Y8/ 釉：透明	高台部わずか、口縁部 1/8	
7	T73	肥前磁器 (波佐見焼)	皿		4.0	(2.6)	釉：透明	高台～体部下半	
8	T73	瓦	平瓦	(12.4)	(9.6)	2.4	浅黄2.5Y7/3		凹面布目 凸面格子叩き
9	T73	瓦	平瓦	(4.8)	(6.1)	2.0	青灰5PB6/1	小片	凸面格子叩き
10	T73	弥生土器	高杯			(5.6)	橙5YR6/6	脚柱部1/4	
11	T55	弥生土器	甕	(18.0)		(3.4)	明黄褐10YR7/6	口縁部1/6	
12	T56	土師器	小皿	8.2	4.6	1.7	橙7.5YR7/6	口縁部1/4欠損	底部糸切り
13	T56	土師器	杯	14.8	8.7	2.8	浅黄2.5Y7/3	口縁～底部1/2強	底部板目
14	T56	土師器	小皿	(9.0)	7.0	1.5	浅黄橙10YR8/3	口縁～底部1/6	
15	T56	土師器	碗		5.8	(1.2)	橙7.5YR7/6	高台1/2強	
16	T56	土師器	杯		9.8	(0.8)	浅黄橙10YR6/6	底部のみ	底部回転ヘラ切り後板目
17	T56	吉備系 土師質土器	碗		4.4	(1.5)	浅黄橙10YR8/4	高台～碗体部	
18	T56	吉備系 土師質土器	碗		5.0	(1.0)	灰白2.5Y8/1	高台～碗体部	
19	T56	土師器	杯		10.0	(2.5)	にぶい黄橙10YR7/3	底部1/3	底部板目
20	T56	土師器	杯		7.0	(1.1)	にぶい黄橙10YR7/4	底部1/6	
21	T56	吉備系 土師質土器	碗		6.0	(1.2)	灰白2.5Y8/2	底部1/4	
22	T56	土師器	杯		6.6	(2.0)	浅黄橙10YR8/3	底部	托状
23	T56	土師器	杯		8.0	(1.7)	浅黄橙7.5YR8/4	底部1/4	底部ヘラ切り
24	T56	土師器	小皿		8.4	(1.3)	橙5YR7/6	底部1/6	
25	T56	土師器	碗?		4.0	(1.7)	浅黄橙10YR7/3	高台	
26	T56	土師器	杯		9.6	(1.2)	浅黄2.5Y7/4	底部	底部ヘラ切り後板目
27	T56	土師器	碗?		8.8	(2.2)	にぶい黄橙10YR7/4	底部1/6	
28	T56	土師器	杯		6.2	(1.6)	橙7.5YR6/6	底部1/4弱	底部糸切り
29	T56	土師器	杯		9.0	(1.8)	にぶい黄橙7.5YR7/4	底部1/6以下	
30	T56	須恵器	杯蓋?			(0.7)	灰N5/	口縁部小片	
31	T56	瓦	平瓦	(8.8)	(9.1)	2.2	灰白2.5Y8/1		凹面布目、凸面格子叩き
32	T56	瓦	軒平瓦	(12.0)	(13.9)	4.5	灰白5Y8/1	瓦当文1/2	連珠文

掲載 番号	調査 区	種別	器種	計測値(cm)			色調	残存状況	形態・手法の特徴など
				口径	底径	器高			
33	T56	瓦	軒平瓦				暗灰N3/	瓦当文下部1/3	唐草文、中心宝珠
34	T56	備前焼?	水屋甕	(16.0)		(7.4)	灰N5/	口縁～肩部1/8以下	耳貼付
35	T57	土師器	小皿	8.3	3.8	1.6	橙7.5YR6/6	口縁～底部2/3	底部糸切り
36	T57	土師器	小皿	7.8	5.0	1.5	にぶい黄橙10YR7/4	ほぼ完形	底部糸切り
37	T57	土師器	杯?		5.0	(1.5)	橙7.5YR7/6	高台1/2弱	
38	T57	土師器	杯	(13.0)		(2.5)	橙7.5YR7/6	口縁部1/4	
39	T72	土師器	小皿	(11.0)	(9.6)	1.1	橙7.5YR6/6	底部1/6、口縁部わずか	
40	T72	土師器	小皿		(9.8)	(1.0)	橙7.5YR7/6	底部1/6	
41	T72	肥前陶器	片口鉢	(22.0)		(4.1)	素地：にぶい橙2.5Y6/4 釉：灰白2.5Y8/2黄灰2.5Y5/1	口縁部小片	
42	T72	肥前陶器	片口鉢	(18.2)		(5.9)	橙2.5YR6/6	口縁部小片	
43	T72	肥前磁器	碗		4.8	(2.9)	素地：白 釉：透明	高台～体部下半1/4	外面に「寿」
44	T72	肥前磁器 (波佐見焼)	皿	(13.0)	(7.0)	3.0	素地：明青灰5PB7/1 釉：透明	口縁～高台部1/6	
45	T72	明染付?	碗?		5.4	(1.7)	素地：灰白5Y8/2 釉：乳白	高台部	見込に「宝」、裏に「福」
46	T72	肥前磁器	碗			(3.3)	素地：灰白5Y8/1 釉：透明	口縁部小片	
47	T72	萩焼				(3.0)		口縁部小片	ピラ掛け
48	T72	備前焼	搦鉢	(24.0)		(4.2)	灰N6/	口縁部小片	
49	T72	備前焼	搦鉢	(34.0)		(5.3)	にぶい赤褐2.5YR5/4	口縁部小片	
50	T72	備前焼	鉢	(34.0)		(5.2)	灰赤2.5YR4/2	口縁部小片	
51	T72	土師質土器	焙烙	(37.2)		(2.5)	暗灰黄2.5Y5/2	口縁部小片	
52	T72	土師質土器	焙烙	(31.0)		(1.3)	黄灰2.5Y4/1	口縁部小片	
53	T72	土師質土器	羽釜			(6.0)	暗灰黄2.5Y5/2	片部小片	
54	T60	弥生土器	甕			(2.4)	橙5YR6/6	口縁部小片	
55	T60	弥生土器	甕?		6.2	(1.8)	橙2.5YR6/8	底部1/4	
56	T60	弥生土器	甕?		7.0	(3.2)	にぶい橙7.5YR7/4	底部1/6	
57	T71	弥生土器	器台		(28.0)	(4.9)	明赤褐5YR5/6	脚裾部小片	
58	T61	弥生土器	高杯		12.0	(3.5)	にぶい橙7.5YR7/4	脚部1/6	
59	T62	弥生土器	甕 or 壺	(14.0)		(1.1)	明褐7.5YR5/6	口縁部1/8以下	
60	T62	弥生土器	甕 or 壺			(3.3)	にぶい黄橙10YR7/3	底部小片	
61	T62	弥生土器	甕 or 壺		3.4	(2.4)	橙2.5YR6/6	底部1/2弱	
62	T62	弥生土器	鉢?	(14.0)		(3.4)	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部1/8以下	
63	T62	弥生土器	甕 or 壺			(1.7)	橙5YR6/6	口縁部小片	
64	T63	肥前磁器 (青磁染付)	碗		4.0	(2.2)	素地：灰白10Y8/1 内釉：明緑灰7.5GY8/1 外釉：オリブ灰10Y6/2	高台～体部下半1/2	コンニャク印判の五弁 花文
65	T63	肥前磁器	碗		4.0	(2.9)	素地：灰白N8/ 釉：明緑灰7.5GY8/1	高台～体部下半1/4	割筆網文
66	T63	肥前陶器	片口鉢				素地：にぶい橙2.5YR6/4 内釉：灰白2.5Y8/1 外釉：黒褐2.5Y3/2	高台～体部1/6	

掲載 番号	調査 区	種別	器種	計測値(cm)			色調	残存状況	形態・手法の特徴など
				口径	底径	器高			
67	T63	備前焼	播鉢	(31.6)		(6.3)	灰N5/	口縁部小片	
68	T63	備前焼	播鉢			(3.4)	褐灰5YR4/2	口縁部小片	
69	T63	瓦	平瓦	(9.8)	(8.0)	2.1	浅黄橙7.5YR8/4		凹面布目、凸面縄目叩き
70	T64	弥生土器	甕or壺			(2.9)	浅黄橙10YR8/4	口縁部小片	
71	T64	肥前陶器 (陶胎染付)	椀		4.8	(5.2)	素地：灰白5Y7/1 釉：明オリープ灰2.5GY7/1	高台～体部1/6	
72	T64	肥前陶器	片口鉢	(21.0)		(3.3)	素地：にぶい橙5YR6/4 釉：褐7.5YR4/3	口縁部1/8	
73	T64	肥前磁器	碗		3.5	(4.1)	素地：白 釉：灰白2.5GY8/1	高台～体部1/2	割筆網文
74	T64	備前焼	播鉢			(5.9)	暗赤褐2.5YR3/3	口縁部小片	
75	T64	備前焼	播鉢	(32.4)		(4.1)	明赤褐5YR3/3	口縁部小片	
76	T64	備前焼	播鉢	(31.6)		(3.4)	灰褐7.5YR4/2	口縁部小片	
77	T64	備前焼	播鉢	(28.0)		(6.2)	橙2.5YR6/6	口縁部小片	
78	T64	弥生土器	高杯	(16.0)		(3.5)	橙5YR7/6	口縁部小片	
79	T64	青磁	碗?			(2.3)	明緑灰7.5GY7/1	体部小片	
80	T64	備前焼	甕	(26.0)		(6.4)	明赤褐2.5YR3/4	口縁～肩部1/8以下	
81	T64	瓦	軒丸瓦				灰7.5Y6/1	瓦当文1/2	菊花文
82	T64	瓦	平瓦	23.7	14.8	1.8	灰N6/	完形	
83	T66	肥前陶器 (内山系)	椀		4.4	(2.4)	素地：淡黄2.5Y8/3 内釉：緑灰10GY5/1 外釉：浅黄5Y7/4	高台部	
84	T66	肥前磁器	碗	10.0		(3.0)	素地：灰白N8/ 釉：透明	口縁部1/4	割筆網文
85	T66	肥前陶器 (内山系)	椀		4.2	(3.1)	素地：橙7.5YR6/6 釉：にぶい黄2.5Y6/4	高台～体部下半	
86	T66	肥前陶器	片口鉢	(23.0)		(3.6)	素地：にぶい橙5YR6/4 釉：にぶい黄褐10YR4/3	口縁部小片	
87	T67	弥生土器	壺	(8.8)		(3.0)	浅黄橙10YR8/3	口縁部1/4	
88	T67	弥生土器	甕	(12.8)		(3.8)	浅黄橙10YR8/3	口縁部小片	
89	T67	弥生土器	甕	(11.4)		(5.6)	浅黄橙10YR8/3	口縁部小片	
90	T67	弥生土器	高杯			(6.0)	にぶい黄橙10YR7/4	脚柱部1/4弱	
91	T67	弥生土器	高杯		7.0	(2.5)	橙5YR6/6	脚部1/6	円形透かし孔
92	T67	須恵器	壺	(18.0)		(4.2)	灰5Y6/1	口縁部小片	
93	T67	備前焼?	播鉢	(23.0)		(2.7)	灰褐7.5YR5/2	口縁部小片	
94	T68	弥生土器	高杯			(2.3)	橙7.5YR7/6	口縁部小片	
95	T68	備前焼	鉢	(12.0)	(12.8)	7.7	にぶい橙2.5YR6/4	口縁～底部1/6	
96	T68	備前焼	播鉢		12.0	(3.3)	赤灰2.5YR5/1	底部1/6	
97	T69	埴輪	円筒埴輪	(4.0)	(4.1)	1.1	にぶい橙7.5YR7/4	筒部小片	タガ、外面ヨコハケ
98	表面 採集	須恵器	杯身			(1.8)	灰N6/	受部小片	
99	表面 採集	弥生土器	高杯			(7.8)	にぶい黄橙10YR7/4	杯体部～脚柱	

*口径の()は復元数値、器高の()は残存長



1 両宮山古墳全景（南西から）



2 墳丘（南から）

図版2



1 後円部（西から）



2 南西造り出し（北西から）



3 前方部（南から）

1 T53
(南西から)



2 T54
(南から)



3 T55
(南から)



図版4



1 T73 (南西から)



2 T56 遺物出土状況 (南から)



3 T56 (南西から)

1 T57
(南西から)



2 T72
(南西から)



図版6



1 T72上半
(南西から)



2 T72下半
(南西から)



3 T58
(南西から)

1 T58
(南から)



2 T59
(南から)



3 T60
(南から)



図版8



1 T60上半 (南から)



2 T60下半 (南から)



3 T71
(南西から)



1 T71上半 (南西から)



2 T71下半 (南西から)



3 T61 (南から)



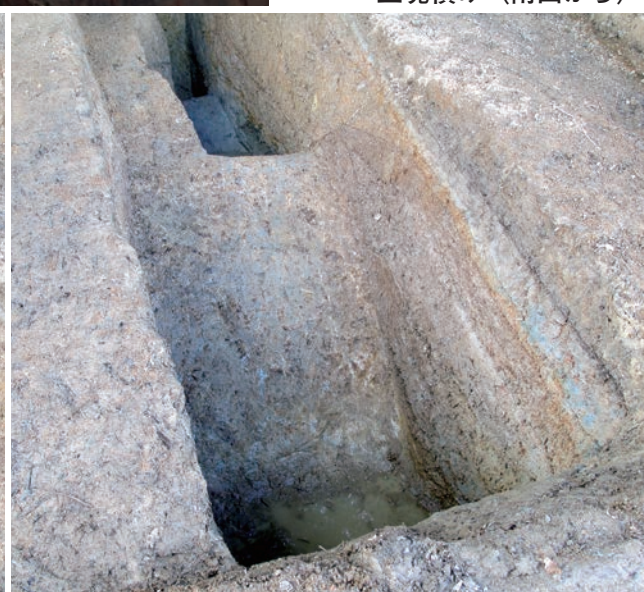
1 T62下段
(南から)



2 T62下段
土塊積み (南西から)



3 T62下段 溝 (南西から)



4 T62下段 傾斜変換点 (南から)

1 T62上段
(南から)



2 T63
(南東から)



3 T63 溝
(南から)





1 T64下段
(南東から)



2 T64上段
(南東から)

1 T64上段
残存墳丘面
(南東から)



2 T65
(南から)



3 T66下段
(南から)





1 T66上段（南から）



2 T67下段（北東から）

1 T67下段
土塊積み（東から）



2 T67下段
土塊積み（北東から）



3 T67下段
盛土（南東から）





1 T67上段 第1段テラス～第2段斜面（東から）



2 T67上段 第2段斜面（東から）



3 T67上段 第1段テラス（東から）

1 T68
(東から)



2 T68
盛土 (東から)

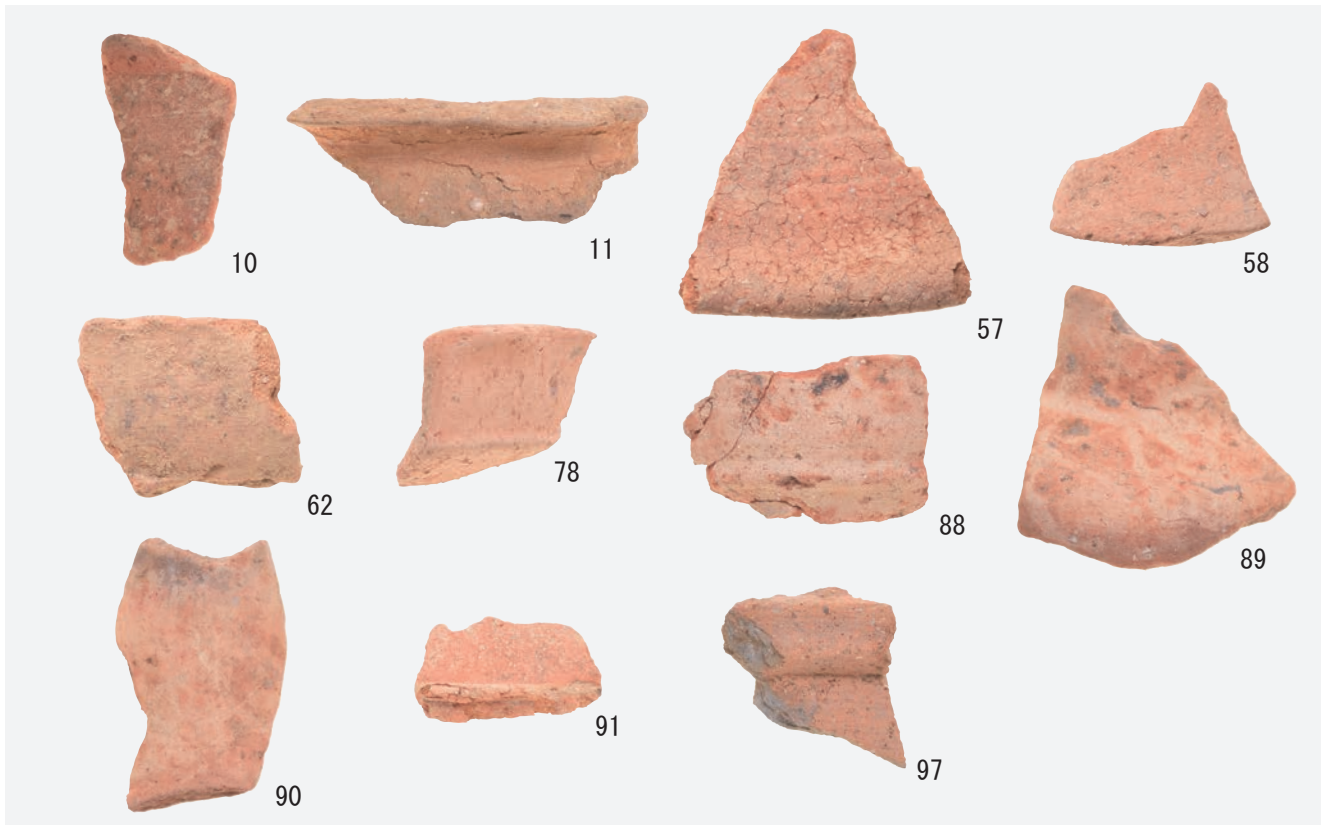


3 T69
(南東から)



4 T70
(南東から)

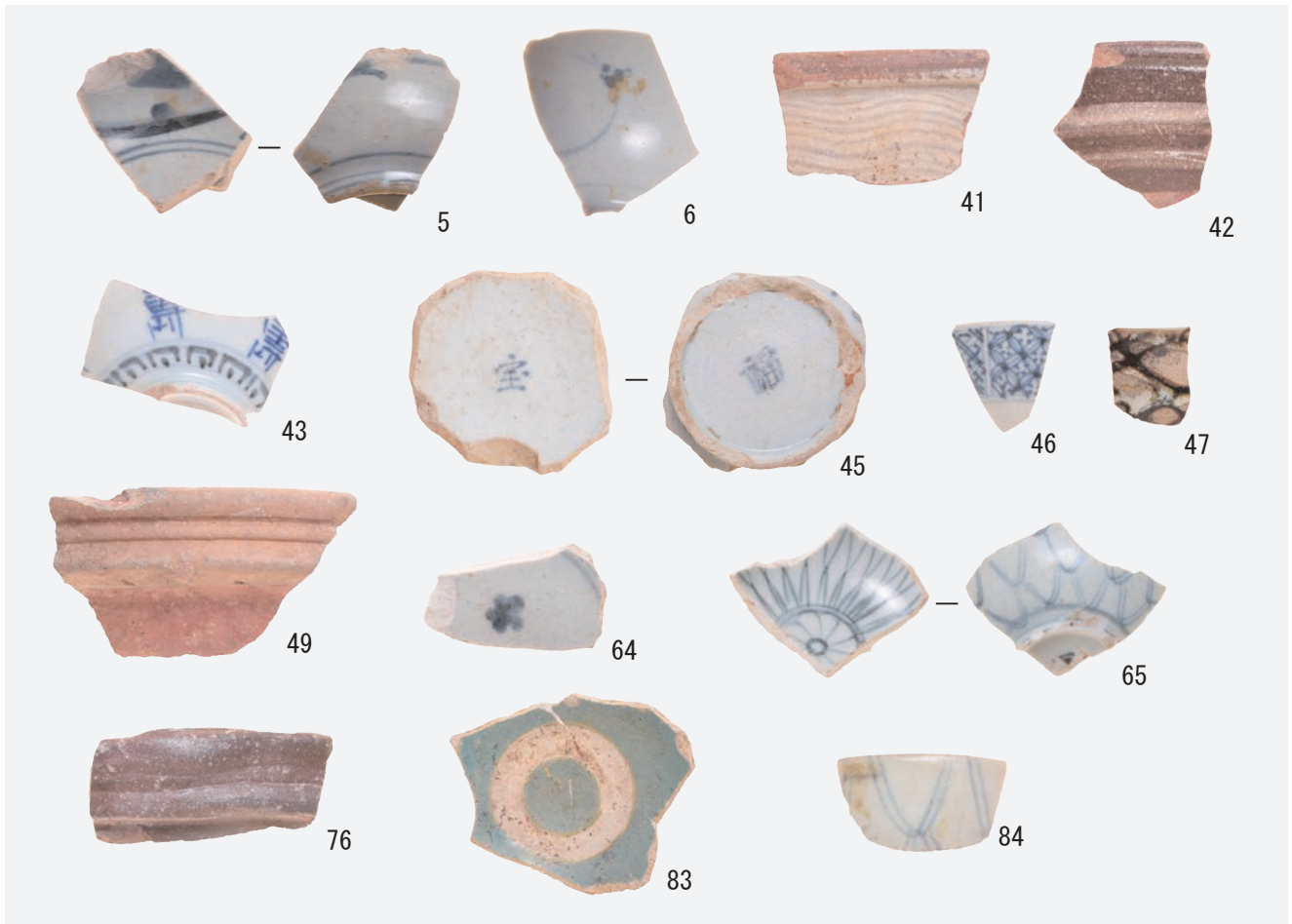




1 古墳時代以前の遺物



2 中世の遺物



1 近世の遺物



2 和田村山絵図



3 和田村分検見取



両宮山古墳オルソ画像



两宫山古墳赤色立体地图



両宮山古墳測量図（航空レーザ計測による）

報告書抄録

ふりがな	りょうぐうざんこふん							
書名	両宮山古墳2							
副書名	史跡両宮山古墳墳丘裾保存整備工事に伴う確認調査							
シリーズ名	赤磐市文化財調査報告							
シリーズ番号	12							
編著者名	有賀祐史(編) 金田善敬							
編集機関	岡山県赤磐市教育委員会							
所在地	〒709-0816 岡山県赤磐市下市337 TEL:086-955-0710 FAX:086-955-0758							
発行年月日	2018年2月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 (㎡)	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
りょうぐうざんこふん 両宮山古墳 (第4次)	おかやまけんあかいわし 岡山県赤磐市 ほさき 穂崎	33213	333220231	34°44'24"	134°0'8"	20140114 ～ 20140313	88.8	活用目的 調査
(第5次)						20150114 ～ 20150313		
(第6次)						20151201 ～ 20160229		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
両宮山古墳	古墳	古墳時代	墳丘第1段～第2段斜面		弥生土器、土師器、 須恵器、埴輪、 陶磁器類	前方部第1段の盛土を確認。前方部前面において墳端を推定する傾斜変換点を把握。前方部第1段テラス標高を推定。		
要 約	<p>両宮山古墳は5世紀後半の築造で、水をたたえた内濠をもつ優美な前方後円墳として知られる。内濠の外側には中堤、外濠および陪塚と考えられる和田茶臼山古墳が所在する。</p> <p>内濠は農業用溜め池として利用されており、長年の内濠波浪によって墳丘裾の浸食・崩落が懸案となっていた。このたび、この浸食・崩落から墳丘を保護する対策を検討するために、水に面した墳丘第1段斜面を中心に、場所によっては第2段斜面までの確認調査を実施した。</p> <p>調査の結果、前方部前面において墳端と推定可能な傾斜変換点を確認した。しかしながら、その直上の堆積土は近世と考えられ、溜め池の浚渫等で削平されている可能性がある。前方部前面における墳端は、満水時の汀線より内濠側に5～7m程長くなると推定される。後円部西側や前方部側面では傾斜変換点は把握できなかったが、くびれ部において中世以前の堆積層下に地山の第1段斜面を検出した。後円部の第1段斜面は流出が大きい、前方部側面の第1段斜面は20°後半～30°前半の傾斜であったと考えられる。さらに、前方部第1段は前面を中心に盛土で構築されているが、小さな単位の盛土である土塊積み認められた。</p> <p>外表施設の葺石・埴輪はこれまでの見解どおり確認されなかった。</p>							

赤磐市文化財調査報告 第12集

両宮山古墳 2

史跡両宮山古墳墳丘裾保存整備工事に伴う確認調査

平成30年 2月27日 印刷

平成30年 2月28日 発行

編集・発行 岡山県赤磐市教育委員会
岡山県赤磐市下市337

印刷 山陽印刷株式会社
岡山県岡山市北区富吉3098-1
